

靈界物語 第六四卷上 山河草木 卯の卷上

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第六四卷上』愛善世界社

2004(平成16)年02月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

第三章 聖地夜せいちよ〔一六三二〕

第四章 訪問客はうもんきやく〔一六三三〕

第五章 至聖團しせいだん〔一六三四〕

第二篇 聖地巡拜せいちじゆんぱい

第六章 偶像都ぐわうのみやこ〔一六三五〕

第七章 巡禮者じゆんれいしや〔一六三六〕

第八章 自動車じどうしゃ〔一六三七〕

第九章 膝栗毛ひざくりげ〔一六三八〕

第一〇章 追懷念ついくわいねん〔一六三九〕

第三篇 花笑蝶舞くわせうてふぶ

第一章 公憤私憤（一六四〇）

第二章 誘惑（一六四一）

第三章 試練（一六四二）

第四章 荒武事（一六四三）

第五章 大相撲（一六四四）

第六章 天消地滅（一六四五）

第四篇 遠近不二

第七章 強請（一六四六）

第八章 新聞種（一六四七）

第九章 祭誤（一六四八）

第十章 福命（一六四九）

第十一章 遍路（一六五〇）

第二章 妖行（一六五一）

第五篇 山河異涯

第二三章 暗着（一六五二）

第二四章 妖蝕（一六五三）

第二五章 地圖面（一六五四）

第二六章 置去（一六五五）

第二七章 再轉（一六五六）

（
（
（
（
（
（
（
（
（
（

序じよ

おほもとさんだい
大本三代の結婚問題や瑞月全集の校正その他天聲社の改革等にて、四月より本
月まで口述するの閑暇もなく、又身體も非常に疲勞したるため本書の著作の抄ら
ざりし事を甚だ遺憾に思ひます。本巻は特別篇として現代のエルサレムを背景に
小説的に口述したもので他の巻とは大に趣を異にして居ります。救世主の再臨を
脚色したもので果して之が事實として將來に實現するや否やは、口述者自身に取
つて判らないのであります。

大正十二年七月十三日 舊五月三十日

物質界の凡ての欲望を脱却し一意専心神靈世界の建設に没頭せる救世主が、數
 多の部下の誤れる信仰のために種々の苦難を嘗め、精神的に孤獨となりし淋し
 さに、日出島を跡にして神の選みたまひし聖地に再臨すべく、その準備として、秘
 藏の弟子を選びてはるばる出立せしめたる所へ、ユラリ教の教主自稱日の出神の
 生宮のお寅婆アさまが三人の弟子を伴ひ、その跡を追ひて極力妨害を試み、自ら
 救世主と名乗りて獅子奮迅の躍動をなす至極滑稽な物語であります。

大正十二年七月十三日 舊五月三十日

第一篇 日下開山
ひのしたかいさん

第一章 橄欖山（一六三〇）
かんらんざん

エルサレムの郊外かくわいにアメリカン・コロニーと云いふ宏壯くわうきやうな建築物けんちくぶつがあつて、雲くもを壓あつして聳そびえ立つて居ゐる。今いまより四十年しじふねんばかり以前いぜんに、アメリカからスバツフォー
ドと云いふ猶太人ユダヤじんが、基督キリストの再臨さいりんが近づちかづいて、その場所ばしよは橄欖山かんらんざんの頂上ちやうじやうだといつて
基督キリストを迎むかへる準備じゆんびのために來きて居をつたのが抑おさの始はじりまで、其後そのごは國籍こくせきや人種じんしゆの異同いどう
を問とはず、基督キリスト再臨さいりんを信しんずる人々ひとびとが是これに加くははつて、自分等じぶんらの財産ざいさんを全ぜん部提出ぶていしゆつして
共同生活きやうせいくわつを行やつて居ゐる。各自かくじがその分ぶんに相應さうおうして働はたらいて得えた利益りえきは、之これを共同生きやうせいくわつ
活わつの爲ために使用しようすると云いふ基督教的キリストけうてきの精神せいしんに基もとづいて一つの團體だんたいが組織そしきさるるに致いたつた。
その創立さつりつの最初さいしよには、人々ひとびとは非常ひじやうに狂信きやうしん的てきで、自分じぶんの年頃としころになつた時ときも結婚けつこんさへ
しなかつたものだが、現時げんじは人々ひとびとの考かんがへ方かたが餘程よほど自由じゆうになり、團體員だんたいいんの中なかで結婚けつこん

をする様になり、幾組かの家庭が出来て今の團體員は第二の時代の人々である。全體で約壹百人ばかりで、互に兄妹と呼び合つて居る。國籍は種々で、一番に多いのがスエーデン人である。そしてアメリカンコロニーと云ふ名稱が附されてある。創立者が亞米利加人であつたから此名を附することになつた。現今ではアメリカ人は數名に過ぎない。ユダヤ人は十數名集つて居る。

創立者の息子スバツフォードは熱烈な信仰者で、マグダラのマリヤと云ふ猶太人の婦人が加はつて居る。この婦人は、殆どスバツフォードと相並びて、アメリカンコロニーの牛耳を採り大活動を續けて居る。そして三十歳を過ぎたるにも拘らず獨身生活をやつて居る。この團體員は、何れも身の一切を主の神に任せ切つて居る態度と云ひ、人類に對する愛の發現と云ひ、到底他で見ること出来ない美しさである。凡ての猶太人は、この神の廣い教旨を聞いて居るに關はず、民族的偏見に囚はれ、彼等は特有な、いい意味のヂレッツタント的の性質から此の域まで深く達し得る者の少いのに、彼團體員は神意を克くも體得し、抱擁歸一博愛平等の大精神を有して居る公平無私な態度には、感歎せざるを得ないのである。

スバツフオードは朝早くから、一間に立籠り熱心に神の宣示を祈つて居る。そこへマグダラのマリヤが、少し顔色を赤らめながら忙しげに走り來たり、兩手を突いて、

「聖師様、妾は何だか昨夕から身體の様子が變つて來た様で御座いますが、一つ何神の歸神なりや、ただしはサタンの襲來なりや、嚴重なる審判神をして戴き度う御座います」

聖師はマリヤを一瞥して、眉をひそめながら、
「成程、貴女は御様子が變ですよ。どうれ、私が及ばず乍ら審神者を勤めさして頂きませう。随分強烈な感じ方ですわ」

マリヤは、

「何分よろしく御願ひ申上げます」

と言つた限り、聖師の前に座を占め兩手をキチンと胸のあたりに組合せ、

「この方は大黒主の神、八岐大蛇の守護神であるぞよ。汝スバツフオードよつく

聞け、メシヤの再臨を夢想して、今日まで殆ど四十年間數多の愚人を誑惑し來つた横道者奴、メシヤなぞがこの聖地に降つて何になるか」
「是は怪しからぬ。汝は今自白いたした八岐大蛇の化神惡神の張本、吾が言靈の神劍の威力を知らぬか」

「アハ、ハ、ハ、今此方が憑依して居るマリヤなるものは、汝と同様に無智迷障の婦人到底度し難き代物なれ共、憑るべき身魂なき故に、不満足ながらも此方が御用に使つたのだ。この婦人はユダヤの生れ、神の選民と申して威張つて居るに由つて、懲しめの爲この肉體を臨時苦しい用に使つたのだ。其方も東方の星とか、メシヤが日出島より再臨するとか申して、夢幻の境遇にさまよふ馬鹿者、この方の託宣を耳を洗つて謹みて承はれ。今より三千年以前に、パレスチナの本國を他民族に奪はれ、世界到る處に於て虐げ苦しめられ、無籍者の癩に吾々は天の選民なりと主張し、メシヤを待ち望みて居るではないか。左様な根據もなき妄想に耽るよりも、心を改めてこの方の言葉を承はり、汝ら民族のために全力を盡す心はなきや」

現代の如き常闇の世となれば、到底今日までの宗教や政治の行り方では駄目だから、吾々は大聖主メシヤの再臨を待つて居るのだ。聖書の中にも、吾々猶太民族が天下を支配すべき神権を保有することは明かに示されてある。故に吾々はこの豫言の實現すべきことは確信して居る。然し乍ら、この世界は神の保護を離れては無事泰平なることは出来得ない。就ては超人間的の大偉人即ちメシヤが現れなくては如何とも成すことは出来ない。それ故に吾々は神を信じ神を愛し、何事も惟神に任せて行動して居るのだ。汝何れの魔神かは知らねども、吾々の信仰に對して妨害を加へむとするか。悪神の覇張つた世の中は今迄の事だ。今日は最早メシヤ再臨の時期に近づいたのだから、悪神の出で威張る時ではない。一時も早くマリヤの肉體より退出いたせ

と威丈高に詰問すれば、マリヤの憑靈は大口開けて高笑し、

「アハ、、愚なり汝スバツフオード、汝の四十年來待ち焦れて居るメシヤと稱するものは、無抵抗主義を標榜せる瑞の御靈と申す腰拔人物だ。この方の幕下の神のために散々に苦しめられ、聖場を破壊され、身の置き所を失つて仕方なしに、

此パレスチナの國へ逃げ來たらむとして居る狼狽へものだ。手具脛曳いて待つて居る大黒主山田嵐の此方の繩張内へウカウカ來る大馬鹿ものだ。左様なものをメシヤと稱して待つて居る其方等の心根が可憐しいわい。アハ、ハ、ハ、ハ、兔角現世は權力と金の世界だ。黄金萬能主義だ。世界の富を七分まで占領いたして居るユダヤ人は大黒主の何れも幕下だ。汝は同じユダヤに生を享けながら不心得千萬、高砂島のメシヤを待望するとは何の事眞正のメシヤはこの方山田嵐様だ。世界の所在強大國を片端から崩壊させたのは、皆この方の三千年來の經綸の賜だ。今にも一つの高砂島を崩壊すれば、三千世界は大黒主山田嵐の意の儘だ。諺にも時の天下に從へ、長いものには巻かれよと申すではないか。三千年以來結構な神の國をキリスト敎國に占領せられ、神の選民は所在輕蔑と迫害とを蒙つて來たユダヤの元の聖地を取返したのも皆此方が經綸の現はれ口、サア是よりは山田嵐様の天下だ。汝等も今の間に改心致してメシヤ再臨の妄想を止めないと、臆ては吞噬の悔を遺すであらう」

「吾々は國籍は假令ユダヤに置くとともに、眞の神の選民である。汝等の如き惡神の

選民では無い。今日のユダヤ人は眞の神を忘れ汝如き邪神の幕下となり、體主靈
從的行動を以て、九分九厘まで世界を惑亂いたして來よつたが、モハヤ惡神の運
の盡きだ早く改心致したが良からうぞ」

「テモ扱ても愚鈍な奴だなア。汝は愛國心のない大癡漢だ。汝等の祖先は何れも
キリスト教國に壓迫され、アラビヤの荒野に四十年の艱苦を嘗めた事を知らぬか。
今迄は彼のキリスト教國の天下であつたが、世は廻り持ちだ。何時までも持ち切
りには爲せられないぞ。今に山田嵐の守るユダヤ民族が全世界を支配したすのだ。
丑寅の金神なぞが種々と此方の仕組の邪魔を致したるに由つて、高砂島へ追ひや
つたのも一つの仕組だ。大江山の酒呑童子と現はれて、一時活動を續けたのも矢
張り此方大黒主山田嵐様だ。然し乍ら時期未だ來らずと感、一旦引揚げ、この
パレスチナに於て萬事抜目なき計畫を廻らし、漸くパレスチナの本國を手に入れ
た以上は、如何に天下廣しと雖も、モハヤ此方の自由だ。シオン團の活動も、ユ
ダヤ民族の熱烈なる信仰力も皆この方の守護のためだ。アハ、ハ、ハ、」

「シオンとは日の下又は日向と云ふ意味では無いか。日の下は神の國だ。その神

の國は高砂島だ。神の國よりメシヤを迎へるのは當然ぢやないか。其方の言葉は實に自家撞着の甚だしきものだ。最早吾々に用は無い。早くマリヤの肉體より脱出したさぬか」

「アハ、日の下とは即ちパレスチナの事だ。太陽は東より昇り、中天に來た所を日の下といふではないか。高砂島は東の國即ち日の出島だ。世界の中心は太陽の眞下だ。試みにパレスチナを中心として、約七千哩、八千哩の半徑を以て大きな圓環を引廻して見よ。八千哩東に當つて高砂島がある。西八千哩にメキシコあり、北六千八百哩に、ナウルエーが皆這入つて居る。世界に於ける國と云ふ國は皆この圓環の内に這入つて居る。斯る尊きパレスチナこそ世界の中心だ、日の下だ、日向の國だ。爰に國を建てたのは即ち此方の仕組だ。何を苦みて、高砂島から雲に乗つて來るとかいふキリスト教の神を待つ必要があるか。馬鹿だのう」と怒鳴り立てる。

聖師は一生懸命に大神に祈願をなし、天津祝詞を奏上するや、流石の大黒主山のをろち田風も聖師の言靈の威力に打たれマリヤの肉體を其場に倒して逃げ去つて了つた。

マリヤは初めて正氣になり、

「聖師様、妾には何だか憑依して居たやうで御座いましたなア。善神でせうか邪神でせうかなア」

「イヤ最う、大變な元氣な事を言ふ神で御座いましたが、私の祈願に依つて漸く貴女の體を退却しました。油斷のならぬことに成つて來ました。惡神の仕組も餘程進みて居りますから、吾々團員は餘程しつかり致さねばなりません。然し乍ら誠の大神様が邪神と化つて、吾々の信仰をお試しになつたのでは有るまいかと俄にソナナ氣分になつて來ました」

「吾々は何處までもメシヤの再臨を信じて父祖以來待つて居るのですから、今になつて心を變へることは到底出來ませぬからなア」

「左様です。お互にその心で居りませう」

「聖師様、妾は何だか俄に橄欖山へ登りたくなりましたから、一寸參拜して參ります。何だかメシヤ様に遇はれる様な心持がいたしますから」

「貴女は平素から立派な靈感者だから、何か神様の御都合があるのかも知れませ

ぬ。早く参つてお出でなさいませ」

「ハイ有難う。後は宜敷くお願いいたします」

といそいそとして輕装の儘、エルサレムの停車場へと知らず知らず何ものにか引かるる心地して驛前に着きける。

(大正一二・七・一〇 舊五・二七 出口鮮月録)

第二章 宣傳使(一六三一)

カンタラ驛からスエズ運河を横ぎつて、エルサレム行の軍用列車に乗り込みし一人の東洋人ありき。汽車は茫茫たる大砂漠の眞中を一瀉千里の勢で馳走して居る。窓外は、森林も田畑も、河川も村落も人の影さへも、眼に入らない寂寥さである。所々に小屋の様な、殺風景な停車場が黙々として建つて居る。シナイ山は遙の遠方にボンヤリと霞んでゐる。ユデヤの高地に掛つたと見えて、丘が刻々に

急勾配になつて、橄欖の樹が窓外に追々と見えて来る。四十歳前後の、一人の眼のクルリとした色の淺黒い、何處ともなしに凜々しい東洋人らしき宣傳使は、高砂島から派遣されて數十日間の海洋を渡り、メシヤ再臨の先驅として神の命により遙々出て來たルートバハーの教主ウヅンバラ・チャンダーに先だつて來た、ブラバースと云ふ紳士なり。

ブラバースは世界各國の言語にも通じ、且つ近來流行のエスペラント語にも精通し居たり。それ故特にルートバハーの宣傳使として拔擢され、萬里の海洋を打渡り、異域の空に聖跡を尋ねてメシヤ再臨の先鋒として赴任したのである。このブラバースには郷國高砂島に一人の妻と一人の愛娘が残つて居る。ブラバースは窓外の際隈もなく廣く展開せる砂漠を眺めて、聖者の古の事蹟を思ひ浮べ、感慨無量の體で吐息を漏らし居たり。

隣席に控えてシガーを熏らして居た白髮の老紳士は、ブラバースの傍近く寄つて、さも馴々しげに握手を求めた。ブラバースは海洋萬里の不見不識の國で同じ車上に於て握手を求められたのは實に意外の歡びに打たれざるを得なかつた。ブ

ラバーサは直に立つて老紳士と握手を交へた一刹那、百年の知己に逢つた様な懐しさを覺えた。

老紳士は馴れ馴れしく、

「私はバハイ教のバハーウラーと申すものですが、メシヤの再臨の近づきし事を神様より承り、老軀を提げて常世國から今日漸と茲まで無事に到着致しました。貴師は何れより御越して御座いますか。一寸拜顔しただけでも普通の御人とは見えませぬ。聖者と御見受いたしますが、御差支なくば御話しを願ひたいものすな

ア

「ハイ有難う御座います。私も貴師の様な聖者に、異域の空で而も同じ車中に御眼にかかり、互に御道の談を交換さして致たくのは望外の幸ひで御座います。實は私は高砂島の中心地點に宮柱太敷立てて鎮まりたまふ、大國治立大神の御許に仕へ奉るプロパガンディストで、ブラバーサと申すもので御座いますが、暫くエルサレムの靈氣に觸れ、神界の御經綸の一端に奉仕いたしたきものと神命のまにまに遙々出向致しましたものです。何分宗教や信仰には、國籍や人種別などの忌

はしき障壁は御座いませぬから、何卒同胞として親交を願ひます」
「イヤ、お互様に御懇親を願ひませう。私は現代の宗教家の態度に飽き足りない
一人で御座います。同じ太陽の光の下に生育する吾々人類は、何處までも神様の
最愛の御子として、相愛し相助け合つて行かねばなりません。そして凡ての迷信
から脱離した宗教、過去の死神死佛は言ふ迄も無く、懲の生えた形式から解放さ
れた宗教、宗派根性を超越した眞善美愛に徹底した宗教、種々の傳説や附會や迷
信を交へた上に紛雜した教理と註釋に織込まれた曼陀羅的の教典から離脱した宗
教、名實一致、靈肉一體、神人合一、聖凡不二を實現した宗教、其時代に必要あ
つて起れる教祖を以て唯一の救世主となし、教祖の教示を萬世不易の聖言となす
偏狹固陋なる牢獄的信仰の束縛を解いて、萬聖の大集會即ち世界の國會開き
を出現せしむる宏大無邊の宗教、一夫一婦の大道を明示した宗教、世間と出世間
の障壁を除却して、眞に一實在の生ける道を教ふる宗教、善と惡、信者と不信者、
救済と罪惡、天界と地獄とを區別して爭論の種を蒔く狹隘な宗教から脱却して、
心底から親愛の目的として凡ての人類を見る所の眞の救世の宗教、國語、勞働、

國際等の問題、學術と宗教との問題等一切を解決し、世界人類をして平等に光明世界の住民たらしむる權威ある宗教の必要に迫られて、數十年間あらゆる迫害や艱苦と戦つて來たもので御座いますから、貴師もルートバハ一の神使として聖地へ御出張遊ばした以上は、互に神の子の兄弟として相提携し、萬國の民を天界に救ふため、持ちつ持たれつの親交を願ひたきものです」

「バハ一ウラー様、只今貴師の御言葉には實に感服いたしました。私が奉ずるルートバハ一も、その主義精神に於て寸毫の相違點をも見出す事が出来ませぬ。高砂島に於けるルートバハ一の教と、貴教とは東西符節を合する如くで御座いますよ。何うか今後は姉妹教として永遠の親交をお願ひいたしたく存じます」

「何卒よろしく御願ひいたします。時にブラバーサ様、現今世界の有様は如何でせう。吾々人類のために、天の神様より懲戒的大鐵槌を下される様な形勢になつて來たぢや在りませぬか」

「昨日も船中でロンドンタイムスを読んで見ましたが、其中に吾々としては依然として落着いて居られない様な記事が載つて居ましたよ。ルートバハ一の教と全

然同一でしたワ」

「ドンナ記事が載つて居ましたか」

「表題が二號活字で麗々しく「死んだ新聞王の靈が探偵小説家のコナン・ドイル

氏に世界の災厄が来ると云ふことを囁いた」と出て居りましたよ。今懷に持つ

て居りますから朗讀いたしませう」

と云ひつつ、懷より細かく折つた新聞を取り出し、押し開いて、

「目下米國にあるコナン・ドイル氏は、三十一日、桑港に於て左の奇抜な發表を

なした。曰く「新聞王故ノース・クリフ卿の靈が餘に囁くに、「汝等の生存中こ

の世界に一大災厄が来る。若し人間が靈的に改造されて、この災厄を除かなけれ

ば、千九百十四年の世界大戦よりも更に恐ろしい運命に陥る」一體國人は餘り

齷齪し過ぎる。餘も生存中同様の誤謬を敢てしたが、物質的進歩の競争のため、

人間の智慮は滅び遂に災厄が来るものであると云ふことを初めて理解するに至つ

たと、ドイル氏は全く眞劍に眞面目に右の言明をして居る」云々

と讀み了り、

「吾々の信仰いたしますルートバハも亦同様の神示を三十年以前から主張して
来ましたが、物質的研究にのみ焦心して居る世界の學者も、其他の同胞も容易に
信じて呉れないのみか、流言浮説をなして人を誑惑するものだと言つて聖主を始
め信者は所在社會上下の壓迫を受けて來ました。聖主の教にも、右同様に人心の
悪化は宇宙に邪氣を發生し、遂には地異天變を招來するものだと言つてありま
す。天地が今に覆るぞよ。吃驚箱が開くぞよ。脚下から鳥が飛つぞよ。靈魂を研
いて改心致して下されよ。神は世界の人民は皆最愛の我子であるから、一人なり
とも助けてやり度いのが胸一杯であるから、永らく豫言者の口と手に由りて世界
の人民に氣を付けて居るなれど、餘り今の人民は科學に凝り固まりて神の申す眞
誠の教が耳に這入らぬので、神も大變に心を碎いて居るぞよと仰せられて居ます
」
「如何にも、眞に結構な御神示ですなア。それに寸毫の間違ひも御座いますまい。
私も神示よつて、貴師の御説と同様のことを承はりましたので、バハイ教を開い
て世界の同胞に警告を與へて居るのです。最早メシヤの再臨も餘り長くは有りま
すまい
」

「左様です。メシヤの再臨は世界の九分九厘に成つて、此エルサレムの橄欖山上に出現されることと確信いたして居ります。既にメシヤは高砂島の桶伏山麓に再誕されて居りますよ。再誕と再臨とは少しく意義が違ひますからなア」

「救世主が最早再誕されたと仰有るのですか。大聖主メシヤたる可き神格者には九箇の大資格が必要ですが、左様な神格者は容易に得られますまい。先づ第一に、

一、大聖主は世界人類の教育者たること

二、其教義は世界的にして人類に教化を齎すもの成ること

三、其智識は後天的のものに非ずして自湧的にして自在なる可きこと

四、彼は所在賢哲の疑問に明答を與へ、世界の所在問題を決定し、而して迫害と苦痛を甘受す可きものなること

五、彼は歡喜の給與者にして、幸福の王國の報導者なる可きこと

六、彼の智識は無窮にして、理解し得べきものなる可きこと

七、其言説は徹底し、其威力は最悪なる敵をも折伏するに足るの人格者なる可き

こと

八、悲しみと厄難は、以て彼を悩ますに足らず、その勇氣と裁斷は神明の如く、而して彼は日々に堅實を加へ、熱烈の度を増可きこと

九、彼は世界共通の文明の完成者、所在宗教の統一者にして、世界平和の確定と世界人類の最も崇高卓絶したる道德の體現をなす可き人格を有すること 以上

「爾等が此等の條件を具備したる人格者を世に求むる時には、初めて彼によつて嚮導をうけ光照を被るを得む」と吾バハ一の聖主アブデュル・バハ一は仰有いました。果して右九箇の大資格を備へた聖主が再誕されて在るとすれば、吾々は實に至幸至福の身の上で御座います。併し人各信仰に異同のあるものですから、私はアブデュル・バハ一こそ大聖主と信じて居るものであります」

「成程大聖主はアブデュル・バハ一様でせうが、最早現界に生存遊ばさない上は、如何に九箇の大資格を備へたまふとも、今や來らむとする世界の救濟事業に對しては、御手の下し様がありますまい。勿論聖主の教を汲みて、後の弟子達が完成されるれば兔も角もですが」

「貴師の仰有るメシヤの平素の言心行について、一應御話を承はり度いものです

な
□

□ 先に貴師は九箇の大資格を羅列して説明下さいましたが、其大資格者に私は朝夕接従して居りましたから、大略申し上げて見ませう。虚構も誇張も方便も有りませぬから、そのおつもりでお聞きを願ひます□

バハ・ウラーは襟を正し、さも謹嚴な態度で、ブラバ・サの談話を耳を傾けて聞き初めた。

汽車は早くもユデヤの高丘を足重たげに刻みて上り行く。

□ 私のメシヤと云ふ人格者は目下高砂島の下津岩根に諸種の準備を整へて居られます。そして其名はウヅンバラ・チャンダーと謂つて、實に慈悲博愛の權化とも稱すべき神格者です。世界人類に對して、必須の教育を最も平易に懇切に、施し玉ひつつあるのです。故に宗教家も教育家も、政治家も、經濟學者も、天地文學者も軍人も職工も農夫も皆訪ね來つてそれ相應の教を受け、歡んでその机下に蟬集して居ます。如何なる難問にも當意即妙な答を與へられ、何れも満足して居ります。是が只今貴師の仰せられた第一の資格たる

「大聖主は世界人類の教育者たるべきこと」の條項に匹敵するやうに思ひます」

「成程御尤もです」

と頭を三ツ四ツ振つてうつむく。

「ツルク大聖主が伊都の御魂と顯はれ玉ふて、三千大千世界一度に開く梅の花の大獅子吼を遊ばしましたが、此御方は約りヨハネの再臨だと信じられて居られま

す。そして基督とも謂ふべき美都の御魂の神柱、ウヅンバラ・チャンダーと云ふ聖主が現はれて、世界的の大教義を宣布し、凡ての人類に教化を與へたまひ、今や高砂島は言ふに及ばず、海外の諸國から各種の宗教團體の教主や代表者が、聖主を世界の救世主と仰いで参り、其教義の公明正大にして且つ公平無私なるに感化され、日に月に笈を負ふてその門下に集まつて來て居ります。今貴師の仰せになつた第二の大資格たる

「その教義は世界的にして人類に教化を齎す可きものなること」の條項に合致するものでは有りますまいか」

「御尤もです。第三の資格に合致した點の御説明を願ひます」

「我聖主ウヅンバラ・チャンダー様は、小學校へ通ふこと僅かに三年で、しかも世界智識の寶庫とまで言はる程の智識を有し玉ひ、天地萬有一切の物に對して深遠なる理解を有し、三世を洞觀し、天界地獄の由來より過去現在未來に涉りて、如何なる質問にも尠しも遲滯せず即答を與へ、且つ苦集滅道を説き道法禮節を開示し、泉の如く涪々として湧出するその智識には、如何なる反對者と雖も感服して居りますよ。天文に地文に、政治に宗教に、道德に藝術に、醫學に曆法に、詩歌に文筆に演説等、何れも自湧的に無限に其眞を顯はし得ると云ふ稀代の神人でありませぬ。幼時より八ツ耳、神童又は地獄耳などの仇名を取つて居た方ですかなア。今も猶、神政成就の神策に關する神祕的神示を晝夜執筆されつつあります。世界各国の國語と雖も、未だ一度も學んだ事の無いお方が、凡ての國の言語が習はずして口から出て來るのですから、吾々はどうしても凡人だとは思ひませぬ。何人も聖主を指して生神だ生宮だと崇めて居りますよ。所謂貴師の仰せに成つた「その智識は後天的のものに非ずして、自湧的なる可きこと」に合致するぢやありませんか」

「へエー、何と不思議な方ですな。それこそ眞正の大聖主メシヤですな」

「それから瑞の御魂の聖主は、あらゆる賢人哲人の疑問に對し、即答を與へて徹底的に満足せしめ、且つ世界に所在種々の大問題に對し決定を與へ、種々雑多の迫害と苦痛を甘受し、常に平然として心魂にも止めず、部下の罪科を一身に負擔して泰然自若、日夜感謝の生涯を送つて居られるのです。如何なる迫害も苦痛も聖主に對しては、暴威を振ふ事は出來ないと見えます。是が第四の條件に匹敵せる大聖主の資格の一ではありませんまいか」

「なる程感心いたしました。それから第五の條件は如何で御座いますか」

「聖主は實に歡喜の給與者とも云ふべきウーピーなお方です。如何なる憂愁の雲に閉されたる時にも、聖主の御側に在れば忽ち歡喜の心の花が開きます。そのお言葉を聞けば直ちに天國の福音を聞く如く、樂園に遊ぶが如く、何事も一切萬事忘却し、歡喜の情に溢れ、病人は忽ち病癒え、失望落膽の淵に沈むものは希望と榮光に充たされ、一刻と雖も御側を離るる事が出來ない様な氣分になつて了ひます。又身魂共に至幸至福の花園に遊び、天國を吾身内に建設する様になつて了ひ

ます。實に仁慈と榮光との權化とも云ふべき神人で御座いますよ。斯くてこそ三千世界の救世主だと思ひます。次に第六の資格としては、聖主の深遠宏大なる内分的智識です。その深遠なる智識に由つて、無限無窮に人類の身魂を活躍せしめ、老若男女智者愚者の區別なく、直に受け入るる事の出来る自湧の智識と言靈を用ゐて衆生を濟度されます。それ故、一度聖主に面接し又はお言葉を聞いたものは、決して忘れる様な事はなく、且つ時々思ひ出して歡喜に酔ふのです。婦女や愚人にも理解し易く、且つ宏く深き眞理を、平易に御開示下さいます。

また第七の資格としては、過去現在未來に渉る一切萬事の解説は、終始克く徹底し、前人未發の教義を極めて平易に簡單に了解し易く説示し、内外種々の反抗者や壓迫者に對しても、凡て大慈大悲の雅量と神直日大直日の神意に従ひ敵を愛して、終には敵をして心底より悦服せしめ、善言美詞の言靈を以て克く言向和し、春野を風の渡るが如くその眼前に来れるものは、一人も残らず善道に導きたまひ、自己に對して種々の妨害を加へ災厄を齎したる惡人に對しても、聊かの怨恨を含まず、貴賤老幼の別なく慈眼を以て見給ふ所は、第七の大資格に合致して居られ

る様に思ひます。

また第八の資格として茲に申上げますれば、聖主は暗黒なる社會又は宗教方面より非常な壓迫を受け、終には今や八洲の川原の誓約の厄に逢ひ、千座の置戸を負はせられ、髭を根底よりむしられ、手足の生爪まで抜き取られ、血と涙とを以て五濁の世を洗ひつつ、あらゆる困苦と艱難に當つて益々勇氣を振り起し、世界人類のために大活躍を晝夜間斷なく續けられて居られます。又諸事物に對しては神明の如く明確なる裁斷を下し、即座に解決を與へ、且つその信念は日に月に堅實を増し、熱烈の度を加へ、今や官海方面より強烈なる壓迫を受けつつ泰然自若として天下萬民のために心力を傾注し、五六七神政の福音を口に筆に開示されつつあります。開闢以來深く閉ざれつつあつた神祕の門も、漸次聖主に由つて開放されつつあります。何れの世にも勝れたるものは、世界の壓迫を一度は受けるものですが、我聖主の如きは、十字架を負ひ玉ひし基督の贖罪にも優つた程の世の壓迫と疑惑と嘲罵とを浴せかけられて少しも撓まず屈せず、殆ど旅人の春の野を行く如き状態で身を處し、能く神の教に従つて忍耐されつつ居られます」

「どうも有難う。貴師のお談によつて私も大に心強さを感じました。何うか今一つ第九の資格に就いて、聖主の御行動に關する御説示を願ひます」

「聖主は人類愛善は言ふに及ばず、山河草木禽獸蟲魚の端に至るまで博く愛し玉ふことは、平素の行動に由つて一般信者の崇敬感謝措く能はざる所です。凡ての宗教に對し該博なる觀察力を以て深く眞解を施し、生命を與へ、以て世界の宗教の美點を揚げ、抱擁歸一の大精神を以て對したまひますが故に、凡ての宗教家の白眉たる人士は雲の如く膝下に集まり、何れも皆満足をしてその教を乞ふて居ります。世界平和の確定と宗教の統一、世界共通的文明の建設者にして、最も卓絶したる眞善美の道德體現者だと信じます。やがて時來らば、天晴メシヤとして萬人に仰がれ玉ふ時が來るであろうと、私共は固く信じて疑ひませぬ。アブデユル・バハ―大聖主の再來か、その聖靈の再現か、何れにしても暗黒無明なる現社會の光明だと信じて止まないの御座います」

「いろいろと御懇切なる御説示に預かりまして、私も大に得る所が御座いました。どうやらエルサレムに着車した様ですから、茲で御別れ致しませう。私はパレス

タインの或る高丘に、大聖主の後嗣が居られますので、一寸御訪ねいたし、再び
橄欖山上にお目にかかり、結構なる御説示を蒙り度いと存じて居りますから、今
後宜敷く御指導を願ひます。そして私はアメリカンコロニーへ訪問したいと思つ
て居ります」
「私も貴師と同道を願ひたいものですが、少しばかり神命を帯びて来て居ります
ので、先づ第一に橄欖山へ参り、神様の御都合に由つてアメリカンコロニーや貴
師の御在所を御訪ねするかも知れませぬから、何分にも宜敷く御願申上げます」
と、茲に兩人は又もや固き握手を交換し、互に車窓を急いでプラツトホームへ出
たり。

三千世界の人類や 禽獸蟲魚に至るまで
救ひの御船を差向けて 誠の教をさとし行く
神幽現の大聖師 太白星の東天に

閃ひらめく如ごとく現あらはれぬ

一切いっさい萬事ばんじ救世きうせいの

誠まことの智ち慧ゑを胎藏たいざうし

世間せけんのあらゆる智者ちしや學者がくしや

凡すべての權威けんゐに超越てうゑつし

迫害はくがい苦痛くつうを一身いつしんに

甘受かんじゆし世界せかいを助け行ゆく

歡喜くわんきと平和へいわを永遠ゑいゑんに

森羅萬象しんらばんしやうに供給ききようきふし

至幸しかう至福しふくの神惠しんけいの

精神せいしん上の王國わうこくを

斯この土どの上に建設けんせつし

無限むげんの仁慈じんじを經たてとなし

無窮むきゆうの智識ちしきを緯ぬきとして

小人弱者せうじんじやくしやの耳みみに克よく

理解りかいし易やすき明教めいけうを

徹底的てつていてきに唱導しやうだうす

如何いかなる惡魔あくまも言靈ことたまの

威力ゐりよくに言向和ことむけやはしつつ

寄よせ來くる悲哀ひあいと災厄さいやくを

少すこしも心こころに掛かけずして

所信しよしんを飽あくまで貫徹くわんてつし

裁制斷割さいせいだんかつの道極みちきはめ

神人和合しんじんわがふの境きやうに立たち

惡魔あくまの敵てきに會あふ毎ごとに

心こころは益ますます堅實けんじつに

信仰熱度しんかうねつどを日ひに加くはへ

三千世界さんぜんせかいに共通きやうつうの

眞しんの文明ぶんめいを完成くわんせいし
 世界せかい雑多ざつたの宗教しゅうけうや
 凡すべての教義けうぎを統一とういつし
 崇高すうかう至上しじやうの道德だうとくを
 不言ふげん實行じつかう體現たいげんし
 暗黒あんこく無道ぶだうの社會しゃくわいをば
 神かみの教をしへと神力しんりきに
 照破せうはし盡つくし天津日あまつひの
 光ひかりを四方よもに輝かがやかす
 仁慈じんじの神かみの神業しんげふに
 奉仕ほうしするこそ世よを救すくふ
 大神だいしん人の任務にんむなれ
 あゝ惟かむながらかむながら神々々々
 御靈みたま幸倍さちはへまし坐まませよ。

(大正一二・七・一〇 舊五・二七 加藤明子録)

第三章 聖地夜せいちよ〔一六三二〕

ブラバースはエルサレムの停車場ていしやぢやつでバハーウラーに袂別けつべつし、プラットホームを

出で、稍廣き街道を散歩し初めた。既に黄昏近くなつた近邊の山々の背景を、美しい夕日が五色の雲の線を曳いて色彩つて居る。併し何となく寂し氣な印象が刻まれて来る。シオンの城を正面に控へながら、路の兩側の畑丘に映えて居る落付いた緑色の葉が、痛々しげに塵埃のために灰白色に化つて居る橄欖の木を懐かしみながら、車馬の往來繁き大通をエルサレムの市街へと進む。

後の方から「モシモシ」と呼ぶ婦人の聲が聞える。ブラバーサは後振り返り、立止まつてその婦人の近づくのを待つとはなしに待つて居た。見れば曼陀羅模様のある厚いブエールで顔全部を覆ふて居るユダヤの婦人で、死の國からでも逃げて来た様な氣味の悪い姿であつた。ブラバーサは月光の下に、初めて此市中に於て聲を掛られたユダヤの婦人の姿を見て、ギョツとしながら例の丸い眼を嫌らしく光らした。

「見ず知らずの賤しき婦人の身として、尊き聖師様を御呼び止め致しまして濟まないことで御座いますが、妾はアメリカンコロニーの婦女で、マグダラのマリヤと申す基督信者で御座います。神様の御攝理に由つて貴師の爰に御降り遊ばす事

を前知し、急いで聖地の御案内を兼ね、尊き御教を承はり度く罷出でました者で御座います。決して決して怪しき婦女では御座いませぬから、何うぞ妾に聖地の案内を命せて下さいませぬか」

と眞心を面に現はして頼む様に云ふ。

ブラバースは土地不案内のこの市中で、思はぬ親切な婦人の言葉を聞いて打喜びながら、

「ハイ有難う御座います。私は高砂島より遙々と神命に由つて、聖地へ参向のために来たものですが、何分初めての事ですから土地も一向不案内の處へ、貴婦が案内をして遣らふと仰有るのは、全く神様の御引合はせで御座いませう。併し最早今日は夜分になりましたから、何處かのホテルへ一泊致し、明朝緩くりと橄欖登山致し度きもので御座いますが、適当なホテルを御示し下さいませぬまいか」

「貴師も定めて御疲勞で御座いませうから、今晚はホテルに御一泊なさるが宜しいでせう。聖地巡禮者のために設けられた大仕掛なホスビス・ノートルダム・ド・フランスと云ふ加持力の僧院が御座いまして、其設備は一切ホテルと少しも

變りなく、且つ大變親切で宿料も一宿が一ポンド内外ですから、それへ御案内致
しませうか」

「カトリックの僧院ですか。夫れは願ふても無き結構な所、どうか其處へ案内を
願ひませう」

「ハア左様なさいませ。妾も貴師と今晚は同宿して、種々の珍らしい高砂島の御
話を承はりたう御座います」

と先導に立ち、カトリックの僧院ホテルへと案内され、今宵は爰に一宿する事と
なつた。兩人は二階の一室に案内され、夕餉を済ませ、窓外を遠く見やると、折
しも十六夜の満月が皎々として下界を隈なく照らして居る。大きな僧院にも似ず
宿泊者は僅かに四五人で、何れも各宗の僧侶であつた。マリヤはブラバーサに向
かひ、

「聖師様、今晚の月は亦格別美はしき空に澄み切つて聖師の御來着を祝して居る
やうですなア。斯様な良い月の夜を室内に明かす事は、少し計り勿體ないぢや有
りませぬか。何うでせう、一つ月明かりに散歩でもして御寢みになりましたら、

妾もこの月を見ては室内計りに蟄居する氣になりませぬわ

成る程良い月です。高砂島で見た月も今この聖地で見ると、餘り變りはありませんが、何だか月が懐かしくなつて参りました。無爲に一夜を明かすのも神界へ對して濟まない様な心地がします。どうか案内を願ひませうかなア

ハイ宜しう御座います

と早くもマリヤは二階の階段を下りかけた。ブラバ―サもマリヤの後からホテルを忍ぶ様にして門外に出た。兩人は市街の外側を西の城壁に添ふてダマスカスの門を目當に歩を運ぶ。上部が凹凸になつた嚴めしいこの城壁や門は、皆中世に造られたものだが、何となく古い市街には應はしい感覺を與へる。この門からダマスカスへの道路が通じて居る。兩人は月光を浴びながら、門を潜つて市街の北部を横斷し、聖ステファンの門へと出た。荒い敷石の道路は、所々に低いトンネル様のアルカードで覆はれて居て、月光の輝く下では内部の深い深い暗黒面が殊更寂しく物すごく感じられた。道路の兩側の所々に、赤いトルコ帽を被つたアラブが小さい茶碗で濃いコーヒ―を呑んだり、フランスコ様の大仕掛な装置で水を通

させて長いゴム管で吸入する強い煙草をのん氣さうに呑み乍ら、兩人の方へ迂散な奴が來よつたなアと云つた様な顔付きで睨んで居た。

彼の男は吾々の姿を見て、異様の眼を光らして居ましたが、何かの信仰を以て來て居るのですか

彼の人等は極端なアセイズムを主唱する人々で、妾が聖地を巡拜するのを見て、ボリセイズムだと云つて嘲つて居るのですよ。物質文明にかぶれてアセイズム者と成つて居るのですから、容易に信仰に導くことは出來難い人達ですわ

斯る聖地にも依然アセイズム者が入込んで居るのですか

アセイズム者は愚か、ソシヤリストもコンミニストもアナーキストもニヒリストも澤山に入込んで來て居ります。そして此聖地に詣で來る信徒に對して種々の嘲罵を浴びせます。妾も何とかして神様の尊き御道に救ひたいと思つて、毎夜エルサレムの市街に立つて、聲をからして演説をいたしました。彼等は神の力の聲を聞いても立腹いたしません。そして大變な強迫的態度に出で、遂には鐵拳の雨を降らすのです。印度の釋尊も縁なき衆生は度し難しと仰有つた相ですが、

現界から既に已に身魂の籍を地獄に置いて居る人達には、如何なる神の福音も到底耳には入りませぬ。夫れ故妾の團體アメリカンコロニーの人々は、迷信者扱ひを受け、人間らしく附合つて呉れないのです。モウ此上は聖メシヤの再臨を待つより仕方がありませんわ」

「高砂島でも、依然今の貴女の御話と同様に、吾々の信奉するルートバハの教やその信者を迷信者扱ひをなし、あらゆる壓迫と妨害を加へ、大聖主までも邪神扱ひに致して、上下の民衆が擧つて反抗的態度に出ると云ふ有様です。然し是も時節の力で解決が付くものと私は堅く信じて居ります。メシヤが聖地へ雲に乗つて御降りになる曉は、如何なる智者學者も悪人も太陽の前の星の如く影を隠し、屹度メシヤの膝下に跪付くやうになるでせう。今暫らくの辛抱ですよ」

「一時も早くメシヤの降臨を仰ぎ度きもので御座います。眞正のメシヤは何時の頃になつたら出現されるでせうか」

「既に已にメシヤは、或る聖地に降誕されて諸種の準備を整へて居られますから餘り長い間でもありませんまい。併しメシヤは只今の處では十字架の責苦に逢つて、

萬民の爲めに苦しみて居られますが、驢て電の東天より西天に閃く如く現はれた
まふでせう。私はメシヤ再臨の先驅として参つたものです」

「それは何より耳寄りの御話し緩りと橄欖山上に於て承り度いものですなア」

「是非聞いて戴かねばなりません」

「聖師様、是が有名な聖ステファンの門で御座いますよ」

「聖者が曳き出され石で打ち殺されたといふ、傳説のある聖ステファンの門です

か。へエー」

と首を傾けて少時憂愁に沈む。

「妾は此門を通過する毎に、聖者の熱烈なる信仰力を追想して、益々信仰の熱度

を加へたので御座います」

と稍傾首て涙ぐむ。

「ア、惟神靈幸倍坐せ。信仰力弱きこのブラバサをして、無限の力を御與へ下

さいませ。一イ二ウ三イ四、五ツ六ユ七八九十百千萬」

と天の數歌を奏上し、暫し感歎止まなかつた。

聖ステファンの門を潜ると、少しく下り坂になつて居る。マリヤの後に従いて
ゲツセマネの有名な園に近づいた。橄欖山は呼べば答ふる様に近くなつて來た。
分の厚い丈けの高い、石造の垣で嚴重に圍まれて居るのがゲツセマネの園である。
處々にサイブレスの木が頭を出して居るのが見えるばかりで、一見して外側から
は墓地のやうな感じを與へる。夜の事とて門扉が固く鎖され、内部は見る事が
出来ない。そこから團子石のゴロ付いて居る峻しい坂路を攀て、目的の橄欖山へ
登るのである。反對側の山の頂に王座して居る月光に由つて装れたエルサレムの
市街、美しい氣高いシオンの娘の姿は眼前に横たはつて居る。その美しさは現實
に存在して居るのか、夫れともキリストに伴ふ聯想が幻影を造り出したのかと、
ブラバーサの想像は瞬間に世界歴史の全體を通つて走る。丁度、高砂島の聖地桶
伏山の蓮華臺上の廢墟の前に立つた時と同様に、然しその二つの感想は、ブラバー
サに取つては名状しがたきコントラストであつた。キリスト教とヘレニズムの葛
藤、夫れは過去二千年間の人類の歴史を解くための悲哀なる鍵となるのであつた。

そして此マリア婦人を始め、コロニーの人達や、純真なる數多の奉道者が今に至るまで神を求め、眞善を極め美に焦がる純な心を痛めて來た事を思ひ浮かべては、そぞろに涙の溢るるのも覺えなくなつて了つた。ア、この悲哀なる不調和は一時も早く取り除きたいものだ。キリスト教は何處までも現世界を灰色に染なければ止まないであらうか。アクロポリスに踵を向ける事なしにエルサレムに巡禮する事には成らぬのであらうか。何故神様は、此の世をモウ少し調和的に造り玉はなかつたのであらうかと、今更の如く愚癡と歎息を漏らさざるを得なかつた。ブラバーサは默然として追懷久うして居る。

「聖師様、何か頻りに考へ込んで居らつしやる様ですが、妾の行動に就いて御氣に召さない事が御座いますか。遠慮なく仰有つて下さいませ。如何様にも惡き點は改めますから」

「イエイエ、決して決して決して貴女に對して氣に合はない道理が御座いませうか。只々私はこの聖地の狀況を見るに付け、古の歴史が胸に浮かびて參りまして、感慨無量の涙に暮れて居たのです」

マリヤは軽く、

「そりやさうでせう共、妾だつて幾度聖地に来てから、古の歴史を追懐して泣いたか分りませぬわ。然し今晚は夜も更けましたから、ホテルへ一先づ引返し、又明日はゆるゆる案内さして頂きますせう」

と先に立つていそいそと歩み出した。爰にブラバーサ、マリヤの二人は月光の下をキドロンの谷をエルサレムの側へ渡り、市街の東南隅の城壁に添ふて、ダング・ゲート（汚物の門）へ進んで来た。

ダング・ゲートは昔此門から汚物を運び去つた所と傳へられて居る。シロアムの村が眼下に展開して居る。その門を這入つてユダヤ人街とマホメツト教徒街との間を通過し、ジャツファの門へと出た。

現在のエルサレムの市街はアラブ、ユダヤ人、アルメニヤ人の住みて居る三つの區域によつて仕切られて居る。

神殿の跡に近い暗いアルカードの傍に、二三人のアラブが立つて居て、手眞似で譯の分らない言葉で兩人を呼び止めた。兩人は氣味悪る相に聞かぬ風を装ひス

タスタと足を早めた。

ダマスカス、聖ステファン、ゲツセマネと斯う云ふ名は熱烈な信仰者の胸に深刻な感動を與へるものである。ブラバーサは傾首きながら一足一足指の尖に力を入れ、ウンウンと獨り心に囁きながら、マリヤの後について行く。

然し現代の多數の基督教徒、それ等に對して宗教は無意味な形式、死し去つた傳統に過ぎない。呑氣な基督教徒中に眞にダマスカスの道にある使徒パウロの心を自身に體驗し、キリストのゲツセマネの園における救世主の御惱みの一端だに汲み得る信徒が幾人あるであらうか、と慨歎の涙に暮れて知らず識らずにマリヤに半町ばかりも遅れてしまつた。

(大正一二・七・一〇 舊五・二七 北村隆光録)

第四章 訪問客(一六三三)

ブラバーサは、マリヤの姿を見失ひしより止むを得ず、只一人にてカトリックの僧院に歸つて見れば、四邊は寂として静まりかへり、只耳に入るものは自分の行歩に疲れた苦しげな鼻息と、その足音のみなりき。幸ひ表の門が開け放しになつて居たので、與へられた二階の居間に歸り、ソファの上に横たはりて前後も知らず夢幻の國へと突進したりける。

ガンガンと響く僧院の梵鐘の聲に夢を破られ、ツト身を起して見れば四邊は力ラリと明け放れ、午前八時の時計が階下に響いて居た。ブラバーサは時計の音を指を折つて數へつつ、

「ア、もう八時だ。克くもマア寢込んだものだ。それにしても昨夜のマリヤさまは此ホテルには來て居ないだらうか。何處とはなしに神経質な感傷的な婦女だが、歸神の婦女によく在る習ひ、俄に神の命とか言つて心機一轉してアメリカンコロニーへ還つて了つたのだらうか。餘り氣持の良い婦女では無かつたが、その熱烈な信念と親切な態度には實に感謝の至りだ」

と獨語つつ洗面所に入り用を足して再び自分の居間に歸り來たり。

見れば食卓の上には二人前の膳部が竝んで居て、ボーイらしき者も居ない。ブラバーサは此態を見て、

「ボーイは其處等に見當らないが、二人前の膳部が吾居間に運ばれて在ることを思へば、どうやらマリヤさまも外の居間に寝て居たのかも知れない。ハテ不思議だなア」

と首を頻りに振つて居る。

そこへ徐々として這入つて来たのは年の若い美しいボーイであつた。ブラバーサは、

「ボーイさま、夜前の相客たる一人の婦人は何處に居られますかな」

「ハイ、昨夜は貴下と御一緒に此の室で御休みになつた事だと思つてお二人の膳部を運んで来たので御座います。別に外には居られません」

「ハテナ、合點の行かぬ事だ。併し何は免もあれ朝飯を済ませませぬ」

と食卓に就いて、半時ばかりの間に掻き込む様にして朝の食事を済ませて了つた。ボーイは是非なくマリヤの膳部をブツブツ小言を云ひながら片付けて了ひ、ブラ

バーサの手から應分のポチを受取り、嬉々として次の室に姿を隠した。

ブラバーサは椅子に依りかかつて、二階の窓からエルサレムの市街を心床しげに瞰下し無限の情想を漲らし居たり。

そこへ「御免下さい」と靜に聲をかけて扉をたたいたのは、猶太人らしき品格の高い人好きのしさうな老紳士なりける。

「何れの方かは存じませぬが、先づ御這入下さいませ」と自ら立つて快く扉を開いて吾室へと迎へ入れる。

老紳士はさも満足氣にブラバーサの手を握つて、その顔を熟々ながめ、早くも兩眼から涙さへ流し居たり。

「貴師は何れの方で御座いますか。何となく懐かしくなつて参りました」

「ハイ、私はアメリカンコロニーの執事でスバツフオードと申す瘠浪人で御座います。昨夜はマリヤさまが、大變な失禮をしたので再び御顔を拜する譯には行かないから、私に一度この僧院の二階の第九番に御逗留だから謝罪に行つて下さるまいかと大變に心配して居られますので、私はその御無禮の御詫を兼ねて尊い貴

師に拜顔の榮を得たいと存じ、朝早くから御邪魔を致しました」

「ア、貴師がマリヤ様と御一緒にコロニーを司宰遊ばすスバツフォード様で御座いましたか。良くマア御尋ね下さいました。サア何うか此方へ」

と椅子を進める。老紳士は、

「ハイ有難う」

と與へられた椅子に腰打かけ、香りの強い煙草を熏らし初めたり。

「マリヤ様は親切に聖地の案内をして下さいましたので、大變な便宜を得ましたのです。私の方から御禮に參らねばならないのですが、夜前突然御姿を見失つたものですから、ツイ失禮を致して居りましたが、コロニーへ御歸りに成つて居らると承はり、それで私もヤツと胸が落着きました」

「何分マリヤさまは靈感者ですから、時々脱線的行動を初められ、後になつて毎時も自分で心配をされるのです。コンナ事は今日に初まつた事ではありませぬ。

私はマリヤさまの辨解と詫役とにいつも使はれて居るのです。アハ、ハ、ハ、」

「マリヤ様は途中に於て何物かを靈視されたのでせうか」

「話によれば、貴師の眉間より最も強烈なる光輝が放出し、神威に打たれて同行する事が出来なくなり、思はず知らず恐怖心に追はれて尊き貴師を見捨て逃げ歸つたと申して居られました。私はコリヤきつと邪神の憑依だらうと思つて審神を行つて見た所、案に違はず山田風の悪霊が憑依して居りまして、貴師の聖地へ來られた事を大層恐れ且つ嫌つて居るのです。悪霊の退散した後のマリヤ様は立派な方ですが、餘り貴師にすまないからと言つて心を痛め、私に謝罪に行つて來よとの事で御座いました」

「ハア決して左様な御心配は要りませぬから何うか宜敷く仰有つて下さいませ」
「ハイそのお言葉を傳へますれば、マリヤさまも大に喜ばれませう。昨夜貴師の御案内を爲すべく夫れも神示によつてコロニーを立て行かれたのです。どうか聖師様、一度コロニーまで玉歩を枉げて戴けますまいか」

「ハイ有難う御座います。是非是非御世話にあづかりたう御座います。時にスバツフオード様、イスラエル民族たる猶太人も三千年の艱苦を忍びて漸く故國を取り還しましたねー。時節の力と云ふものは實に恐ろしいものですなア」

「ハイ有難う。私等も依然イスラエル民族で御座いますが、漸くにして自分の公然たる國が小さいながら立つ様になりました。世界の三大強國が何れも必死の勢ひでこのパレスチナを手に入れやうとして、終には御承知の世界戦争までおつ初めたのですもの。夫れが放浪の民たる吾々民族のものに還つて來たと云ふのは全く天祐と申すより外はありませぬ。要するにメシヤ再臨の準備として、神様が吾々に國を持たして下さつたのだと思ひます」

「地球の中心即ちシオンの國ですから、獨英米なぞの強國は欲しがるのも無理はありますまい」

「獨逸の造つたバクダツト鐵道や、英國の拵へたアフリカ鐵道、アメリカが拵へかけて居るサイベリヤ經由の大鐵道も皆このパレスチナを目標として居るのですが、斯うなる以上は是等の大鐵道も又イスラエル民族たる吾々の爲に利用さるることと成つて了ひました。此の鐵道さへ利用すればユダヤ民族が世界を統一し得ることは明白な事實であります。然し今日の猶太人は物質欲が強きたため、肝心の神様を忘れて居る者が多いので困ります。人間の智慧や力量では九分九厘までは

何事でも成功いたしますが、最後の良めは何うしても神様の力でなくては成りませぬ、夫れ故吾々は大神の表現神たるメシヤの再臨を待つて居るので御座います。昔パレスチナが神の選民と稱へられたイスラエル人の手に與へられた當時は、蜜滴り乳流ると言はるるカナンの國でサフラン薫じ橄欖匂ふ聖場と詩人に謳はれた麗しい景色の好い所でありましたが、今日となつては其面影も無く荒れ果てて了つたのですが、其パレスチナが再びユダヤ人の手に戻つて昔の橄欖山の美しい景色が段々と出て来るやうになつて來ました。天に坐します神様はメシヤの再臨に先だち、パレスチナを御自分の選みたまひました所のユダヤ人に御任せにならむが爲に、數千年前から此美はしい使命を與へて選民たるの資格を備へしめむとして四十年間三百萬の人間を苦しめ給ふたのです。三百萬の者が飲むに水無く、食ふに食物の出來ない所で、或は親が死に子が死に、何代も續いて四十年間苦行を嘗めさせ玉ふたのも、イスラエル帝國の國民性を養はむが爲の御經綸であつたのだと考へらるるのです」

ユダヤ人はキリストを殺した爲に、他民族から排斥され、種々の困難を嘗めて來

たのでは在りますまいか。さうすれば若しも有力なる猶太人が現はれて世界を統一した時に於て、凡ての異教國の人民に對して復仇的態度に出づる様なことは有りますまいかなア」

「多くの同胞の中には左様な考へを持つて居る者があるかも知れませぬが、イスラエル人は比較的善良な民族ですから、一時は假令過激な行動に出づるかも知れませぬが、何と言つても神に従ふ心が深いのですから、誠のメシヤが判りて來ましたら、屹度其命に従ふものだと吾々は國民性の上から判断を致しまして、メシヤの再臨を待ち望んで居るので御座います。そして猶太人は世界を統一してシオン帝國を建設する事があつても、自ら帝王に成らうなぞとは夢想だも爲て居りませぬ。只聖書の豫言を確信し、メシヤは東の空より雲に乗りて降臨すべきもの、又吾等の永遠に奉仕すべき帝王は日出の島より現はれ玉ふべきものたる事を確信して居りますよ。イスラエル民族は此信仰の下に數千年間の艱苦や迫害を忍んで來たのですからなア」

「私はそのメシヤも帝王も皆高砂島にチャンと準備され、數千年の昔から今日の

世のために保存されて在るといふことを信じて居ります。一天一地一君の治め玉ふ仁慈の神代は既に已に近づきつつあるやうに思ひます。併しそれ迄には如何しても一つの大峠が世界に出現するだらうと思ひます」

「なる程、吾々も貴師と同意見です、天の神様がいよいよ地上に現はれて善惡正邪を立別け立直し玉ふは聖言の示したまふ所です。一日も早く身魂を研いて神心になり世の終りの準備にかからねば成りませぬ。そして高砂島からメシヤと帝王が現はれたまふと云ふ貴師の御説には私は少しも疑ませぬ。サア長らくお手を止めまして濟みませなんだ。如何です、一度アメリカンコロニーまで御足勞を願はれますまいか」

「ハイ有難う御座います。然らば御言葉に従ひ御供を致しませう」
と僧院の監督に其旨を明かし置き、老紳士の跡に従つてコロニーへと進み行く。

(大正一二・七・一〇 舊五・二七 加藤明子録)

第五章 至聖團（一六三四）

ブラバースはスバツフォードに伴はれて、アメリカンコロニーへと歩を運んだ。百人ばかりの信者が、祭壇の前で一生懸命になつて祈願を凝らす最中であつたので、老紳士と共に末席の方から禮拜をなし、天下萬民の爲に一日も早く聖主の降臨されて神業を開きたまふ日の來れかすと祈りつつありけり。

一同禮拜を終つて、珍らしき客のスバツフォードの傍に端座せるを見て不思議の眉を潜めて眺めて居る。スバツフォードは一同に向ひ、言葉靜に、
「皆さま、此御方は高砂島から神命を奉じて遙々お越しになつたブラバースと云ふ聖師ですよ。僧院ホテルに御宿泊の方だが、メシヤ再臨の先驅として御出張になつたのですから、お互に親しく交際をさして戴かうぢやありませんか」
一同はこの言葉に生き復つた様な面色を浮べて、異口同音に「サンキウサンキウ」と連呼するのであつた。

ブラバースは一同に向かひ厚く禮を復し、且つ一場の挨拶的演説を始めかけた。

御一同様、私は最前聖師の御紹介下さった如く、高砂島から神命を帯びてメシヤ再臨の先驅として派遣されましたルート・バハ一團の宣傳使ブラバーサと申す者で御座います。八千哩の海洋を渡り漸く昨日の夕方、尊きエルサレムの停車場へと安着いたしましたしました處が、初めての當地の到着にて土地の勝手も分らず、如何にして橄欖山へ行かうかと心配しながら、夕暮れの大道を歩んで居りますと、貴團の信者マリヤ様に圖らずも途中に御目に掛り、カトリックの僧院ホテルへ案内して頂きました上、夜分にも拘はらず市中の案内までして頂き、慕はしき橄欖山まで参拜さして貰ひましたのは、全く貴團の公平無私にして克く神様の大御心を體得し遊ばしたその賜と、深く深く感謝いたしました次第で御座います。加ふるに御親切なるスバツフオード聖師までが、態々ホテルまで御訪問下さいまして、種々と結構な御教訓を承はり、貴團の純なる信仰の模様と愛の結晶とも云ふべき美はしき生活の有様を拜聴しまして、感涙に咽びました。惡魔横行の暗黒なる世界にも、貴團の如き眞善美愛の聖なる團體が造られてあるかと思へば、神様の仁慈の大御心と周到なる御經綸には感謝せざるを得なく成つて参りました。私も今日

は神様の仁愛の光に照らされまして、大神の愛の深く尊き事を悟りましたが、世界の人類はイザ知らず、私の出生した高砂島などは今より五十年前までは、御話するさへも恥かしい様な状態で御座いました。基督の愛、孔子の仁、佛陀の慈悲など申す事は、私共に取つては非常に神秘的な了解し難い、到底凡人の手の届かぬ高遠なものの様に教へられて来たもので御座います。各宗各教の宣教者が餘りに神佛の教に勿體を付け過ぎて、仁だの愛だの慈悲なぞの神理を此世の外のもののように仕て了つたのです。然るに天運循環の神律に由つて、神の御國と稱へられた極東の高砂島に嚴瑞二柱の救世主あらはれ玉ひて、高大博遠なる愛は私共に極めて手近いもの親しきものにして、日々の生活から放さうとしても放され得ないものと成つたのです。何と有難い尊いことで御座いませう。御一同様も、又愛の眞諦を能く體得遊ばされ、キリストの再臨を誠心誠意待望されつつ國籍と宗教の障壁を脱却して聖團を創立されました事は、天下萬民のために實に洪大無限の大神業だと考へまして、貴團の御精神のある事に感謝措かない次第で御座います。自國の恥を申し上げるではありませんせぬが、今日は國籍や宗教の如何に關係なく、

世界人類愛の上より御参考の爲一言申し上げ度いと思ひます。貴團の方々や現今の若い人達には、殆ど想像も出来ない程に我生國高砂島は、三百諸侯の小さい敵國に分割されて居りましたのが、今より僅かに五十年以前の狀態でありました。甲州と乙州とはおるか、同じ乙州でもアールとセクターに於ても、シエルとアンターとの間に於ても、全く敵國の狀態で、所謂郷關を一步出づるが最後、生命の保證が出来ないやうな實狀で御座いました。そればかりか、各自腰に秋水を帯び家を出づれば男子は七人の敵ありと覺悟して居るのが武士道の尊い所と謂はれ、神國魂の精華としられて居りました。又武士は切捨御免と言つて、平民を切り殺す位なことは武士の普通の特權とさへ見られて居つたのです。現に今より三十年前に有つても、甲州人とか乙州人とか言ふ言語には、如何にもヨソヨソしい意味を以て居つたのです。又今日と雖も官吏とか、平民とか云ふ言葉には、一種の強固な障壁が築かれてある様な感じを與へて居ります。私共の父即ち維新の戦ひに参加した人達は、常に私共の子供の時代を見て、今日の青年や子供は大變に柔順になつたと言つて驚いた位です。私共の子供の時分はそれでも他の町村内の子供に對

しては一種の敵意を持つて町村と町村との子供の喧嘩は餘り珍らしいものではありませぬでした。他町村の子供を見て石瓦を投げ付け、怪我をさせて快哉を叫ぶ事などは普通の事としられて居りました。それ位だから、維新前即ち三百諸侯の各地に割據して絶えず争つて居た時代は、中々殺伐なもので有つた事は、古老の談話を聞いて見れば驚かされる位であります。それが今日では子供の喧嘩でさへ頗る珍らしくなつて來ました。町村の子供と町村の子供とが互に敵視する様なことは、今日の子供には想像が付かない様になりました。是は何の爲かと考へて見れば、高砂島の三百諸侯の我利我利連が一天萬乘の大君の思召によつて何れも前非を悔い、歸順の誠を輸して大君の下に畏服し、一切を投げ出して了つたからであります。それが爲に人心大に和らぎ、四方平等的の精神が國民の間に貫流する様になつたので御座います。何が野蠻だと言つても、互に敵意を持つて争ふ程野蠻なことは有りますまい。故に野蠻人とは其親愛の範圍の極めて狭小なるものを意味し、文明人とは親愛の範圍の極めて廣大なるを意味するものとすれば、貴團の如きは實に世界に先んじて文明の中の大文明の花を開かせ玉ふたものと、衷

心より感謝に堪へない次第で御座います。大慈大悲の大神様は全地上の世界をし
て、天國淨土と爲し、萬民に安息と榮光を與へむが爲に三千年の御經綸を遊ばし
て、今や高砂島に聖跡を垂れ玉ひました。そして大神の元の御屋敷たる此エルサ
レムに御降臨遊ばす、その準備として瑞の御魂の聖主を下し、萬民の罪を贖ひた
まふこととなつたので御座います。又神の選民たるイスラエル民族の方々が主唱
者となつて各國の人々をこの聖地に集め、メシヤの再臨を信じてアメリカンコロ
ニーの如き立派な殿堂を作られて居られる事は、私に採りまして實に何とも言へ
ぬ有難い嬉しい頼もしい事だか判りませぬ。願はくは私もこの聖團員の一人に加
へて頂きますれば、身の光榮是に過ぎませぬ。ア、惟神靈幸倍坐世
と拍手の内に勇まし氣に降壇した。老紳士は直に登壇して、
「只今聖師のお話によつて、今回の聖地御出向も了解いたしました。この團員も
定めて私と同じ御意見だと思ひます。個々分立して日に夜に争鬪の絶間が無かつ
たと云ふ高砂島が、今より五十年前以前に於て統一せられ、又嚴瑞二柱の救世主が
現はれたまふたのも、メシヤ再臨世界一體の大神様の深遠なる御經綸で御座いま

せう。國內の凡ての障壁が取り除かる事によつて、今日の向上と繁榮を來たす事になつた以上は、猶も進んで世界中が争闘を止めて相親愛し、各國各人種などと云ふ根本的敵愾心を取り去る事によつて、人類の文化は神聖なものとなり之と同時にその福利の程度も大變に高めらるること疑なき眞理であります。要するに吾々お互の親愛の範圍の大小によつて、野蠻ともなり文明ともなるのです。世界の平和を來さむがため、即ち五六七の神政出現のためには、各國國民間の有形と無形の大障壁を第一着に取り除かねば駄目です。この擧に出ずして世界の平和、五六七神政の成就を夢みるは恰も器具を別々にして、水の融合を來さうとするものと同様の愚擧では有りますまいか。それ故、吾々團體員は世界に率先して平和の眞諦を示し、メシヤ再臨の準備に従事して居るもので御座います。今日は高砂島の聖師の御來着によつて、私は神界の御經綸の洪大無邊なるに感喜の餘り、茲に一言蕪辭を述べ御挨拶に代へました。何うか團員諸氏もこの聖師と共に空前絶後の大神業の完成に盡されむ事を希望いたします。』

と悠然として演壇を下つた。團員一同は拍手してスバツフオード聖師の説に贊同

し和氣藹々として堂に溢るるばかりであつた。今迄うつむき勝で感涙に咽んで居たマグダラのマリヤは、やをら身を起してツカツカと演壇の上に立ち上り、謹厳な態度を以て一場の演説を始めかけた。一同は拍手してマリヤの講演を迎へた。

「妾は只今兩聖師の御演説を承はりました、大に心強く感じました。海洋萬里の遠方から遙々御越しになり、エルサレムの停車場前の街路に於て妾と會合されました事は實に奇蹟中の奇蹟だと考へます。ブラバーサ様は全く神様の御使命を帯び、メシヤ再臨の先驅として御光來になつた事は寸毫も疑ふ餘地は御座いませぬ。妾は皆さまと共に世界萬民の爲に、聖師の光臨を祝し且つ滿腔の喜悅に堪へないので御座います。メシヤの降臨キリストの再臨、五六七神政成就とは名稱こそ變つて居りますが、要するに同じ意味だと考へます。斯る目出度き世界になるのも全く神様の御經綸で御座いますが、その神業に奉仕する生宮が現はれなくては成りませぬ。先づ第一に神の子神の生宮たる吾々は、世界にあらゆる有形無形この二つの大なる障壁を取り除かねばなりません。有形の障害の最大なるものは對外的戰備 警察的武備は別と國家的領土の閉鎖とであります。又無形の障壁の最

大なるものとは、即ち國民及び人種間の敵愾心だと思ひます。又宗敎團と宗敎團との間の敵愾心だと思ひます。此世界的の有形の大障壁を除く爲には先づ無形の障壁から取り除いて掛らねば成らないと思ひます。聖キリストは天國は爾曹の内に在りと言はれて居ます。聖アブデユル・バハは世界の平和の人々の心の内に建てられねば成らぬと敎へられて居ます。佛陀は慈悲の心を十方世界に擴めて限界を設けるなと敎へられて居ます。ツルク聖主の御示敎も先づ第一に世界人類の和合を以て五六七神政成就の絶對條件として居られます。神聖とか精神とか靈的とか申すことは、別に不可思議な神祕なものでは無く、人類愛の心即ち他の國民や人種に對して少しの障壁も築かず、胸襟を披いて自分の友人に對すると同様に友愛の心を持つ事で御座います。この障壁をなす唯一の根元は自己心と自我心です。幸に我聖團は自己自愛の心を脱却し、唯何事も大神様の御心に任す人々の集まりで御座いますから、大神様も御嘉賞遊ばして遙々と高砂島から聖師を招き、我々の聖團に與へて下さつたものと厚く深く感謝する次第であります。アーメン」

マリヤは茲まで演じ了り、一同に向つて軽く一禮しながら壇を降る。拍手の聲

は急霰きふさんの如ごとく場ぢやうの外そとまで響ひびき渡わたつて居ゐる。

ア、惟かむながらたま神靈ちは幸倍はへ坐世ませ。

(大正一二・七・一〇 舊五・二七 北村隆光録)

第二篇 聖地巡拜せいちじゆんぱい

第六章 偶像都ぐわうのみやこ (一六三五)

ブラバ―サ、マリヤの二人ふたりは又またもやエルサレムの市街しがいを巡覽じゆんらんし始はじめ、市内しなで一番重要ばんぢゆうえうなモニユ―メントになつて居ゐる聖せいセバルクル寺院じゐんを見みるべく寺門じもんを潛くりぬ。
☞ 聖師せいし様さま、此この寺てらは聖せいキリスト様さまを磔はりつけ刑けいに處しよした場所ばしよで、ゴルゴタの地ちの上うへに建たた

てられてあるのだと傳へられて居りますが、併し聖書に由つて考へてみると、ゴルゴタは市の外部に存在して居なければ成らぬ筈です。若しも現在の城壁が當時のものよりも擴張して居るものとすれば、問題にも成り得るでせうが、同一の場所にありとすれば、ダマスカスの門の外にある一見頭骸骨状の目下墓地になつて居る岩丘を以て、ゴルゴタの地と認めなければ成らないと思ひますわ」

吾々人間としては到底眞偽は判りませぬ。大聖主が御降臨の上御定めなさるところとでせう。時に、この寺院の由來を聞かして頂き度いものですか」

「このお寺の由來を申せば、コンスタンチン帝の命令に由つて發掘された結果、キリスト様の埋葬され遊ばした洞窟が發見せられましたので、帝の母上なる聖へレナ様がエルサレムに巡禮して來られ、爰でキリストの十字架を發見しられたので、彌この地をゴルゴタの聖蹟と認めて、紀元三百三十六年初めてここに寺院を建立されたと云ふことですが、それを又六百十四年に波斯人のために焼亡ぼされた爲、直に改築をされましたと云ふことです。その後、於ても幾度となく破壊改築修繕等相次ぎ今日に至つたのだと聞いて居ります。一度お寺の内部を拜觀なさ

いませぬか。妾が御案内いたしますから」

「ハイ有難う」

とマリヤの後より寺内へ深く進み入る。

寺院内へ這入つて見ると、迷宮の様な構造で随分複雑して居て、加ふるに太陽の光線が十分徹らない薄暗闇で、何んとなく寂しい感じがする。それぞれ手に蠟燭を携帯せなければ成らなくなつて居る。寺内の空気は重くしめり勝で餘り氣分の良い所ではない。敷石は全部濕氣で濡れて居るため、ウカウカして居ると脚下が這つて轉倒せむとすること屢である。平和にして清潔なるものは寺院だと思つて居た高砂島の明るい生活に馴れたブラバーサの心に取つては意外の感じに襲はれ、危険がチクチクと身に迫る様に何んとなく不安の雲に包まれにける。

外のユダヤ人街から來るのか、内部から發したのか知らぬが、一種異様の厭な臭氣が襲つて來る。そして内部は凡てキリストの磔刑に關するあらゆる由緒ある場所に由つて充されて居て、何んとなく物悲しい寂しい感じを與へる。精靈が八衢を越えて地獄の入口に達した時の様な氣分になつて來る。

マリヤはブラバサを顧みながら初めて口を開き、さも愁た氣に、
☐ 聖師様、この長方形の石はニコデモがキリスト様の體に油の布を以て捲くために御身體をのせたと傳へられるもので御座います。これがヨセフの墓で此方がアリマチエの墓で、その少し向ふにあるのはニコデモの墓で御座いますよ。そして彼所がキリストの復活された後母の眼に現はれたまふたといふ聖所ですよ☐
キリストを刺した鎗、キリストを投入した牢獄、兵卒がキリストの衣をわかつた場所なぞ一々叮嚀に指し示すのであつた。

☐ 天下萬民のために犠牲とお成り下さつた救世主の御遺跡を拜觀いたしまして、何とも言ひ得ない程私は御神徳を頂きました。何時の世にも善人は俗惡世界の人間から迫害されると云ふ事は古今一徹ですな。ルート・バハの大聖主も肉體こそ保存されて在りますが、精神的に牢獄に投げ込まれ銃劍にて突き刺され、あらゆる社會の侮辱と嘲罵とを浴びせられ、且つ大惡人の如く扱はれて居られますが、何うか一日も早く天晴れ世界の人類が眞の救世主を認める様になつて欲しいもので御座いますよ。ツルク大聖主の墓は官憲の手に暴破れ聖壇は破壊され數多の聖

教徒は壓迫に堪へ兼ねて四方に離散し、今は純信な神に生命を捧げたものばかりが殉教的精神を以てウヅンバラ・チャンダー聖主夫妻を唯一の力と頼んで、天下萬民のために熱烈なる信仰を續けて居るのです。ア、惟神靈幸倍坐世」

マリヤは涙に暮れながら、聖師の先に立つてキリストの十字架を建てた正確な地点や、聖母のマリヤが十字架から降ろされたキリストの亡骸を受取った場所を案内するのであつた。是等の地點には、それぞれそれに因んだ名を附したチャペル（禮拜堂）が設けられありぬ。

是がアダムの墓で御座いますが、一番に聖地でも不思議と呼ばれて居ります。そしてキリストの聖き御血が岩の裂れ目からその頭に浸み込むや否や、この原人アダムは忽ち蘇生したと言ひ傳へられて居るのですよ」

と少しく怪し氣に笑つて居る。

ブラバーサは感慨無量の思ひに充ちて一言も發せず、マリヤの後から心臓の動悸を高め乍ら従いて行く。寺院の東の端の方には聖ヘレナの禮拜堂が建つて居る。北の神壇はキリストと共に十字架に釘付けられた一人の悔改めたる盜人のために

捧げられたものだと傳へて居る。主なる神壇は皇后聖ヘレナのために捧げられたものと傳へられて居る。その側面を地下へ十三段下つた處に、又十字架發見のチヤペルが建てられて居る。茲に聖ヘレナが夢の啓示に由つて三つの十字架を發見したと云ふ。

『聖ヘレナ様が夢の啓示に由つて三つの十字架を發見されまして、爰にチヤペルをお建てになつたのですが、その發見された三つの内でも何れがキリストの架けられた十字架だか分らなかつたので、そこで一つ一つ大病人に觸れさせて試みた所、その中の一つが病人を癒したのでそれをキリストのものとして保存されてあると云ふ事で御座います。そしてキリストの縛り付けられなかつた圓柱が在るのですが、併しそれは神壇の壁の奥に深く隠れて居るので容易に拜することは出来ないのです。所がその壁には丸い穴があいて居て、信心の深い禮拜者はそこにおいてある摺子木様の棒をその穴に差し込み、その圓柱にふれて棒に接吻するので。サア是からキリスト様の御墓を御案内申し上げませう』

とマリアは前導に立ちて奥へ奥へと進み入る。

寺の中央に獨立した長方形の大理石で造られたキリストの墓の前についた。兩人は恭敬禮拜稍久しふして救世主を追慕する念に打たれ、思はず知らず落涙して居る。澤山な古風を帶た燭燈に由つて照され、十八本の柱から成つた圓形の建築の中に置かれてある。そこに一人の番僧が居て、

「良くこそ御參拜に成りました。どうかキリスト様の御墓へ御賽錢をお上げ成さ
いませ。後生のため現世の幸福のためで御座います」

と拔目なき言葉でお賽錢を強要して居る。

ブラバ―サは心の内にて、

「ア、聖キリスト様もお氣の毒だ。賤しき番僧等の糊口の種に使はれたまふか。
世は實に澆季末法だなア」

と歎息しながら懷中を探つて少しばかりの賽錢を墓の前に捧げた。番僧は餓虎の如く其場で賽錢を拾ひ上げ、懷中へ隠して了つた。

「この寺院内の各種のチャペルや墓や、神壇や其他寺内の各部分、又は聖き墓を照して居るランプに至るまで、ギリシヤ・オルソドックス及びローマ・カトリッ

クや其他アルメニヤ派の間にそれぞれ所有がきまつて居るのです。それは此お寺ばかりでは無く、エルサレムの内外に散在して居る宗教上の由緒ある場所に付いても同様です。實に皮肉なアイロニーぢやありませんか。そしてこのお寺が彼の有名な十字軍の戦争の目的物であつたのです。「聖墓を記憶せよ」との聲は、第二回十字軍の出征に際して歐羅巴諸國の町々や村落を通じての叫びだつたので御座います」

「欧州の國々が聖墓を慕つて十字軍まで起した時代は、その信仰も至つて熱烈なものだつた様ですが、今日では最早信仰も墮落して了つて物質的觀念のみ盛になつて來ました爲に、斯る聖地の聖蹟も餘り世人に顧みられない様ですなア。節には神も叶はぬとルート・バハの教にも示されて在りますが、一時も早く聖キリストの再臨されて聖地をして太古の隆盛に復活させ、世界萬民を安養淨土の悦落に浴せしめ、キリストの恩恵を悟らせ度きものですなア」

「左様で御座います。妾の加入して居ます聖團は只々キリスト・メシヤの再臨のみを待つて居るのです。一時も早く高砂島とやらに再誕されたメシヤの此地に再

臨して下さる事が待ち遠しく成つて参りましたわ」

是より兩人は寺門を出て市街を歩行し初めた。肉屋や野菜物店や、其他土地にふさはしい物を賣つて居る雜貨店等が、みつしりと軒を並べて居る狭いオリエルトルな通りを過ぎて所謂「苦痛の路」へ出た。

「聖師様、ここは苦痛の路と謂つてキリスト様がピラトの宮殿からゴルゴタの地即ち今の聖セバルクル迄歩ませられたと傳ふる舊蹟で御座います。そして此路の上には十四の地點が指定されています。サア是から一々御案内申しませう」と前に立ち進む。

ブラバ―サは「成る程成る程」とうなづき、趣味深く味はひながらついで行く。「爰がキリスト様が磔刑の宣告を受けたまふた悲しい場所御座います。その次が十字架を負はせ奉つた場所です。この東側のチャペルを拜して御覽なさいませ。其時の光景がチャンと浮彫で以て現はしてあります」

と話しながらズンズンと歩みを進め、
「爰がキリスト様が母上様に會見遊ばした所で、熱烈な信徒の立止まつて動かな

い地點で御座います。彼所に「此人を見よ」のアーチが御座いませう。あれはピラトの訊問を受けた後にキリスト様がユダヤ人の群集の前に引出され種々の迫害と嘲罵とを受けたまふた所です」

と涙ぐまし氣にそろそろと歩みながら、後ふり返つてはブラバーサの顔を見詰めて、

「イエス荊の冕を被ぶり紫の袍を着て外に出づ。ピラト彼等に曰ひけるは「見よ是人の子也」と馬太傳に誌されてある事實で、キリスト様が二度目に倒れたまふた地點は爰だと云ふ事です。そしてキリスト様に従つて來たと話された地點は爰ですわ。このチャペルにチャンと彫込んであります」

と叮嚀親切に案内したりける。

キリスト教の偶像を以て飾られたる聖地エルサレムは、異教徒の場合よりも勝つてブラバーサの心を痛めしめたのは、後世の僧侶輩が聖書に録されたる一々の場所や由緒なぞを捏造して、巡禮者の財布をねらつて居ることである。一寸見る

と單純なる信仰の發露だらうと、神直日大直日に見直し聞直し宣り直すことも吾々と採つては出來得ない事も無いが、一般の信仰なき民衆やデモ基督教徒の眼には却つて不快に感ずるものたる事を恐れたのである。又後世の僧侶や信者がその内部的知識に空なるがため、外部に徴を求めむとして居る事の嘆ずべき一つの證據では有るまいか。ア、後世まで唯一の遺寶たる福音書の中に彼れ自身の姿を認め、それから靈泉を汲み得ることの出來ない信徒等の心の淋しさより、斯様な偶像を作り出してせめてもの慰安の料にして居るのでは有るまいか、なぞと又もや心の内にて長大嘆息をして居る。

聖師様、澤山の偶像的事物を御覽になつて非常に嘆息されて居る様で御座います。何時の世にも聖キリスト様は正しくは信仰され、又理解されなかつた様ですが、何時の世にも聖キリスト様が迫害されなかつた當時と、今日とを問はず、世間から御座います。キリスト様が迫害されなかつた當時と、今日とを問はず、世間から誤解されて居られます。そして普く世界から崇敬され玉ふ様になつた後の世は眞のキリスト様では無くて人間が勝手に勝手にキリスト様に似せて作つた偶像を崇め、キリスト教そのものを信ずる代りに、それから流れ出づる美しい果實のみを夫と誤

認んしてしま了しまひ、終つひにキリスト教けうは肝心かんじんの精神せいしんを失うしなひ神かみの國くにの教をしへである代かはりにそれは良よき意味いみに於おいてではありますが、地上ちじやうの幸福かうふくをもたらず手段しゆだんと墮落だらくして了しまつたので御座ございます。夫それゆゑ妾わたしも此この聖地せいちが偶像ぐうざうのみにて充みたされ飾かざられ、眞しんのキリスト様さまを認識にんしきし得えない事ことの矛盾むじゆんを悲かなしむので御座ございますと悔くやみながらマリヤは猶なほも市中しちゆうを歩あゆみ續つづける。

(大正一二・七・一一 舊五・二八 加藤明子録)

第七章 巡禮者〔一六三六〕

マリヤは再ふたび寺院じいんを辭じして、ユダヤ人じんクオーターの西端せいたんなる所謂いはゆるユダヤ人じんの働どう哭こくの壁かべを見みに行ゆかうでは有ありますまいかとブラバサを顧かへりみた。ブラバサは餘あまり氣乗きのりがせなかつたけれども、折角せつかくの案内あんないでもあり又また一度いちどは參考さんかうのためには非調ひしうべて置おきたいと思おもつたのでマリヤに一任いちにんして従ついて行く。荒あらい大おほきい石いしで築きつ

き上げた壁の間に迷宮の様に廻つて行くと、[□]神殿の廣場のふもとの丈の高い壁に突き當つた。石疊になつた路は壁に引添ふて三十間ばかり走つて居て、其先はピタツと行詰りになつて居る。其周圍は何となく恐ろしい様な氣味の悪い感じを與へる。茲でユダヤ人は滅亡したエルサレムの爲に聲を限りに號泣するのである。何時も幾何かのユダヤ人が爰に出て來て、頻りに祈禱を捧げたり聖書を拜誦してユダヤ民族の過去の光榮を思ひ浮かべて泣くのである。そして金曜日と土曜日との夕刻には、最も多人數が集まつて來るのである。又ベツスオーウー（渝越節）の様なユダヤ人の祭典日には、老若男女凡ての階級の人々が集まつてその中の長老らしきものが、

壊たれたる宮のために

と歌ふと群集は異口同音に、

吾等はひとり坐して泣く

と答へて歌ふ其有様は、實に物凄い感じを兩人の心に與へた。また、

毀たれたる宮のために
潰えたる城壁のために
過ぎ去りし偉大のために
われ等は死せる偉人のために
焼かれたる寶玉のために

と云ふ風に謠ふと群衆は同じ様に、

われ等はひとり坐して泣く

と答へて涙をしぼつて居る。

壁にはユダヤ時代、ローマ時代、アラブ時代に築き上げられた部分が明瞭に見分けられて、一番下層の大石はユダヤ時代の物だと傳へられて居る。それ等の年代と人々の觸接との關係とに由つて非常に黒ずんで汚なくなり、その表面にへブリューの文字が無數に書き録されてある。またその大石には方々に澤山の釘が打込んであるが、是等は諸國に散在して居る信仰強きユダヤ人が祖先の地を訪れて遙々と爰に來た時に打込んだ釘で、それが石に確りと刺つて居れば居るほど、神様が彼等を捕へて居らるることが確かだとの信仰に基づくものである。

兩人は爰に停立して往時の追懷に耽つて居た。そこへ十二三人の人が集まつて來て、其壁に頭をつけて接吻し初め出した。ブラバーサは此態を見て一種名状すべからざる感じに襲はれた。それは勿論宗教的のもので無く、また憐愍や同情に由來するものでも無く、また普通のキリスト教徒のユダヤ人に對して有つて居る反感から來る應報的感じでは勿論ない。それは氣味悪い程根深いもので、たとへば執拗な運命に對する恐れとでも言つたら良ささうな本能的のものである。こ

の光景を見た兩人は、他の英米人のやうに微笑しながら平氣で彼等の動作を見つづけた。一分間と雖もそこに立止まつて傍觀するに堪へずなり、仔細に其有様や壁などの歴史的構造にも注目してゐる暇なく、顔を背けてマリヤと共にその場を逸早く立去つた。

爰は實にエルサレムに於ける最も深刻味の湧いて來る場所である。☐ 永劫のユダヤ人☐と云ふ聲が何處からともなく耳に響いて來る。是等の干涸びた老人等は、何れもアブラハムの裔ダビデの裔である神より選ばれたるイスラエル民族の代表者である彼等の中から全人類の救ひ主イエス・キリストが生れたまうたのだ。彼等は二千六百年の間、祖先の光榮と正反對に人の世の中の一擯斥せられ、輕蔑せらるるものとして、その落着くべき祖國を有たずして世界を漂浪して居たのである。歐洲大戰後このパレスチナの故國は漸くユダヤ人のものと成つたが、未だ世界に漂浪して居るものがその大部分を占めて居るといふ有様である。是もキリストを十字架に付けた彼等の祖先の罪業の報いとも言ふべきものだらうか。夫れ

にしては餘り残酷過ぎると思ふ。キリストを釘付けにしたのは彼等ばかりで無く、人類全體なのである。キリストを救世主と仰がなかつたものは彼ユダヤ人ばかりで無く、世界人類の大多數である。聖書の豫言にかなはせむが爲とは云へ、餘りに可哀相だ。彼等はキリストの懷に歸つて罪の赦しを乞ふこと無しに、何時までメシヤを待望して世界を放浪するであらうか。それにしてもアメリカンコロニーの人達は、早くも目を醒ましてユダヤ人にも似ずキリストの再臨を神妙に生命、財産その他一切を捧げて待つて居る信念の力の強いには、感激の至りだとブラバーサの心は忽ちコロニーへと走つて了つた。

マリヤに導かれて「汚物の門」を出で、シロアムの谷を見下ろしながら城壁に添ふて歩み出した。キリストが盲者の目を癒されたシロアムの池や、バアージンが水を汲んだ泉や、ユダがキリストを賣つた金で買ひ求めた「血の畑」や、そのくびれた木なぞの所在を案内されつつダビデ王の墓の在る所からシオンの門を入り、ダビデ塔の下を通つて漸くマリヤと共に一先づカトリックの僧院ホテルに歸つて息を休め、夕餉を濟ませることとした。

ホテルの食卓では英米人四五人と同席せなければ成らなかつた。紳士を装つて威厳を持した長い沈黙と、無意味なあたり障の無い會話には流石のブラバサも堪へ得られなくなり、今親切に二度までも案内して呉れたユダヤの婦人マリヤとの對照を思つて、宗教信者と非信者との温情の程度に雲泥の相違あることを感得したのである。

食堂の何十と云ふ顔の何れを見ても、本當の信仰に燃え立つた巡禮の心に驅られてこの聖地に參つて居ると思ふやうな人は一人も見ることが出来なかつた。彼等は何れも物見遊山的の心でやつて來て、萬事に贅澤を盡し、六コースもある様な食事を一日に二度もしながら、それに自ら疑問を抱き謙遜な心持になる事なしに、満足し切つて盲滅法的に暮して居る醉生夢死の徒とよりは見えなかつた。

ブラバサは曾て耽讀した『二人の巡禮者』と云ふトルストイの童話を思ひ出して、なつかしきはずには居られなかつた。二人の敬虔なロシアの百姓は、一生かかつて其目的のために働いて貯へた金で聖地の巡禮に出かけたが、其中の一人は途中で不圖したことから一家全體が疫病になやんだ。他の一人は途すがら全家擧

つて疫病にかかつて居た不幸な全員を介抱し初めた爲に、友とはぐれて旅費に持つて来た金はその爲に残らず使つて了ひ、結局目的の巡禮を爲し遂げずして故郷に歸つた。第一の巡禮者は彼の友に逢つて巡禮をしなかつた彼の友の方が、自分よりも却つて本當の巡禮者であつたことを認めたと云ふ文句を心中に繰返しつつ、食卓を離れて吾居間に歸り、長椅子の上に横たはつた。マリヤは又もや例の歸神氣分になり、ブラバーサに軽く挨拶を交はし、周章で再會を約し乍らアメリカンコロニーをさして歸り行く。

ブラバーサは大神の神號を唱へ天津祝詞を奏上し終り、窓外の家々の薄明かい燈火を見下ろしながら、草臥れてソファの上に白川夜舟を漕ぐこととなりぬ。

(大正一二・七・一一 舊五・二八 北村隆光録)

第八章 自動車(一六三七)

マリヤはその翌早朝から又もやブラバースを訪問して、聖地エルサレム市街附近の案内を爲すべく、愴惶として僧院ホテルへやつて来た。ブラバースも聖地附近の様子を一應調査しておく必要もあり、高砂島の故國へも報告せなくてはならないので、此婦人の親切な案内振を非常に感謝の誠意を以て迎へたのである。マリヤもブラバースの人格には非常に尊敬の念を拂つて居た。獨身者のマリヤに取つては實にブラバースこそ唯一の心の友であり力となりしなり。

ブラバースは今日も早朝からマリヤに導かれて、聖地の巡覽にホテルを立ち出づる事となつた。ジャツファ門外から出發する乗合自動車でベツレヘムに往復する事とした。自動車は土埃を立てながらゲヘンナの谷へと降つて行く。

元はエルサレムの市の西南にあつて、北はシオンの山、南は岡で以て區畫された深い細長い谷である。此處は昔ユダヤとベニヤミン族の境になつて居て、ソロモン以後、ここで恐ろしい人の犠牲が行はれたが、その後は屍體や市の汚穢物を捨てる場所となつて了つたのである。悪人の運命に付けて、[『]ゲヘンナに投げ入れらるべし[』]と云はれて居るのは即ち此處である。

急がしく馳走しつつ自動車は高みになつた豊饒な平野を横ぎる。古い橄欖樹の植わつた野や小丘である。道路は九十九折になつて、緩勾配の坂道を上つて行く。左手の遠方に前景ときはだつて違つた長い一列の山脈が見える。その麓の深き所に、竹熊の終焉所なる有名な死海が照つて居るのである。

自動車が小高い丘の上に来たので、窓から首を出して眺めると死海の面が強烈な太陽の光を受けてキラキラと輝いて居るのが見える。驢馬や駱駝に乗つた田舎人の群が幾組ともなく通つて居る。

自動車を丘の上に停めて、ブラバ―サとマリヤの二人は四方の景色を瞰下しながら、沿道の色々の傳説や場所に就て問答を始め出した。

「マリヤ様、聖地附近の色々の歴史や傳説を聞かして頂きたいものですなア」

「この丘の上で四方を見晴らしながら、聖地案内の物語も又一興だと思ひます。妾が記憶の限り申上げませう。傳説や口碑と云ふものは随分間違つた事が多いものですから、萬一間違つて居りましたもそれは妾の責任では御座いませぬ。傳説や口碑が悪いのですから」

「ハイ承知致しました。何分宜敷くお願いいたしませう」
「有名なマチの泉から發端として申上げます。マチの泉は一名マリアの泉と云つて居ます。その前の名の由來は幼兒キリストを拜すべく、星の導きを便りに遙々と尋ねて來た東方の博士等は爰まで來て其星を見失ひ、途方に暮れて居たところ、この井戸の水を汲み、疲勞を癒やさむと立止まつた時に、案内に立つた星が泉の水に反映して居るのを見付け、歡喜に充たされて彼等は再びこれに従つて進んだのでマチの泉と稱へられたと云ひます。第二の名は聖なる家族がベツレヘムの道に爰に息つたと想像される處から、マリアの泉と稱へられたと傳はつて居るので御座います。またこの丘を下る途中の右側の小石が無數に澤山ゴロ付いて居る小豆の原が御座いますが、傳説に據るとキリストが或時この場所を御通りになると、一人の野良男が畑で働いて居たので、キリストがお前は今何を蒔いて居るかとははれたら、彼の男は豆を蒔いて居ながら石を蒔いて居るのだと答へた、それから後收穫時になつて彼の男は豆の代りに石ばかりを收穫しなければ成らなかつたと云ふ事で御座います」

「高砂島にも空海の事蹟に就て石芋なぞの傳説もあります。凡て傳説と云ふものは古今東西相似のもの多いは不可思議と云ふより外はありませぬ。何かこの小豆ヶ原にも神祕的の意味が含まれて在るのかも知れませぬから、傳説だと云つて餘り馬鹿にも成りますまい、アハ、ハ、ハ、ハ。時にマリアの泉に映つた星は、高砂島に今日も現はれて玉の井の水に影をうつし、萬民の罪穢を洗ひ清めて居られます。私はこのマリアの泉の御話を聞いて何となく崇高偉大なる瑞の御魂の聖主の倂が偲ばれてなりませぬわ。一度玉の井の水を汲み取るものは、直ちに天國の門に進み得る良い手蔓に取り付くことが出来るのです」

「ウヅンバラチャンダー聖主が一日も早くこの聖地に降臨されて、靈の清水にかわいた吾々に生命の露の恵みを與へ玉ふ日が待ち遠ほしく御座います」

「マリア様、有名なラケルの墓は何れの方面に御座いますか」

「ラケルの墓ですか。それはこの道端の小さい近代の建築物であります。ここにヤコブが愛妻の亡骸を葬つたと傳へられて居ります。それよりも美しい物語ののこつて居るのはダビデの泉ですわ」

□ その美しい物語を拜聴いたしたいものですなア[□]

□ 或る時ダビデが敵軍に取り圍まれ、疲れ果てて彼の故郷なるベツレヘムの門外にある此清泉の一杯の水を渴望して止まなかつた。所が忠實なる部下の一人がダビデのこの泉水を渴望して居る事を探知して、黙つて一人で出かけて非常なる危険を冒した後、漸く少しばかりの水を汲んで歸つて來たのです。ダビデは部下のものが自分に對する眞心の愛から、種々の危険を賭してこの靈水を汲み得て歸つて來たその辛苦を思ふて、その水をば一介の人間の飲み物にするには餘り勿體ないから神様の供物にせむと、恭しく神に感謝を捧げた上、大地にそそいで了つたと云ひ傳へて居ります。信仰も其處まで行かないと駄目ですなア[□]

□ 信仰の力は山嶽をも移すとか申しまして、世の中に信仰心ほど強く清く且つ尊いものは有りませぬなア[□]

□ 左様です、信仰の力ほど偉大なものは有りませぬわ。妾だつて三十の坂を越え乍ら未だセリバシー生活に甘んじて居りますのも、依然信仰心のためですもの。ベツレヘムの町が幾つもの丘の上に美しく位して居りますが、彼は世界に於ける

最も小さきものとしられて居ります。併しながら妾は決して小さきものとは思ひませぬ。何故ならば信仰の對照物いな御本尊なるエスキリストを、イスラエル民族のみならず世界全人類救ひのために主を産み出しましたからです。如何にも救世主を現はしたこのパレスチナの聖地は偉大です。いな莊嚴味が津々として湧くやうです。再臨のキリストを出した綾の聖地も亦、偉大と云はねばなりませんませぬ」

「この聖地には近代的の教會やホスピースや僧院が諸所に澤山建つて居りまして、まだ古い古いユダヤ人街が彼方此方に残つて居りますので、妾はそこを通行する度毎にキリストの當時を偲ぶので御座います。アレ彼の通り、往來の眞中に駱駝が呑氣さうに寝そべつて噛みなほしをやつて居ます。サア是から車は止めにして、徐々テクル事に致しませうか。自動車で素通りばかり致しましても餘り有益な見學にもなりませぬからなア」

ブラバーサは何事も一切マリヤに任して居たので、言ふが儘にマリヤの後から従いて行くのであつた。二人は後になり前になりしながら道を行くと、相貌の品

のよいユダヤ人に幾人も出逢ふた。

ブラバ―サは心の中にて、

「成程イスラエルの流れを汲んだユダヤ人は何處ともなしに氣品の高い、犯し難い處がある、是では神の選民だと言つても餘り過言では無い。吾身は名に負ふ高砂の神の國から遙々出て來たものだが、神の選民と稱するユダヤ人の氣品の高い所を見て、何だか俄にユダヤ人崇敬の氣分が頭を擡げて來さうだ。そして神の獨子と稱するキリストの聖跡を尋ねて居る自分は、層一層神様より重大なる使命を與へられて居るやうだ」

と心に種々の感想を抱いて居る。

「聖師様、聖地に於て第一番に見るべきものが御座います。それは聖誕の場所に建てられたと稱して居る「聖降誕の寺院」です。是から其寺院へ拜觀に参りませう。現今にては、ローマ・カトリックやギリシヤ・オルソドックスやアルメニヤ教會の分有になつて居ます。そして此寺院も昔にコンスタンチン帝が建立されたものだと言ふことです。その當時は金銀や大理石もモザイクで贅澤に飾られて

居たさうです。今ではモザイクが少しばかり残つて居りますが、妙に冷やかな
荒廢した厭な感じを與へます[㊦]

と云ひながら、漸くにして寺の門前に着いた。

背の低い、肩先までも届かぬ様な長方形の石の入口を潜ると、コリント式のカ
ピタルを持つた十本づつ四列の圓柱が寺院の内部を仕切つて居て、質素な様だが
何となく莊嚴な感じがする。このバシリクは實に現在に残つて居るキリスト教の
建築物の中では最も古きものだらうと謂はれて居るのである。大神壇の下には聖
誕の洞窟があつて、チャペルに造られ三十二箇の小さいランプで薄暗く照らされ
てゐる。誕生の地點は神壇の下に大理石を据ゑ、其上を銀の浮彫でキリスト聖誕
の地と云ふ事が録されてある。この地點は聖地における他の何れの場所よりもズ
ツと古くして、最も信憑に足ると云ふことである。何故なればこの場所は紀元前
四世紀の頃に生きて居た聖ジエロームよりも、二百年以上も前から既にキリスト
教徒によつて非常に畏敬されて居たからである。

其他寺院の地下には色々な由緒を附したチャペルが散在してゐる。馬槽のチャ

ペルもその一つである。その馬槽は大理石で立派なものが出来て居るが、幼児キリストがその中に置かれたマチ禮拜の神壇　　幼児のチャペル　　その場所へ母達が隠しておいた幼児をへロデが殺さしめた聖ヨセフのチャペル　　その場所では彼がエジプトに避難せよとの夢の啓示を受けた。その他聖ジエロームの住居であった所に設けられたジエロームのチャペル、及び岩の中に掘られたこの聖者の墓などが默然として三千年の昔を物語り居るなり。

(大正一二・七・一一　　舊五・二八　　加藤明子録)

第九章　　膝栗毛(一六三八)

この寺院の東南の方、少し隔たつて『乳の洞窟』と云ふのがある。これもチャペルに成つて居て、入口の上に聖母が幼児キリストに乳を吞ませて居る立像が置かれてある。傳説に由れば、このチャペルの洞穴に聖なる家族が隠れたと云ふ。

聖母の乳の滴りが今でも洞穴の石灰石に印せられて居る。婦女がそれへ參詣をすれば乳が良く出る様になると信じられてゐる。

兩人は寺院を辭して少しく先へ進んだ。さうすると、ヨルダンの谷に向つた方面の廣い眺望が展開する橄欖の樹の植わつた平野……それは『羊飼の野』といふ名稱が附せられてゐる。天界の天使が羊飼にあらはれて、

『われ萬民に關はりたる大なるよろこびの音信を爾曹に告ぐべし』

とてキリストの降誕を告げ、多くの天軍が天の使と俱に、

『天上ところには榮光神にあれ。地には平安、人には恩澤あれ』

と神を讚美し、羊飼達がベツレヘムへと急いだのは、此の邊りだと云はれてゐるが、この話しに應はしい美しい氣分の良い場所である。場所の眞偽は問題となすに及ばぬ、假令少々違つて居つても、此所であつた事にしておき度いものだとブラバーサは心の中に思ふのであつた。

兩人は同じ道を歩んでエルサレム市街のホテルへ歸らうとする時、今まで清朗なりし大空は俄に墨を流した如く眞黒になつた。兩人は世の終りの近づいた様な

気分きぶんに襲おそはれて居ゐると、ノアの大洪水だいこうずゐを思おもひ出ださせると、やうな大雨おほあめが土砂降どしゃぶりに降ふつて来て容易よういに止やみさうにもない。然しかし暫時しばらくの間あひだに雨あめは小ちひさく成なつて稍安心ややあんしんする事ことを得えた。斯こんな事ことなら自動車じどうしゃを返かへさなかつたが宜よかつたにと、今更いまさらの如ごとく後悔こうくわいしても後あとの祭まつりであつた。この大雨たいうは恐おそらく半年はんねんの日照ひでりの終をはりを畫くわくする祝福しゅくふくされた最初さいしよの慈雨じうであつたに相違さうゐない。雨あめが止やむと紅塵こうちん萬丈ばんぢやうの往來わうらいは、スツカリ洗あらつた様やうに爽快さつきわいな坦道たんだうと變かはつて了しまつた。丘をかの上うへにはエルサレムの市街しがいが雨あめあがりの空そらに其美そのつくしい姿すがたを現あらはしてゐる。天てんの一方いつぱうの嵐あらしの名残なごりの雲くもには、エホバの御約束おやくそくの證據しよつことも稱となふべき虹にじが美うるはしく七色しちしよくに映はえて高たかく長ながくかかつて居ゐる。ブラバ―サは、

「われ聖域せいゐきなる新あたらしきエルサレム備そなへ整ととのひ、神かみの所ところを出いで天てんより降くだるを見みる。その状さまは新婦しんぶ新郎しんらうを迎むかへむ爲ために飾かざりたるが如ごとし」
とある默示録もくしりくの言げんを心こころの中なかに繰くり返かへすのであつた。次ついでで兩人りやうにんは雨あめの晴はれたるを幸さいはひとして、勇氣ゆうきを鼓こして又またもやハラム・エク・ケリフの神しんでん殿でんを拜觀はいくわんせむと歩ほを運はこぶのであつた。エルサレムの町まちの東南隅とうなんぐうキドロンキドロンの谷たにを隔へだてて、橄欖山かんらんざんに面めんして

居る長方形の場所に着いた。今この廣場には回回教の二つのモスクが建てられてある。昔ダビデが神壇を設けたのもやはり此處である。

彼はここに莊嚴無比なる大神殿を建築する心算で、澤山な建築の材料まで蒐集したが、尊き清き神の宮殿を建てるには平和仁愛の人でなくては神慮に叶はないのに、彼は戦ひの人として多くの血を流したので神様から其任でないとして差止められ、其子のソロモンが初めて父の準備しておいた豊富な材料を以て七ヶ年の日子を費やして、神殿及び外圍ひや内庭並びに僧院を完成することとなつた。その他に彼は十三ヶ年もかかつて附近の地をトし、自分のために一つ、猶それに面して自分の妻アラオの娘のためにもモ一つの宮殿を建てたのである。僧院はソロモン時代の神殿の廣場を取り圍んで居た。外壁には東に黄金門あり、南に單門、二重門及び三重門が付いて居たと云ふ。其外に猶エルサレムの城壁が在つたのだが、今日の處では跡方も無き有様である。ダビデは主のために建てらるべき宮は比類なく莊麗にして、萬國を通じての光榮で無ければ成らぬと言つて居たが、ソロモンの建てた神殿は實にダビデの言つた通りの莊麗な宮殿であつた。この神

聖なる丘の上に純白な大理石で成り黄金で飾られ、要塞や宮殿で取圍まれ、其美観は世界に鳴り響いて居たのである。その後の神殿はユダヤ人の崇拜の中心となり、アツシリア王ネブカドネザルのために破壊され、ユダヤ人はバビロンに捕虜として連れ去られて了つた。それは紀元前五百八十五年頃のことであつた。ユダヤ人は捕虜から免れて歸り、種々と苦辛して建てた第二回目の神殿は第一回のものよりは遙に劣つたものであつた。その後キリスト降誕の少し以前に、ヘロデ王はソロモンの神殿に匹敵する様な第三回目の立派な宮殿を建てたのである。以上三つの神殿は全く同じ場所に位置を占めて居た。キリストが幼兒として參詣せられ、學者達の間に立つて問答し、兌銀者や商人を追ひ出し神の道を宣べ傳へたのも、此へロデの神殿に於てであつた。その後紀元七十年、ローマ皇帝チツスに由るエルサレムの破壊と共に神殿も「一つの石も石の上に圮されずしては遣らじ」との言葉通の運命を見るに至つたのである。百三十年にハドリアン帝がここに異端の神ジユピテルの大神殿を建てたが、それは六百八十八年に又回々教のモスクに變へられて了つたのである」

兩人は先づ廣場の南端にあるモスケ・エル・アクサの地下になつて居る宏大な基礎建築を見た。無数の四角な石柱が高く廣々した空間を仕切つて居る。その角柱の上部は穹状を爲してお互に連り合つて居る。明かりは南方の壁に小さい窓から少し漏れて來るばかりで、内部は物すごい程うす暗い。是は俗にソロモンの殿と云はれてゐる。マリヤはソロモンの神殿やヘロデの神殿の猶残つて居る石垣を示しながら、

「この場所はローマとの戦ひにあたり、ユダヤ人が避難した所です。又十字軍の時にも殿となつたと云ふことで御座います」

と諄々として由緒を説き、エスの搖籃、二重門等の由來を細々と説明するのであつた。

「モスケ・エル・アクサはマホメット教に關して色々の由緒が在るやうですな」
「ハイ、マホメットが天使ガブリエルに導かれ、不思議な白馬にまたがつてメツカ市から一夜の間にエルサレムに來た所として、回教徒に取つて極めて神聖な場所の一つになつて居るので御座います」

と云ひながらマリヤは後振り返りつつ奥に入る。

廣い本堂には圓柱が無數に立つて在り、床は一面に贅澤な毛氈が敷詰められ、所々にムスルマンが坐つて祈禱を捧げてゐる。其後部に岩が有つて其岩の上にキリストの足跡が印せられて居ると云ふのも可笑しいものである。ムスルマンに取つてキリストはアブラハムやモーゼと共に豫言者の一人に數へられて居るが故に、彼等はキリストに就ての由緒をも斯くの如く尊崇畏敬して止まないのである。

次に兩人は廣場の中央にある大きな、クボラをいたたく八角堂のクーベット・エスサクラ（亦是岩のクボラ）を見物した。この伽藍は大きい岩の土臺の上に建てられて居て、その上部は内部に自然の儘露出して居る。この岩上に於てアブラハムが其子のイサクを神への犠牲にしやうとしたと傳へられて居る。回教徒は犠牲に成らうとしたのは、イサクで無くてその長子イスマエルだと主張してゐる。何となればイスマエルはアラブの種族の先祖になつてゐると云はれてゐるからだ。また回教徒の傳説に由ればマホメットは彼の不思議の夜の旅行に於て、この場所から天へ昇つた。彼の昇天の際、この岩は豫言者に従つて共に昇らうとしたが、

併し神は世界がこの神聖な記念物を失ふことを欲しないで天使ガブリエルを残し
その力強い手でその岩をおさへた故に今でもその兩端に天使の指の跡が残つて居
るとか唱えられてゐる。サラセン式に「しつつくく」飾られたステインド・グラ
ツスの窓のために内部は蝋燭を燈さなくては歩行ない程暗かつた。廣場の東北端
に大仕掛に發掘された場所がある。地の面から階段をいくつも下つて行くと、セ
メントや石で縁を取つた大きな貯水池様のもの一端に達する。ここはヨハネ傳
に録してあるベチスダのプール（池）だと云ふことで、三十八年間病みたるもの
が爰で池水の動くのを待つて居て、キリストに由つて癒された所ですよと、マリ
ヤはこの由緒は根據がありませんと強く言つて證明した。
終日雨が降つたり止んだりして居た。夕方の空は美はしく晴れて紺碧の雲の肌
を露はして居る。神殿の廣場の角にある燭臺の様な形をした塔の上では、アラブ
がメツカの方角を向ひて頻りに手を擧げて日没前の祈禱をしてゐた。その長く響
くオリエントなメロデーはエルサレムには應はしく無いと感じながら、兩人
は急いでアメリカンコロニーを指して歸路に就きける。

第一〇章 追懷念(ついくわいねん) (一六三九)

その翌日(よくじつ)も亦(また)、スバツフォード(およ)及びマリヤと共に(とも)ブラバーサは自動車(じどうしゃ)を雇(やと)つて、死海(しかい)、ヨルダン、エリコ等(とう)の地方(ちほう)見物(けんぶつ)に出(で)かけた。りける。

ジャツファの門(もん)からダマスカスの門(もん)、ヘロデの門(もん)の前(まへ)を通(とほ)つてキドロンの谷(たに)からエリコの道(みち)へと出(で)た。自動車(じどうしゃ)がしばらく走(はし)ると、橄欖山(かんらんざん)の東南(とうなん)ベタニヤの村(むら)を通(とほ)る。ベタニヤはアラブの名(な)ではエル・アザリエと云(い)つて居(ゐ)る。この名(な)はラザロから來(き)たので、アラブはラザロのL(エル)を冠詞(くわんし)と認(みと)めて省略(しょうりゃく)したのだといふことである。ラザロは回教徒(くわいけうと)の間に(あひだ)於(おい)ても聖者(せいじや)として尊(そん)敬(けい)されて居(ゐ)るのである。ベタニヤの村(むら)はキリストに關(くわん)する種々(しゆじゆ)の美(うつく)しい物語(ものがたり)で充(み)ちて居(ゐ)て、その名(な)を聞(き)いただけで心(こころ)が暖(あた)かく成(な)つて來(く)る。癩者(らいしや)シモンの家(いへ)、そこで昔(むかし)マグダラのマリヤがキリス

トの足を涙にて濕し、頭髮を以てぬぐひ香油をこれに塗つた。マルタ、マリヤの姉妹の家も爰にあつたと云ふ。ラザロが死後四日を経て蘇へらせられた所も亦ここで在つたといふ。今はミゼラブルな四五十の回教徒の家が、其處此處に散在して居るに過ぎないのである。

三人は下車してラザロの墓やシモン、マルタ、マリヤの家の廢趾と稱せられて居るものを見物した。ラザロの墓と云はれて居るものは非常に大規模なもので、滑りさうな階段を地下へ向かつて二十二段も下つて行かねばならぬ。内部は穴藏のやうに眞つ暗で、持つて行つた蠟燭で照して見なければ成らなかつた。丁度桶伏山麓の神苑内の地下の修行室をブラバ―サは思ひ出さずには居られ無かつた。村のアラブの子供等が「バクシツシユ」（小錢のこと）と叫びながら、車の周圍に群がつて來てブラバ―サ一行の輿を醒ますのであつた。

ベタニアの南でこれに對して居る丘の上にベツファ―ジエの村がある。ここで使徒たちがキリストの指示のままに木につながれた一頭の牡の驢馬を見付け、キリストはそれに乗つて都へのり込んだと傳ふる所である。

ベタニアを出て少しばかり歩むと、路傍に小さいチャペルが建つて居る。馭者は主を迎へに來たマルタが爰で彼に逢つた所だと説明する。道は段々と谷に下つて行く。到る處岩の山ばかりで薄く覆はれた土は橄欖は勿論灌木や草類さへも生じない。自然は全く死んだ様でその光景は物すごい位である。所々に駱駝の群が飼放しにしてあるのは、今まで他所で見受けなかつた光景である。マリヤはよくエルサレムと聖者キリストとの關係を熟知せるものの如く、頻りに新約の文句を引出して説明して居る。

三人はエリコとエルサレムとの中間まで出て來た。道路は再び上り坂となる。自然は全く荒れ果てて居て、生物らしきものは何一つ見當らない。傳説によれば良きサマリア人の話は此あたりだとか、小山の頂にサマリア人の旅宿と名の付いた、小さい建物のルインが寂し氣に立つて居る。

それより前は道路が山々の中腹を縫ふて死海の谷へと急轉直下するばかりである。道で時々羊の群に逢つた。その群の中には、今生れたばかりの二三匹の羊の兒を荒いメリケン粉の袋に入れて、背負はされた驢馬が交つて居るのは、何とな

く可憐な光景であつた。下の方に時々谷の木の間から死海の面が輝いて見えて来る。

三人は遂にヨルダンの谷に下つた。兩側の山は削つた様に屹立して居るが、中は廣々として居て、これが地中海面以下四百メートルの谷底にあるとは到底受けとれない位である。葦草が所々に生えて泥路と砂地の中を死海の濱へと向かつた。野生の鶴や放ち飼の駱駝に途々出會ふ。

濱に近く鹽を採るための水溜りがあつて、端には眞白の結晶が附着して居る。そして二三の見すばらしいアラブの小屋が荒い砂の上に立つて居るばかりで、驢馬や駱駝の縛ぎ場になつて居るので恐ろしい程不潔で厭な臭氣が鼻を突く。水面は全く波浪なく朝の麗かな日光にかがやいて居て、死海と云ふ恐ろしい名稱は應はしく無いやうに思はれる。水には強度の混和物が在るために多少の濁りを帶びて居る。水を指頭につけて味はつて見ると強烈な苦みがかつた鹽辛い鑛物質を蓄して居る。鑛物質の割合は百分の二十四乃至二十六で鹽分は百分の七だと云ふことである。水が重いので泳がうとしても、身體が全部水面に浮かみでて了つて

泳ぐことが出来ぬのである。生卵子でも三分の一は水面に浮かみ出ると云ふ事である。死海の水は一種の滑かな膚ざはりを與へるが、容易に一旦人の身に觸れた以上は鹽氣が離れないので氣持が悪い。

三人はそれよりヨルダン河へと向かつて進んだ。廣い平野は一面に黒ずんだ土地で、一見した處非常に豐饒らしく思はれるが、土地は含まれて居る鹽分のために全然不毛の地となつて耕作物は駄目なのである。

しばらくあつて三人は、身の丈以上もある葦の中をすれずれに通りながらヨルダンの河畔マハヂツト・ハヂレと云ふポプラや柳の生えて居る渡船場の様な場所に到着した。細い木の枝を組合せ葦で屋根をふき、濕氣を防ぐため細い材木で一丈ばかりを床を高め、梯子様の階段でのぼつて行くやうにした南洋風の土人の原始的の小屋と木蔭に旅客の休憩のため二三のベンチとがある。イタリー語を話すスペイン人の二三のフランチエスカンの坊さまが、そこで休憩して居た。今日は日曜日の事として、朝早くからここへ來て野天でメスをしましたと話して居た。

木立ちの下から河の水面が見える。平常から濁つて居る筈の水は昨日の大雨の

ために猶更黄色になつて居た、水量は多くして併も流れは急である。有名なのに似氣なく小さいと聞いて居た通りで、河の幅は一百尺前後の程度である。ここは巡禮の人々の浴場になつて居てキリストが洗禮者のヨハネから洗禮を受けられた所と傳へられて居る。昔のキリスト教徒の間にはヨルダン河で洗禮を受ける事を非常に大切な事とし、多勢の巡禮者はアラブの案内者に引率されて羊の群の様にヨルダンの谷をここ迄下つて來たものである。それから當時この場所は河岸が大

理石でおほはれて居たと云ふことだ。

馭者は特にロシアよりの巡禮者の敬虔な態度に就いて話した。彼等は所在窮乏を忍んで茶とパンとのみで旅行を續け、その持つて來た金を全部寺々に捧げて了ふのだと云ふ。ブラバースはエルサレムの方々の寺でロシア人の奉獻したと云ふ金銀や寶玉づくしの聖母の像を見受けた事を思ひ出して、高砂島の聖地に於ける信者の態度に比較し長大嘆息を禁じ得ないので在つた。三千世界の救世主嚴の御魂瑞の御魂の神柱に現在に面會の便宜ある高砂島のルートバハの信徒の態度は、このロシア人の信仰に比べては實に天地霄壤の差ある事を深く嘆じたのである。

ヨルダン河及び死海から程遠からぬ所にエリコがある。現在のものは舊新約時代のエリコとは違つてゐる。是から多少ヨルダンの中央部の方へ離れて居る。見すぼらしい小さい村落で、土人の家屋と質素な教會やモスクが二三見えるばかりである。谷底に位して居るので氣温は非常に高く、蒸し暑く植物は皆准熱帶的のものである。無花果や棗や芭蕉實の外、黄色の香りの良いミモザが咲き頻つて居るのである。三人は新エリコの村落を通つて西方の山の近くの發掘された新約のエリコを見に行つた。爰にヘロデ王が其宮殿を建てたとの話がある。その一角は今より十餘年前ドイツ人の手によつて發掘されて居た。舊約のエリコの所在は其處とは違つて、現在のエリコから東北の方徒歩二十五分ばかりの所にある。

エリコからエルサレムの方角の斷崖になつて居る岩山の眺望は物すごい様である。中腹にギリシヤ正教の一僧院が建つて居る。その背後の山はそこでキリストが惡魔の誘惑を受けた所から「誘惑の山」と云ふ名が付いてゐる。四十日四十夜の斷食の荒野もこの先の方にあると馭者の話してあつた。

三人は歸路についた途中、橄欖山の麓にあるゲツセマネの園と聖母の寺とを訪

れて見た。ゲツセマネの園は三方が道で圍まれ不規則な四角形を爲し、厚い石壁を以て圍らされて居てフランチエスカンの所有に成つてゐる。ここを新約のゲツセマネと定めたのは四世紀以前のことだと云ふ。門の外には自然の岩の頭が地上に現はれてゐてその上でペテロ、ヤコブ及びヨハネが眠つたのだと傳へられてゐる。園内には非常に古い數本の橄欖の老樹が植わつて居て、その時からの物だと云われてゐる。橄欖樹は人間が觸れさへしなければ幹が枯れた後でも、其根から新しい芽生が出て斯して世紀から世紀へと生延びると云ふ事であるから、この傳説は或は事實に近いものかも知れない。其他ユダがキリストに接吻した地點まで明示されて居る。エルサレムや橄欖山の地位からしてゲツセマネの園が此邊りに在つたことは事實らしい。併し七十歩四方ばかりの狭い土地を重くるしい石垣で圍んで其中を墓地のやうに、また近代的の庭園のやうに飾つて是をゲツセマネの園と爲すことは、無限の大きさと深さを持つたものを無残にも限り有るものの中に閉ぢ込めて置くことは實に殘念である。ブラバサは凡ての在來の法則を破つて靈のみで畫かれた様なロンドンのナショナル・ガラリーにあるエル・グレコの

筆を思ひ浮かべて、此の物足りない感じを補つて居た。

聖母の寺はゲツセマネの園に對して居る紀元五世紀以來存在してゐる古い寺院である。その主要部分は地下に成つて居て大理石の階段を四五十下つて行くとマリアの棺、その兩親の棺、ヨセフの墓、キリストの血の汗を流された場所等がある。

ケドロンの谷をシロアムの村の方へ少しばかり下ると、山の麓に奇妙な三つの建築物が竝んで居てアラブが住んでゐる。

ブラバースは初めて此の地に來たり、親切なるアメリカンコロニーの人々に澤山の聖書上の由緒ある場所を案内され満足の状態であつた。ア、聖地エルサレムそれは學者とパリサイ人の都、死せる儀禮の中樞また死海及びヨルダン、それは荒野に叫ぶ洗禮者ヨハネの國すべてが單調で乾き切つて死んで居る國、ルナンをして世界に於て最も悲しき地方と云はしめたエルサレムの近郊よ。一時も早くキリストの再臨を得てこの聖地を太古の光榮の都に復活し、神政成就の神願を達成せしめ度きものであるとブラバースは内心深く祈願を凝らしつつ一先づ三人はアメ

リカンコロニーへと歸り行く。

その翌日^{よくじつ}^{また}もやブラバーサはマリヤに案内^{あんない}されて、湖^{みづうみ}の水清^{みづきよ}き山^{やま}々^{やま}に翠^{みどり}の影濃^{かげこ}
く美しく^{うつく}花咲^{はなさ}き小鳥^{ことり}の聲^{こゑ}の絶^たえない自然^{しぜん}全體^{ぜんたい}が笑^{わら}つて居^ゐる、さうして其湖^{そのみづうみ}のほと
りでキリストが默想^{もくさう}し祈禱^{きたう}し且^かつ教^{をしへ}を垂^たれられたガリラヤの地^ちへと進^{すす}んだ。エル
サレムとガリラヤ、それはキリスト教^{けう}の示^{しめ}す二元^{にげん}主義^{しゆぎ}の象徴^{しやうちやう}である。死^しを経験^{けいけん}す
ること無し^なに生^{せい}の恩恵^{おんけい}は分^{わか}らない、律法^{りつぽう}に依^よりて死^しし信仰^{しんかう}によりて生^{いく}ること、こ
の轉換^{てんくわん}こそ宗教^{しうけう}そのものの奇蹟^{きせき}的^{てき}力^{ちから}であるべきものなり。

(大正一二・七・一一 舊五・二八 加藤明子録)

第三篇

花笑蝶舞^{くわせうてふぶ}

第一章 公憤私憤（一六四〇）

夏風に青葉のそよぐ橄欖山の頂上に三人のアラブが立つて雑談に耽つてゐる。キドロンの谷からは白い煙のやうな雲がしづしづと橄欖山上目がけて襲うて来る。ユダヤ人の計畫したシオン大學の基礎工事は殆ど落成に近付き、樵夫や大工や手傳が幾十人となく忙しげに活動を爲し居たり。

アラブはテク、トンク、ツீロと云ふ三人である。

テク「オイ、吾々は回々教のピュリタンとして朝夕忠實に神に仕へ、そして僅の賃金を貰つて異教徒の頭使に甘んじ、駱駝のやうにこき使はれてゐるのも、餘り氣が利かぬぢやないか。たうとうユダヤ人奴、パレスチナの本國を取返し、此聖地を吾物顔に振舞ひ、おれ達の仲間を見ると、丸で奴隸の様に虐待するだないか、朝から晩迄同じ様に働いて、ユダヤ人は一弗の俸給を貰ひ、おれ達は半弗よりくれやがらぬのだから……本當に亡國の民になりたくないものだなア」

ツீロ「何と云つても仕方がないサ。強い者の強い弱い者の弱い時節だからなア。

ユダヤ人だつて、二千六百年が間、亡國の民として今迄苦んで來たのだから仕方がないよ。チツとは威張らしてやつてもよかる。なア、トンク

「彼奴ア、世界統一を夢みてゐやがつたのだが、到頭時節が到來して神の選まれたパレスチナの本國を吾手に入れたのだから、何といつても世界の覇者だ。長い物に巻かれ……と云ふのだから、おれ達の身の安全を計らうと思へばマア辛抱するのだな。半分でも月給くれるのはまだしも得だよ、贅澤さへしなけりや、生活を續けて行けるのだからなア。さう不平を云ふものだないワ、何事も有難い有難いで暮さへすれば世の中は無事泰平だ。神様の爲に働くと思へば何程月給が安くても待遇に差別があつても構はぬぢやないか。それを忍ぶのが回々教のピュリタンたる務めだからなア」

「何と云つても、おれは不平でたまらないワ。おれは自分一人の生活が何うだのかうだのと云つて、ソナケチなことをボヤクのだない、アラブ一黨の爲に此差別的待遇を憤慨するのだ。不平にも色々の色合があつて、公憤と私憤がある。おれたちのは決して私憤ではない天下の公憤だよ」

ツ—口「何程公憤だと云つても、蚯蚓が土中でないてるよなもので、何の影響も及ぼすまい、おれ達だつてテクの言位には興奮し、大にアラブの爲に氣焔を吐く所迄は行かない。何事も時節だからなア」

テク「貴様はそれだから、何時迄もラクダの尻叩き計りして居らねばならぬのだ。公憤のないやうな人間は最早人間の資格がないのだ」

ツ—口「ヘン、汝のは餘り公憤でもあるまいぢやないか。大體の問題が僅半弗の喰違ひから起つたのだらう、そんな所へ公憤を使つて貰つちや、公憤が落涙するだらう。抑も公憤とは社會とか團體とか、國家とか云ふ大問題に對して、自分の主張を充たすに到らない場合に起す意氣の發動であつて、極めて愉快な面白い男性的氣分を有したものでなくてはなるまい。自己の欲望を満たすに足りないといつて、發動する所の感情の動作といふものは所謂私憤だ。そんな女性的氣分に充たされたことを云ふと、ユダヤ人が聞いたら馬鹿にするぞ。國家社會を憂慮する念最も強しと雖も、時代は其意志を容れてくれず、感慨措く能はずして切腹する如き、或は社會を思ふの情急激にして刻苦勉勵能く其用をなし、社會に盡す如き、

時に自分が他人に冷笑されて大に憤慨する所あり、日夜自分の向上に勉勵して、以て能く社會的立場を作る如き、此等は皆公憤に屬するもので男らしい面白い不平だ。天の配劑其妙を得ず、媼の待遇其當を得ざるに憤激し、吾家を飛出し、青樓に上つて、酒と女で其不平を忘れむとする如き、又夕食の膳部がお粗末だといつて、膳を投げたり、茶碗を破壊する如き、或は自分のズボラを棚に上げ他人の賃金の多きに反感を抱き不平を起す如き、又は主人の亂倫に不平を起し、妻君が役者狂をする如き、又妻君の亂行に主人が自暴自棄となり、藝者買をなすが如き、或は世人に冷笑嘲罵されて不平のやり所なく、自宅へ歸つて、媼の頭や窓硝子を叩きわるが如きは、皆私憤に屬するものだ。それよりも怒るなら、ドツトはり込んで天地の怒りを發したら何うだ。汝のやうにホイト坊主が貰ひ酒をこぼしたやうに、あはれつばい聲を出して涙交りにボヤいてをるやうなことでもどうならうかい。卑屈極まる行動だ。それだからおれ達は時勢を見るの明があるから、ここ暫くは隱忍してゐるのだ。何れ日出島から救世主が降臨になれば、上下運否のなき様枘かけ引ならして、おれ達迄も安心さして下さるのだからなア」

「實際そんな事があるだらうか。おれ達はキリストの再臨を、聖書に仍つて先祖代々から待ちあぐみ、到頭此聖地で年をよらして了つたのだが、これ丈の不公平の世の中を神様がなぜ公憤を起して、早く平等な愛の世界にして下さらぬのだらう……と私かに公憤をもらして居つたのだ」

トクク「アハ、ハ、ハ、」

ツーロ「私かの公憤が聞いて呆れるワイ。併し乍ら天道様の不平といふのは、暴風を起し、豪雨を降らして大洪水とし、地の不平は地震を起して、山川草木を轉覆させ、悪人を亡ぼし、大掃除をなさるのが、天地の公憤だ、汝の公憤とは大分違うだろ。窓硝子の一枚位壊いでみた所で、餘り世界の改造も出来ぬぢやないか」

テク「一體此シオン大學とか云ふのは何をするのだらうな。又してもユダヤ人が頭をもちやげて、おれ達を壓迫する機關であるまいか。それだとすれば、世界人類の爲におれ達は節義を重んじ、假令半日でも人足に使はれる譯には行かぬだないか、鷹は飢ても穂をつまぬといふからなア」

ツーロ「世界の所在哲學者を集めて神政成就の基礎を固めるのだ。此シオンの國

は太陽の天に沖した眞下に當る靈國だから、云はば時計の龍頭のやうなものだ。
茲に於て世界を支配するのは最も天地の經綸上適當の場所だから、さう心配する
には及ばないよ、おれ達だつて、やつぱり其恩恵に浴する時が来るのだから、辛
抱せい、回々教だとか基督教だとか猶太教だとか、自分の心の中に障壁を設けて
ひがむから妙な不平が起るのだ。誠の神様は唯一柱よりないのだ。人間を相手に
する必要はない。何事も皆神様の御經綸だからなア」
テク「それでも餘りユダヤ人がイバリちらすだないか。それが俺は氣にくはない
のだ。チツタ不平も起らうかい」
ツ「口」ユダヤ人にも種々あつて、ポンポンぬかす奴ア、カスピンのコンマ以下
の代物だよ。丁度おれ達と同じ様な境遇にゐる劣等人種が威張るのだ。あんな者
を數に入れて不平をもらすやうな馬鹿があるかい。キリスト再臨の近付いた今日、
そんな偏狭な心はスツカリ放擲して天空海闊日月と心を齊しうする襟度にならぬ
か。アラブの爲にいい面汚しだぞ。所は世界の中心地、エルサレムの橄欖山上に
身をおき乍ら不平を云ふ奴がどこにあるかい。のうトンク」

トンク「ウン、そらさうだ。人は何事も思ひ様が肝腎だ。おれ達のやうな労働者は労働者らしくして居つたらいいのだ、紳士の眞似をせうたつて、到底出来ないからな、あの紳士だつて、元は俺達と同様労働者だつたのだ、精神的労働をやるか、肉體的労働をやるか丈の違ひだ。假令アラブでも紳士紳商となればユダヤ人を頭で使ふことが出来るからなア」

テク「俺は紳士なんか大嫌ひだ。本物の紳士は今日の世の中には一人もない。皆我利々々紳士ばかりだよ。虚偽的生活に甘んじて紳士なんて云つてる奴の面を見るとなぐり度くなつてくるワ、先づ今日紳士といふ奴は第一、美装をなすこと、第二、大建造物に住居すること、第三、一箇所以上の別荘を有すること、第四、妾宅を設くる事、第五、物見遊山のしげきこと、第六、一切の労働を禁じ、茶一つ自分の手より汲まぬこと、第七、一日に何回となく宴會に列して、妖婦を枕頭に侍らし、妖婦の膝を枕に痛飲馬食して、其胃袋に差支へなき程度のものたること……此位のものだ。どこに紳士の本領があるかい」

ツーク「そりや汝の云ふ紳士と、俺の云ふ紳士とは大に趣が違ふ。俺の云ふ紳士

は……第一、人格の最も高きこと、第二、慈悲心に富めること、第三、禮儀を守ること、第四、政治欲を斷ち社會の爲に私財を擲つて貢獻すること、第五、一夫一婦の制を遵奉すること、第六、澤山な住宅を有ち無料にて他人に自由に使用せしむること、第七、神を信じ、家内睦じく感謝の生活を送ること……マアこんなものだ。これを稱して紳士といふのだ」

トンク「そんな紳士が今日の世の中に一人でも半分でもあるだらうかな」

ツロ「ないから尊いのだ。ダイヤモンドだつて金だつて、ヨルダン河の砂礫のやうにそこらにごろついてあつてみよ、誰だつて貴重品扱ひはしてくれないよ。

無いから尊いよ、太陽だつて一つだから皆が拜むのだよ。あの星みい、誰も一つホシイといふ奴がないだないか」

テク「オイ、ツロ、ソナ ツロくせぬことをいふない。それよりも現代の紳士を標準として考へるのが適確だ、其紳士といふ奴を、俺達が労働總同盟でも起して、警告を與へ改良さしてやるのだなア。今日の紳士の資格を考へてみると、妾宅の數如何に仍つて、紳士仲間の等級に差別を生じ、宴會の度數と妖婦相識の

數如何は人氣に大なる關係を及ぼすのだ。これが今日の所謂紳士規定だ。何と不道理な見解でないか。今日の彼等が健康状態は日夜刻々に害されつつあるのだ。殊に性欲の隨時隨所で見たさるその半面を考へて見よ。幾多の忌はしい病毒の爲に睾丸内に發生する精蟲は追々と滅殺され、子孫は漸次減少するに至るの種を蒔いてゐるのだ。彼奴等の亂淫亂行は益々民力を滅殺せしむるのみならず、家庭の妻女は其反動で、狂氣的に異性の男子を求め、性欲の満足と反感の慰安に家を外にして飛出し、役者部屋へ這ひ込むのだ。紳士の家庭の妻女といふものに婦徳や貞節は藥にしたくも無い位だ。そして冷い深窓に、男も女も呻吟してゐるのだ。體質の貧弱なる彼奴等の子孫は世の中に立つて何事もなすの力なく、遂には子孫が滅亡するより途は無い。だと云つて之も自業自得だから仕方があるまい。今の内に彼奴等が目をさまし、共同の友や同族の友と共に働くの妙味を見出し、貧民と共に今迄の態度を改めて社會に活動する様にならなくちや、彼奴等も最早世の終りだ。いつ迄も世は持切りにはさせぬと、どこやらの神さまが仰有つたからな

ア
』

トンク「オイ、俺達はまだ時間が来てゐないのに、此木の小蔭でさぼつてゐるのだから、ユダヤ人と同じよに月給をくれなさいといつて不平を云ふ譯に行かない。ユダヤ人は勤勉だから、仕事の能率が倍以上になるのだから、汝たちのやうに俸給の額のみで不平を云つたつて駄目だ。サア、チツト働かう。土木監督に見付たら大變だぞ」

テク「エ、仕方がないなア、食はぬが悲しさかい」

とスコツプを手提げ乍ら、作事場の方へ厭相に進んで行く。日は漸く暮れ果て、労働終結のラツパが橄欖山の峰に轟いて来た。三人はスコツプをかたげた儘逸早く團子石のゴロゴロした坂路を嬉しさに下つて行く。

數多の大工や手傳人足は、單縦陣を張つて黒蟻のやうに各家路を指して歸り行く。此等の連中は皆エルサレムの街に寄宿してゐるユダヤ人が大多數を占めてゐた。そこへ金剛杖をついて上つて来る一人の男があつた。これは日出島から遙々聖地へ、キリスト再臨の先驅としてやつて来た、ルートバハの宣傳使ブラバサであつた。ブラバサは山上の最も見はらしよき地點に停立し、居柄輝く八日

の月つきを眺ながめ、

仰あふぎ見みれば、月つきは眞空まそらを稍過ややすぎて

あたり輝かがやく星ほしのかずかず

たまさかの月つきの夜よなればこもりゐの

たへ難がたくして登のぼり來きたりぬ」

かく歌うたひて、月つきの光ひかりにエルサレムの街まちを見みおろし乍ながら懷郷くわいきやうの念ねんに驅かられてゐる。
そこへ慌あわただしく上のぼり來きたる一ひとつの影かげがある。果はたして何人なにびとならむか。

（大正一二・七・一二 舊五・二九 松村眞澄録）

第一二章 誘惑いうわく（一六四一）

ブラバ―サは蒼空の月を眺め乍ら只一人シヨンボリと立つてゐる。そこへスタヤつて来た女は、一ヶ月以前から眞心をこめて聖地の案内をしてくれたマリヤであつた。

「聖師様、あなたお一人で御座りますか。妾は又サロメ様と御一緒かと思つてゐました」

「あゝ貴女はマリヤ様で御座りましたか。貴女もお一人で夜分によくお出になりましたな」

「ハイ、あなたのお後を慕つて御迷惑とは存じ乍らコロニーをソツと脱け出して参りましたのですよ。折角サロメ様とシツポリ話さうと思つて御座る所へ、エライ邪魔者が参りまして、お氣を揉ませます。月に村雲、花に嵐とやら、世の中は思ふ様に行かないもので御座いますよ。ホ、ホ、ホ、」

「これは又、妙なお言葉を承はります。サロメ様も時々當山へお参りになり、私も二三回此山上で偶然お目にかかりましたが、別にサロメ様と内密で話さねばならぬやうな譯もありませぬから、何卒氣をもみて下さいませぬ。私は貴女の御親

切な態度に満心の感謝を捧げて居ります」

「聖師は嘘を仰有らぬもの、其お言葉に間違なくば妾も安心致しました。時に一つお願ひし度い事が御座いますが、聞いて貰ふ譯には行きませぬか。此間差上げました手紙はお讀下さつたでせうな」

「成る程二三日以前にアラブが貴女からの手紙だと云つてカトリックの僧院迄届けて呉れましたが、その儘、まだ開封もせず懐に持つて居ります」

「貴方は私の眞心がお分りにならぬのでせう。いやお嫌ひ遊ばすのでせう。海洋萬里を越えて遙々聖地にお越し遊ばし、清きお身體に黴菌が附着した様に思召して、穢い女の手紙なんか、讀まないと言ふ御精神でせう。それならそれで宜しい、妾は一つ考へねばなりませんから、讀んで貰はない手紙なら、貴方に差上げても無駄ですから返して下さい」

「マリヤさまさう立腹して貰つちや困りますよ。別にそんな考へがあつたのぢやありません。あまり聖地の研究に没頭してゐましたので遂失念して居つたのです」

「妾の手紙を忘れられる位なら妾等は念頭に無いのでせうな、ア、悔しい！」

「マリヤさま、どうして貴女を忘れませう。エルサレムの停車場へ着くと匆匆、あの街道で貴女にお目にかかり、見知らぬ異郷の空で思はぬ貴女とお會ひした、あの時の印象は一生私は忘れませぬ。どうぞ悪くは思つて下さいませぬな」

「貴方は聖地巡覽の折、どこ迄も妾を愛すると仰有つたぢやありませんか。妾はその温かいお言葉が骨身に浸み渡り、もはや今日となつては戀の曲物に捕はれ、どうする事も出来ませぬ。妾の命は貴方の掌中に握られたも同様に御座ります。何卒その手紙を月影に照らし一度讀んで下さいませ。そしてキツパリと御返事を承はり度いもので御座ります」

「左様ならば折角の御思召、お言葉に従ふか、従はぬかは後の問題として、兎も角もここで拜見しませう」

と懐より信書を取り出し、封押し切つて、胸轟かせ乍ら讀み初めた………

一、吾最も敬愛するルートバハーの聖師ブラバーサ様に一書を差上げ、切なる妾が心の文を告白致します。聖師様、あなたは全世界の人類や凡てのものの爲に朝な夕なにお苦しみ遊ばすのは實に尊く感謝に堪へませぬ。そこへ又妾のやうな大

罪人がお近づきになりまして益々お苦しみを増なされる事を深く謝罪致します。妾は初めてお目にかかつてより云ふに云はれぬ愛の情動にからまれ、日夜苦悶を續けて居ります。此苦しみを免れむと朝夕神様に祈り、大勇猛心を發揮し自ら心を警め、幾度か鞭をうつてもうつても粉にして砕いても、此猛烈な情熱の煩惱火は弱い女の意志では消す事が出来ませぬ。妾は煩悶苦惱の淵に沈み、心の鬼に責られて居ります。あゝ此妾の靈肉共に救うて下さるものは誰人で御座りませうか。聖師様の尊い温かい愛より外には何物もありませぬ。妾はどこ迄も聖師様の愛情の籠もつた、寛かな御懷に抱かれ度いので御座ります。身も魂も全部を捧げ奉つて、さうして暫く無意識状態になつて眠つて見たう御座ります。聖師様は、はしたない賤しき女と思召さるるでせうが、貴方に抱かるるのは妾の生命を生かし、妾をして間もなく、美しい芽を吹き大活動をさして下さる準備となるのではありますまいか。妾の靈も體も戀の焰の爲に疲れきつて居ります。もはや玉の緒の火の消えむばかりになりました。大慈大悲の神の教を傳ふる聖師様、妾と云ふものを、どうか、も一度甦らせて下さいませ。あまり人の來ない閑寂な處で、シンミ

りと聖師様の温かい愛の御手に抱きしめて復活せしめて下さいませ。萬一それがために假令幾萬の敵を受けるとも、幾萬人の罵詈訾嘲笑を受くるとも決して恐るるものではありませんせぬ。之も神様の何か一つの御旨だと信じます。そして妾を生かして働かshめて下さる事は聖師様が天下に活躍して下さる事になるのではありますまいか。聖師様の苦みは妾の苦みであると共に妾の苦みは聖師様の苦みであるに相違ありませんせぬ。可憐なる女の一人を生かさうと殺さうと、お心一つにあるので御座りますから。又妾の死は師の君の死でなくてはなりませんせぬ。エルサレムの停車場で海洋萬里を隔てた男女がお目にかかったのは實に不可思議な何者かが兩人の間に結びついて、どうしても一體とならねばならぬやうな、前世からの約束だと信じます。妾は貴方と妾と息を合せて神業に奉仕する事を以て、全く神様の御經綸だと固く信じて居ります。彌勒の神政建設の爲ならば神様の御旨とある以上、如何なる事にも従ひまつらねばなりませんまい。妾が師の君を戀愛する事は決して決して罪惡だとは考へられませぬ。何卒絶対の愛を以て妾を愛して下さいませ。決して永久の愛を要求するのでは御座りませぬ。もはや妾の靈肉ともに一

變すべき時機が近づいたのです。假令一分間でも貴方の温かき懐に抱かれさへすれば善いので御座ります。妾は身命を神國成就のために師の君様へ差上げて居るので御座ります。何卒色よい返事を至急に願ひ度いもので御座ります。

あゝ惟神靈幸倍坐世　　マリヤより

師の君様へ

ブラバ―サは一巡讀み了はり、ハツと吐息をつき無言のまま雙手を組んで俯向いて居る。

師の君様、可憐な妾の心、妾の願をキツと聞いて下さるでせうな」

貴方の眞心はよく諒解致しました。併し乍ら一夫一婦の制度のやかましいルー

トバハ―の教を奉ずる宣傳使として、何程貴女が熱烈に愛して下さらうとも戀愛

關係を結ぶ譯には参りませぬ、どうぞこればかりは見直し宣直し下さいませ」

さう仰有いますと、貴方は妾を見殺しにせうと仰有るのですか。一夫一婦の制度も亦人倫の大本もよく存じて居ります。併し乍ら、それは理性的の見解で御座りまして、愛の情動はそんな規則張つたものぢや御座りませぬ。戀にやつれ息も

たえだえになつて居る此女をして悶死せしめ玉ふので御座りますか。貴方に會ひ
さへしなければ妾はこんな煩悶苦惱は起らないので御座ります。貴方は妾を日出
島から亡ぼしにお越しなされた悪魔だと思ひますわ。神様は吾々に戀愛と云ふ貴
重なものを與へて下さつたのです。もし此戀愛を自由に働かす事が出来なければ、
日夜神に仕へる妾にどうしてこんな考へを起さしめられたでせうか。そんな事仰
有らず一滴同情の涙あらば、妾の願を叶へさして下さいませ。決して亂倫亂行の
罪にもなりませんまい。貴方の奥さまにして頂きたいとは申しませぬ。今ここで貴
方に素氣なく刎ねられたが最後、妾はガリラヤの海を最後の場所と致します。さ
すれば貴方の名譽でもありませんまい。それ故妾の死は貴方の死ではあるまいかと
此手紙に記したので御座ります」

ブラバースは雙手を組み吐息をつき乍ら、

「あゝ、誘惑の魔の手はどこ迄も廻つてあるものだな。岩石に等しき固き男の心
も僅か女一人の心に打碎かれむとするのか。寸善尺魔の世の中とはよく云つたも
のだ。あゝどうしたら、宜からうかな」

と小聲に呟き乍ら深き思ひに沈む。マリヤは飛鳥の如くブラバーサに背後より喰ひつき満身の力をこめて抱きしめた。ブラバーサは驚き乍ら心の中に思ふやう、
「あゝ仕方がない、此通り猛烈な戀におちた女を素氣なく振り放せばキツと過ちがあるだらう。天則違反か知らねども暫く彼女の云ふ通り任せおき、徐に道理を説き目を覺ましてやらねばなるまい」
と心に頷づき乍ら言葉を改めて、

「いや、マリヤ様、よくそこ迄思つて下さいます。實に感謝に堪へませぬ。併し乍ら私はここに参りましたから、一ヶ月に足りませぬ。私はあと七十日の間身體を清潔にして或使命は果さねばなりませんから百日の行を済ます迄、何卒御猶豫を願ひます」

「ソナナ氣休めを云つて妾をお騙しなさるのぢやありませんか。その場逃れの言ひ譯とより思へませぬ。どうか的確なお言葉を賜はりたいもので御座ります」
ブラバーサは吐息をつき乍ら永い沈黙に陥つた。マリヤも暫く無言の儘打慄ふてゐたが、思ひきつたやうに口を開いてブラバーサの手を固く握り、

「妾は貴方に初めてお目にかかつてから今日で殆ど一ヶ月、どうしたもののかセリ
バシー生活をやつて来た身であり乍ら、その時から戀におち、此一月の間も殆ど
千年のやうに長きを感じました。妾のあまり永い沈黙の戀は妾の頭腦を腐らし破
つて了ひました。そして妾は今戀の煩悶苦惱を味はつてゐます。私は之を何時迄
も祕密として葬り去る事が出来ないのです。何卒一人の女を救ふと思つて妾の戀
を諒解して下さい。此猛烈な戀愛を笑ふなら笑つて下さい。又諍るなら諍つて下
さい。もはや妾は戀に悩む狂人です。妾の目に浮かぶものは山川草木一切が戀し
い師の君のお姿になつて見えるのですもの、狂つてるのかも知れませぬ。あゝ苦
目にかかつてから妾はスツカリ戀の捕虜となつて了ひました。妾は神様から與へ
られた戀だと思つて居ります。戀を與へられた時は思ひきり戀を味はひつつ生る
もので御座いませう。妾が師の君を戀ふる事は決して不合理でも不道德でも御座
いますまい。神様の御旨だと信ぜられてなりませぬ。嚴肅な神聖な戀が變つて博
愛となつた時は、尊さと偉大さと美しさとを知る事が出来ませう。ルートバハ―

の御教みをしへの人類愛じんるのあいは斯様かやうな意味いみを云いふのではありますまいか。人類愛じんるのあいそのものを愛あいするの愛あい、それは神様かみさまの愛あいで、即ち自分じぶんを見出みいだす爲ための愛あいであり、自分自身じぶんじしんを建けん設せつすべき天國てんこくに昇のぼるべき愛あいの初めはじめであり終りをはでありませう。師しの君きみが妾わたしを理り解かいして下くださらぬ事ことは實じつに絶大ぜつだいなる悲かなしみで御座ございます。妾わたしもアメリカーナに籍せきをおき、救世主きうせいしゅの再臨さいりんを待まち、全世界救済ぜんせかいきうさいの使命しめいを持もち乍ながら、どうして戯たはむれの戀こひに浮うかれて居をれませうか。妾わたしは師しの君きみの手てによつて新あらたに生うまれなくてはならないのです。靈肉れいにくともに復活ふくくわつせねばならぬのです。師しの君きみと愛あいし愛あいされ、貴方あなたと結むすぶ事ことによつて新あらたに力ちからを與あたへらるので御座ござります。もし此妾このわたしの戀愛れんあいが不ふ合理がふりだと仰おつしやるのならば貴方あなたの神力しんりきで取去とりさつて下くださいませ。とは云いふものの一度いちど戀こひひ慕したふた師しの君きみの温あたたかい御顔おんかんばせとそのやさしいお言葉ことばは妾わたしの全身ぜんしんに流ながれて血ちとなつて居をります」
「私は嚴肅げんしゆくなる神様かみさまの御命令ごめいれいを頂いたき神聖しんせいにして犯をかすべからざる此聖地このせいちに於おいて戀愛れんあい問題もんだいにぶつかるとは夢ゆめにも思おもひませぬでした。然しかし愛あいの情動じやうどうは何いづれの國くにの人も變かはらないものと見みえますなア。貴女あなたの御親切ごしんせつを決けつして葬はつむり去さるやうな勇氣ゆうきもムいませぬ。然しかし乍ながら怪あやしき關係くわんけいを結むすばなくても心こころと心こころと融とけ合あひさへすれば、それで

戀愛は完全に保たれて行くぢやありませんか。凡て靈主體從の教を奉ずる吾々……然らば靈的の戀仲となりませう。さあ何卒その手を放して下さいませ」

「いえいえ妾はいつ迄も師の君様の愛の御手に晝も夜も抱いて慰めて欲しいので御座います。いつも尊い懷に抱かれ微笑つつ戀を歌つて見たいのです。……あゝ

妾の戀しい慕はしい師の君の御上に幸多かれ……と」

「御親切は有難う御座いますが、何卒百日の行が濟む迄は觸らないで下さい。怪しい考へが起つては修行の邪魔になりますからな」

「貴方の御身邊に厄い事が迫つて來た事がお分りになりますか。妾はそれが心配でならないのです。それ故アメリカンコロニーの牛耳を握る妾と締結して下さいのならば貴方の危難を逃れるのは當然ですよ。ユダヤ人は同化し難い人種ですからな」

「何か私の身の上について危険が迫つて居るのですか。假令如何なる敵が來ても神様にお任せした私、左様な事に驚く事はありませぬから、先づ安心して下さい」
「貴方は、さう樂觀して居られますが、貴方の周圍には澤山の惡魔が取圍んで居

りますよ。今妾は師の君の言葉に従ひ戀愛を思ひきり路傍相逢ふ人の如き態度を採らうと思つても、それが出来ないのです。貴方のお身の上を思へば涙が出てたまりませぬ。それで貴方の側を離れたくはありませぬ」

「マリヤさま、そんな事云つて強迫するのぢやありませんか。随分惡辣な手段を廻らして戀の欲望を遂げむとなさるのではあるまいかと思はれてなりませんわ」

「いえいえどうしてどうして誠の神様の教を信ずるピュリタンの一人として嘘偽りが申されませうか。神様の冥罰が恐ろしう御座います。妾は師の君様の身邊を守るため假令戀せなくても離れ度くはないのです。此エルサレムの町へ貴方がいになつてから、日の出島の聖師々と云つて貴方に歸順する人が澤山出来ましたが、眞に貴方を愛する人が果して幾人ありませんか。凡ての人が師の君に對して力一杯敬して居るやうですが、然し妾は案ぜられてならないのです。また此方へおいでになつてから間もなく、土地人情もお分りになつてゐないのですからな」

「然らば貴女の御意見に任します。どうなつとして下さいませ。然し乍らここ七

十日の間は特に猶豫を願ひ度いので御座います。貴女の要求を容れました上は相對的に私の要求も容れて貰はねばなりません」

「どうも仕方があります。然らば隱忍致します。どうぞ注意をして外の女に相手にならぬやうに願ひます。サロメさまにお會ひになつても言葉を交しになつちやいけませんよ。貴方のお身の上に危険が、そのため襲來してはなりません」

「ハ、ハ、ハ、ハ、最前からマリヤさまが私の身邊に惡魔が狙つてゐる、危険が襲ふてゐると仰有つたのは、分かりました。いや随分抜け目のない……貴女も女ですな、アツハ、ハ、ハ、ハ」

「エツハ、ハ、ハ、何なつと勝手に仰有いました。然し呉々もお氣をつけなさいませや。さあ之から妾と一緒に歸りませう」

「ソナナラ私はお山を一まはりして歸りますから貴女は一足先にお歸り下さい。七十日さへ経てば夜も晝も駱駝のやうに二人連で歩かして頂ませう。アハ、ハ、ハ、ハ」

「お氣に入らないものはお先へ歸りませう。夜が明けるまでお待ちなさいませ。夜鷹でも参りませうから」

と捨臺詞を残し橄欖山を下り行く。

後見送つてブラバーサは吐息をつき乍ら胸を撫で下ろし、

「あゝ困つたものだ。どうして此難關を切り抜けやうか。これも大方神様のお

試しだらう。あゝ惟神靈幸倍坐世、國治立大神様、何卒惡魔の誘惑に陥らぬやう

御守護を願ひ奉ります。心の弱き私に對し絶對力をお授け下さいませ」

と兩手を合せて天地に向かつて拜謝し乍ら橄欖山の頂を隈なく逍遙し初めた。古

ぼけた小さい祠の前に一つの影が蠢いてゐる。月は薄雲の帳を被つて晝ともなく

夜ともなく一種異様の光を地上に投げて居る。

(大正一二・七・一二 舊五・二九 北村隆光録)

ブラバ―サは祠ほらのまへ前の人影ひとかげを見て、

㊦ 御祠みやしろの御前みまへに居ゐます物影ものかげは

いづれの人ひとか聞きかまほしけれ

吾われこそは日ひの出での島しまを立たち出いでて

登のぼり來きませるプロパガンデイストぞや
『

ひとり
一人の男をとこ

㊦ アメリカンコロニー守まもる神司かむづかさ

スバツフォードの翁おきななるぞや

大空おほぞらの月淡雲つきあはくもに包つつまれて

君きみの御姿みすがた見擬みまがひぬるかな
『

「貴方は、スバツフオード様で御座いましたか、これはこれは失禮致しました。御老體として今頃に唯お一人伴をも連れずにお出なさいましたには、何か理由が御座いませうなア」

「いやもう、年はとつても心は矢張元の十八、どこともなしに愛熱に浮かされてコンナ所迄引張られて参りました。アハ、ハ、ハ、ハ、何程大神様の道を遵奉し、女に目をかけまいと思つても心に潜む心猿意馬と云ふ曲者が、五尺の男子を自由自在に翻弄致します。人間と云ふものは本當に意志の弱いものですよ。一擧手三軍を叱咤する勇將も、纖弱き女の一瞥に會つて忽ち骨も肉も碎いて仕舞ふ世の中で御座いますからなア。アハ、ハ、ハ、ハ」

ブラバーサはハツと胸をつき……：最前からのマリヤとの話をもしや此老人に聞かれたのではあるまいか意味ありげの今の言葉、はて恥かしい事だわい、かう老人の方から先鞭をつけられては何も云ふ事が無くなつて了つた。罰は靦面だ、なぜあの時マリヤの脅迫を卻けなかつたのだらう、吾ながら意志の弱いにはあきれた。いやいや決して意志の弱いのではない、心の中の曲者の爲だ。八千哩を隔

てた日の出の島に妻子を残し、一人身の淋しさをつくづくと感じ絶對無限の神様の力を頼る事を忘れて居た爲に、吾心中に悪魔が擡頭してあのやうな弱い一時逃れの偽りを云つたのだ。あゝ濟まない事をした。何と云つてこの翁に答へやうかなア……

と雙手を組んで俯向いて居る。

「アハ、ハ、ハ、ブラバーサ様、假にもルードバハの宣傳使として一時逃れの言葉を用ゆるやうな事はなさいますまいなア、女と云ふものは比較的正直なもので御座いますから、男の言葉を眞面目に信ずるものです。若し男子の言葉に一言たりとも偽りある事を發見した時には、それこそ命がけになるものです。貴方は誰か女と約束を爲さつた事はありませぬか」

「ハイ、エー何で御座います。止むを得ず一寸約束を致しました。本當にお恥かしい事です。貴方は吾々の祕話をすつかりお聞なさつたのですか」

「アハ、ハ、ハ、年は寄つても耳は未だ隠居を致しませぬ、あれだけ大きな聲で、情約や談判をして居られたものですから、手に取るが如く聞えました。一伍一什

承はりましたよ。随分貴方も思はれたものですなあ。アハ、ハ、ハ、

「實に困りましたよ、九寸五分を咽喉もとへつきつけられての談判同様ですから、私としてはあれより應戦の仕方がないので思はぬ事を申しました。決して心から宣傳使の身として女なんか戀着致しませうか」

「さうすると貴方はあのマリヤさまに對し偽りを云つたのですか。實に怪しからぬぢやありませんか。日の出島の人間は嘘つきだ、油斷がならぬと聞いて居りましたが、まさか誠の道を宣傳する貴方に限り塵程も偽りはあるまいと思ひましたが、宣傳使にして斯の如しとすれば日の出島の人間は一人も信用する事が出来ません。左様な所からどうして救世主が現はれませう。あゝ心細い事だなア」

「イエイエ決して決して日の出島だと云つて嘘言者ばかりではありませぬ。私は止むを得ずあの女を助けるため心にもない事を云つたのです。戀に熱しきつた彼の女をたつた一時でも安心させたいと、止むを得ず豫約をしたので御座います」

「ソナ意志の弱い事でどうして神政成就の神業が勤まりませうか。其方も見かけによらない意志の弱い方ですな。吾々ユダヤ人は二千六百年以前に國を滅され

亡國の民となつて世界の人類より土芥の如く卑しめられ漸く二千六百年の辛苦を
經て神様の賜つたパレスチナの地を恢復したので御座います。ユダヤ人には一人
として貴方のやうな意志の弱い人間は御座いませぬよ」
「ヤ、恐れ入りました。さう云はれては一言の辭も御座いませぬ。これから心を
取り直し、誠一つを立て貫てユダヤ人に負ない熱烈さと信仰力を養ひませう」
「貴方は今マリヤさまに仰有つた言葉を反古となさず、實行なさるでせうな。ユ
ダヤ人の女に嘘でも仰有らうものならそれこそ大變ですよ。貴方の御身のため、
道のために老婆心ながら御注意を申し上げて置きます。實際の所は貴方にマリ
ヤさまが遇ふてから後と云ふものは戀に陥ち、朝夕吐息を漏らし見るに見られぬ
憐れさ、どうかして私が仲媒をせうと思ふて一足先へ廻りお二人の談判を伺ふて
居たので御座います。どうか約束を違へないやうにしてやつて貰ひたいものです。
彼の女はほんたうに信仰の強い赤心の女で御座いますから、もし違約でもなさら
うものなら神様を偽つたも同様で御座います。あなたの御身に忽ち禍が報ふて來
るかも知れませぬ。サアどうかキツパリと私に、も一度云つて下さいませ。さす

れば七十日の間マリヤさまに私が申付けて貴方の行の邪魔にならないやうに致しますから」

ブラバーサは退つ引ならぬ翁の言葉に胸を痛め如何はせむと案じ煩つて居る。暫くあつて種々と思案の結果思ひ切つたやうに、

「ハイ、キツと約束を守ります。マリヤさまにも安心なさるやうに云つて下さいませ」

「貴方はさうすると日の出島でも獨身生活をして居られたのでせうな。さうで無ければたとへ女が戀したからつて冗談にも約束を結ぶ道理はありますまい。マリヤが貴方を慕ふやうに、もし貴方に妻女がありとすればその妻女はきつと貴方を慕つて居られるでせう。神の道を傳ふる宣傳使として假にもそんな無慈悲、いや不貞の事はなさいますまいな」

ブラバーサは進退茲に谷まつて返す言葉もなく、一層のこと云ひ譯の爲めガラヤの海へ身を投じ苦痛を免がれむかと思案に暮れて居る。スバツフォードは大聲をあげて打ち笑ひ、

「アハ、ハ、ガリラヤの海へ投身した所で貴方の偽の罪は消えるものではありません。せぬよ。サアどうなさいますか」

「あゝ仕方がない、こんな羽目に陥らうとは夢にも知らず、一時逃れにマリヤさまをたらしめて歸したのが悪かつた。あゝ惟神靈幸倍坐世。國治立大神許したまへ」と涙と共に詫入る。暫くあつて首をあぐれば以前の老人は姿も見えず、月は淡雲の衣の綻びより皎々と古き祠の屋根を照して居る。ブラバーサは訝かりながら祠に拜禮をなし、スタスタと元來し道へ引返し吾身の暗愚を嘆きつつ橄欖山を下り僧院ホテルを指して歸り往く。

因に云ふ。祠の前に現はれた、スバツフォードと見えた老人は國治立大神の化身であつた。

大神はブラバーサの身魂を鍊へむと、化相をもつて現はれ訓誡を垂れたまふたのである。

ゲツセマネの園の壁際迄歸つて來た時に白い淡い被衣を被つて背のすらりと高い、色の飽迄白い一人の美人が急ぎやつて來るのに出遇つた。ブラバーサは立ち

とまり何れの女かと丸い目をむいて眺めて居ると、女はつかつかと遠慮気もなく傍に寄り来たり、無雑作にブラバーサの手を握り二つ三つゆすりながら、

「今日はえらう早う御座いましたねえ。妾は未だ貴方がお山に居られるかと思ふて急いで参りました、マリヤさまはもうお歸りになりましたか」

ブラバーサは其聲を聞いてサロメなる事を知つた。さうしてマリヤの名を呼ばれて今日はいつになく胸を躍らせ頬を紅に染めた。サロメは層一層固く手を握りしめ、

「遠は日の出島の宣傳使、貴方の御名望はエルサレム市中に誰一人知らぬものはありません。妾だつて貴方のやうな人氣のあるお方の傍へ唯一時でも置いて欲しう御座いますわ」

「貴方はサロメ様では御座いませぬか。姫君様のあられない貴族のお姫様の身をもつて何と云ふ冗談を仰有います、どうぞよい加減に擲掬つて置いて下さいませ。随分貴女も悪戯がお上手ですね」

「ホ、ホ、ホ、悪戯のお上手なのは貴方ぢや御座いませぬか。男と云ふものは随

分女を玩具のやうに扱ふものですが、女の戀は眞劍ですよ、一つ違へばお腹が膨れ命がけですからな。女に冗談や戯れはありませぬ。貴方もマリヤさまをどうか末長う可愛がつて上げて下さいませや。もし貴方がマリヤさまに對し約束を破るやうな事をなさいますやうなものなら、ユダヤ人は團結が固う御座いますから、貴方を恨んでどんな事をするか分りませぬよ。御注意なさいませ」

「ハイ有難う御座います。未だ別に堅い約束をしたと云ふのでもなく、ほんの豫備行爲をたつた今やつた所で御座います。マリヤさまだつてどうして吾々のやうなものに戀慕される筈が御座いませう。橄欖山は靈地で御座いますから神様がマリヤさまとなつて私の氣を引かれたのかと思ひます。いやもう結構な所の恐ろしい所で御座いますわ。貴女も是からお一人で橄欖山にお登りなされるので御座いますか、よくまあ御信神が出来ますなあ」

「妾が橄欖山へ女の身で唯一人参りますのも聖師にお目にかかり度いばかりで御座います。貴方がお歸りとあれば妾も一所に登山はやめてお宿迄送らせて頂きませう。氣の多い貴方に滅多に情約締結を迫るやうな事は致しませぬから、安心し

て下さいませ。オホ、、、

「これこれサロメ様、あまり擲擲つて下さいませ。ほんたうに姫様にも似合はず、お意地が悪いでは御座いませぬか」

「それでも貴方、アラブのクリーと手を繋いで歩くより私と手を繋ぐ方が幾分かお心持がよいでせう」

「いやもう結構で御座います。どうか放して下さい、もう澤山です。アイタ、、指が痺れさうで御座いますわ」

「さうでせうともマリヤさまには指の二本や三本は切つてお與へなさつても痛くはありませんまいが、私の手が觸れるとそれだけ御氣分が悪いのでせう。私も女の意地です。滅多にマリヤさまには選挙競争をして負るやうな事は御座いませぬよ。御覺悟なさいませ。ほんとに海洋萬里を渡つて二人の女に戀慕される貴方は天下の幸福者ですよ。オホ、、、」

「そのオホ、、、が氣に入りますぬわい。本當に六尺の男子を、腹の悪い玩具になさいませぬのか、ユダヤ人は油斷がなりませぬア」

「油斷がならぬからユダヤ人と云ふのですよ。ホ、ホ、ホ、」

「ヤア此奴は些怪しいぞ、化州だな。本當のサロメさまがどうしてこんなお轉婆式の事を仰有るものか。大方金毛九尾白面の惡狐が瞞して居るのだらう。今山上で大神様に叱られて來た所だ」

と眉毛に唾をつけて居る。

「もし聖師様、眉毛に唾をつけたりして貴方は妾を侮辱するのですか、狐や狸ではありませぬ。正真正銘のサロメです。餘り見違ひをして下さいますな」

「ヘン、何程甘く化たつて駄目だ。日の出島から選抜されて來るやうな、プロバガンデイストだから其手には乗らないのだ。今に尻尾を現はしてやらう。ド狐奴」と後の一言を雷の如く呶鳴りつけた。サロメは、

「オホ、ホ、ホ、」

とお「ちよぼ」口で笑ひながらクレツと尻を捲つた途端に毛の生えた眞白の狐となり、箒のやうな尾をプリプリと振り乍らのそりのそりと這ひ出した。ブラバサは匆惶として慄ひ乍ら、カトリツクの僧院に立ち歸り、ソファの上に横はり漸

く寝についた。

（大正一二・七・一二 舊五・二九 加藤明子録）

第一四章 荒武事（一六四三）

アメリカンコロニーの奥の一室には、スバツフォードとマリヤが煙草盆を中において、ヒソビソ話に耽つてゐる。

「マリヤさま、あなた此頃は何となしにソハソハしてゐるぢやありませんか。沈着な貴女に似ず、此頃の様子と云つたら、丸で戀に狂ふた野良犬のやうだと、團體員が言つてゐましたよ。ちと心得て貰はないと、コロニーの統一が出来ないだありませぬか。私はかうして老人であるし、何時昇天するか知れませぬ。さうするとあなたが一人でコロニーを背負つて立たねばなりません。噂に聞けが貴女は日出島から來てる聖師に大變戀慕してゐられるさうだが、あの方はお國に妻子が

あるといふことだ。妻子のある方に戀慕したつて、目的は達しませぬよ。今迄何程よい縁があつても、神政成就は夫は持たない、男に目はくれないと、獨身生活を主張した貴女に似合はず、變だと皆の者がヒソビソ話してゐますよ。何程強いことを言ふてもヤハリ女といふ者は弱い者ですな。狐獨の淋しみに堪へられないと見えますワイ。モウ少時の所だから、チツと辛抱をして貰はねばなりません。キツと貴女のお氣に入る適當な夫が現はれて來るでせう。神様は最後迄忍ぶ者は救はるべし……と仰有るだありませぬか」

「ハイ、妾は最後迄忍んで來たのですよ。モウ此上忍ぶ事は生命に關しますもの……そんなこと仰有るのは、チト殘酷ですワ。妾は神様の御攝理によつて夫を定めましたから、どうぞ御承諾を願ひたう御座います」

「さうすると、人の噂といふものはバカにならぬものだなア。そして其夫といふのはどこの何と云ふ方だなア、ヨモヤ、妻子のある日出島の聖師ではあるまいなア」

「あの……妾は……聖師……否々生死を共にせうと約したお方が御座います。併

し乍らネームを告げる丈は少時猶豫を願ひたう御座います」

「心機一轉も甚だしいぢやありませんか。お前さまはブラバーサ様に戀してゐるのだらう。何と云つても其顔に現はれてゐる、年寄の目で睨んだら、メツタに間違ひはありますまい。左様なことをなさつては、アメリカンコロニーも破滅に陥らねばなるまい。あゝ何とした悪魔が魅入れたものだらうなア」

「ソリヤ何を仰有います。女が夫をもてないと云ふ道理が何處に御座いませう。妾も最早三十、いい加減に夫を有たなくちや御子生みの御神業が勤まらぬぢやありませんか、グツグツしてゐると、歳月は妾をすてて省みず、年がよつてから、何程夫をあさつてみた所で、乞食だつて来てくれは致しませぬワ。花も半開の中が値打があるのです。妾の花は最早満開、一つ風が吹いても散らうとしてゐる所です。散らない中に夫を持たなくちや人生の本分を、何うして盡すことが出来ませう」

「モウ永いことぢやない。やがてキリストの再臨があるのだから、そこ迄待つても餘りおそくはあらうまい。あのサロメさまを御覽なさい。貴族の家に生れ、ど

んな夫と添はうとママな身を持ち乍ら、キリストの再臨を待ちかね、獨身生活を つづけてゐられるだありませぬか」

「あの方は再臨のキリストを理想の夫として空想を畫いてをるのですから、別物ですよ。妾は左様な野心は御座いませぬから、相當の夫を有たうと思ふので御座います。そんな開けないことを言はずに、コロニーの連中に、あなたから一口、神界の都合に依つて、斯う斯うだと發表して下さいませ。さうすれば、團體員は佛が法とも小言を云ふ者は御座いますまい」

「コレ、マリヤさま、お前さまも天の選民たるユダヤ人の女でないか。なぜ今となつて、モウ一息といふ所の辛抱が出来ないのでですか」

「ハイ、之から七十日が間辛抱致します。七十日経ちさへすれば、假令貴師が何と仰有らうとも、大神様がお姿を現はしてお叱り遊ばさう共、最早私の意志の自由に致す考へで御座います。どうぞ廣き心に見直して御承諾を願ひたいもので御座いますワ」

「七十日？ ソレヤ又何うしてさう云ふ日限を切つたのだなア、人の噂も七十五

譯には行きませぬからねえ」

「アハ、、、、こなひだから餘り陽氣が悪うて、空氣の流通が悪く、蒸すので、年老の私も頭がポカポカとして來た。大方お前は精神に異状を來して居るのだあるまいかな。さうで無ければ鬼の靈にでも憑依されたのだらう。此頃ゲツセマネの園の近邊に悪い狐がウロつくといふことだが、其奴の靈にでも憑依されたのであるまいかな。これマリヤさまチツと用心なさいよ。キツと狐の靈ですよ。コンコンさまにつままれたのですよ」

「ホ、、、、、信心堅固な妾、何うしてさやうな者につままれませうか。ケツでもコンでも構ひませぬ、妾はケツコンさへすれば可いのですもの、ホ、、、、」

「ア、、、何となく怪體な風が吹いて來たぞ。あゝ一つ窓でも開けて氣を晴らさうかな」

「ホ、、、、、あのスバツフオードさまの仰有ることワイノ。窓を開けたつて、ついてゐない狐はメツタに飛出す氣遣はありませぬよ」

「丸で春情期の犬の様だなア」

と小聲に呟く。マリヤはスバツフォードに向ひ、

「モシ老師様、妾は之から聖地の巡拜に行つて参ります。どうぞお留守を願ひますよ。前以て申しておきますが、妾も女です。七十日の閒メツタにブラバーサ様のホテルを訪ねるやうなことは致しませぬから、御安心下さいませ」

と豫防線を張り早くも門口に飛出した。

橄欖山の中腹、橄欖樹の下に腰打ちかけて雑談に耽つてゐる三人のアラブがあつた。各手にスコップを持ち乍ら、木の株に腰打ちかけ、

テク「オイ、此頃、アメリカンコロニーのマリヤといふ女、チツと様子が變だないか、目も何も釣上つてゐるやうだなア」

ツ「口」彼奴ア有名な獨身生活の女だが、ヤツパリ性欲は押へ切れないとみえて、橄欖山へ参拜を標榜し、男をあさつてゐるのかも知れないよ。何うだ一つ彼奴を甘く抱き込んで、俺達の者にしたら面白からうぞ。アラブアラブとユダヤの奴に輕蔑されてゐるのだから、ユダヤ人のカンカンを甘くおとさうものなら、それこそアラブ全體の面目を輝かすといふものだ。やがて来る時分だから、何とか一つ

工夫をせうだないか」

トク「ソリヤ面白からう、併し乍ら三人の男に一人の女、此奴ア紛擾の種をまくやうなものだから、先づ此計畫は中止した方が安全かも知れないよ。ラマ教ならば多夫一妻でよからうが、吾々はそんなことしたら天則違反で神様から罰せられるからなア」

テク「さう心配するな、俺達のやうな色の黒い、唇の厚い醜男人種が、何程あせつたつて、一瞥も投げてくれないのは當然だ。先づ相手にならぬ方が安全かも知れないよ」

ツ「口」氣の弱いことを云ふな、斷じて行へば鬼神も之をさく。躊躇逡巡するは男子の執らざる所だ。今にもやつて来よつたら、大勇猛心を發揮して獅子奮迅の活動をやるのだ。一人は足をさらへ、一人は猿轡をはませ、一人はかついでキドロンの谷底へでもつれて行き、厭應云はせず此方のものにするのだ」

テク「オイ、汝は酒の氣のある時ばかり、そんな強いことを言ひやがるが、酔のさめた時何うだい、其元氣をどこ迄も持續することが出来れば、おれだつて汝と

同盟どうめいして決行けっかうせないことはないが、何分なにぶん弱味よわみ嘈そだから、先さきが案あんじられて、する氣きにもなれないワ。のうトンク、さうでないか

トンク「ナア二成敗せいはいは時の運うんだ。一つ肝玉きもたまをおつぽり出して決行けっかうと出でかけやう。

ゴテゴテいつたらこの聖地せいちを立去たちさり、アラビヤの本國ほんこくへ歸かへれば可いいだないか。聖せい地に居をらなくても救すくはれる者は救すくはれるのだからなア、俺達おれたちがマリヤを何々なになにせう

といふのは決けつして肉欲にくよくの爲ためだない。大おほいにアラブの氣前きまへを見みせる爲ためだ。言いはば四千

萬まんのアラブ人を代表だいへうしてのアラブ仕事しごとだから、大たいしたものだぞ。親讓おやゆづりのハンド

ルが利きかぬとこ迄までこき使つかはれて、僅わずかに半弗はんドルより貰もらはれぬのだからバカげて仕方しかたが

ないワ。婦人國有ふじんこくいうの議論ぎろんさへ、獨逸ドイツでは起おこつたでないか。何なに、かまふものかい、

三人同盟さんにんどうめいでマリヤを國有こくいうにせうぢやないか、サア斯かうきまつた以上いじやうは、速すみやかに決行けっかう

と出でかけやう

テク「どこへ出でかけやうと云いふのだい。コロニーには百人ひやくにんばかりの團體だんたいがあるだ

ないか

トンク「そんな所ところへ行ゆかなくても、キツと此處ここへやつて來くるのだ

と云つてゐる。そこへソソナこととは夢にも知らぬマリヤは細い杖を力に、九十折の坂をソロソロと登つて来た。三人は互に目くばせし、物をも言はず、マリヤの體に喰ひつき、擔ぎ出した。マリヤは悲鳴を上げて、「人殺し人殺し」と叫ぶ。斯かる折しもあたりの木魂を響かして宣傳歌の聲聞え來たりぬ。

☐ 神が表に現はれて

善と惡とを立分ける

時世時節は近づきぬ

オレゴン星座を立はなれ

ウヅの聖地に雲に乗り

降らせ玉ふキリストの

御聲は近く聞えけり

日出の島に日の神の

現はれまして中天に

光り輝き進むごと

暗夜も漸く開け近く

夜の守護は忽ちに

光明世界と進み行く

あゝ惟神々々

神は吾等と共にあり

自轉倒島を立出でて

萬里の波濤を打渡り

音に名高きエルサレム

神かみの定さだめし聖場せいぢやうに

下くだり來きたりし吾われこそは

救すくひの神かみの先走さきばしり

名なさへ目め出で度たきブラバ―サ

いかなる神かみの經綸けいりんか

ユダヤの女をんなに戀慕れんぼされ

進退しんたい維こに谷きはまりて

首くびもまはらぬ破目はめとなり

朝あさな夕ゆふなに橄欖かんらんの

山やまに詣まうでて禍わざはひを

除のぞかむ爲ために登のぼり行ゆく

國くにはるたちのおほみかみ
國治立大御神

神素盞鳴大御神

何卒なにとぞ吾身わがみの災わざはひを

嚴いつと瑞みつとの御光みひかりに

救すくはせ玉たまへ惟神かむながら

神かみの御前みまへに願ねぎまつる

朝日あさひは照てる共曇ともくもるとも

月つきは盈みつとも虧かくる共とも

假令たとへ大地だいちは沈しづむとも

神かみに任まかせし此體このからだ

假令たとへ野のの末山すゑやまの奥おく

屍かばねをさらす苦くるみも

何なにか厭いとはむ道みちの爲ため

國くにに残のこせし妻つまや子こは

いかに此世このよを送おくるらむ

聖地せいぢにいます師しの君きみの

あらはれませる日ひは何時いつぞ

神かみの集あつまるエルサレム 聖きよき都みやこと聞きき乍ながら

何なんとはなしに村肝むらぎもの 心こころ淋なびしくなりけり

思おもへば思おもへば人ひとの身みの 果は敢かなき弱よわき有あり様さまを

今いま目のあたり悟さとりけり 恵めぐませ玉たまへ三五あななひの

皇すめ大神おほかみの御前おんまへに 畏かしこみ畏かしこみ願ねぎまつる

此この聲こゑに驚おどろいて三人さんにんはマリヤを其場そのばに投なげ棄すて、雲くもを霞かすみと逃にげ去さりにけり。

マリヤは餘あまりの驚おどろきと大地だいちに投なげられたはずみに氣絶きぜつして了しまひ、坂路さかみちに大だいの字じ

となつてふん伸のびてゐる。ブラバ―サは魔法瓶まほふびんから清水せいすゐを出だし、倒たふれたる女をんなの顔かほ

に注そそぎかけた。よくよく見みれば自分じぶんを戀こひ慕したふてゐるマリヤであつた。ブラバ―

サはマリヤの氣きのついたのを幸さいはひ、顔かほをかくして一生いつしやうけんめい懸命けんめいにかけ出いだす。マリヤは

後姿うしろすがたを見て、それと悟さとつたか、苦痛くつうを忘わすれ、尻端折しりはしをつて夜叉やしやの如ごとく後あとを追おつか

進すすみ行く。ブラバ―サは林はやしの繁しげみに身みをかくしマリヤの通とほり過すぎたあとで、ホツ

と息いきをつぎ、兩手りやうてを合あはせ、

「あゝ惟神靈幸倍坐世」

(大正一二・七・一二 舊五・二九 松村眞澄録)

第一五章 大相撲(一六四四)

カトリックの僧院ホテルに滞在してゐるブラバーサの居間を訪ねて来た一人の老紳士があつた。之はハイ教の宣傳使バハーウラーである。ボーイの案内につれてブラバーサの居間に通じ、

「御免なさいませ」

と言ひ乍ら、軽く一禮を施した。ブラバーサは手づから椅子をとりよせて、

「やあ、貴方は汽車中でお目にかかつたバハーウラー様で御座いましたか。一度お訪ねしたいと存じて居りましたが、何分處慣れないものですから彼方此方と見學して居りました。よう御訪ね下さいました」

と挨拶すればバハ・ウラーはテーブルを中におき、両方から向ひ合ひとなり、

「ハイ、私も一度お訪ねしたいと思つてみました。何だか彼是ととり紛れ漸く今日となりました。どうです聖地においでになつてからの貴方の御感想は？」

「ハイ、見るもの、聞くものが日の出島と違つて居りますので面喰ひましたよ。漸く地理も分り空氣にも慣れましたと見え、少し計り落付いて参りました」

「成程、私も同感ですよ。常世の國から此處までやつて來ましたが、いやもう見るもの聞くもの變つた事ばかり、かやうな處へ救世主がお降りにかかるかと思へば何だか奇異の感にうたれます。國に居ります時は聖地エルサレムエルサレムと云つて日夜憧憬して居ましたが、古く荒びた神都の跡、何れも涙の種ならぬはありませぬ。黄金の花が咲き匂ふてゐると思つた私の期待はスツカリ裏切られて了ひましたよ。アハ、ハ、ハ、ハ、」

「都會は人が作り、田舎は神が作るとか申しまして、かやうな田舎びた處でないと到底神様はお降りになりません。紅塵萬丈の巷に、靈肉ともに穢してゐる人の集まつてる處へは救世主はお降りになる筈はありません」

成程、さう承はればさうかも知れませぬな。數年以前、バルカン半島に現はれた一朶の黒煙は燎原を焼く勢ひで全歐羅巴に蔓延し全世界の地をして戦雲に包んで了ひましたが、爲に其後の人心は益々悪化し、二進も三進も行かなくなつて來たぢやありませんか。かやうな處へ救世主が御降臨になつた處で足一つ踏み込まれる處はありますまいな。一人でも多く心を研き魂を研いて神心となつて救世主の降臨を待たねばなりません。實に常暗の世の中となつたもので御座いますわい」

「ルートバハの教祖ヨハネの教にも三千世界の大戰ひが初まるぞよと三十年以前から仰せられましたが、到頭世界の大戰爭が起りました。さうしてヨハネの教祖は先達の世界戰爭の開戦期間の日數一千五百六十七日を終り平和條約が締結された其朝、即ち自轉倒島で云へば大正七年（舊）十月三日の朝昇天されました。その後と云ふものは實に世の中は目もあけて居られないやうな慘怛たる現状で御座ります」

「先達の戰爭について交戦國の總面積を調べれば、四千三百四十萬二千七百六十二平方哩即ち世界面積の七割五分八厘にあまり、又其戰爭に参加した人員の數は

無慮十六億一千九十二萬人に達し世界人口の九割二分五厘に相當する空前の大戦争で御座りました。恰も秋霜烈日の大威力を示して満天下の草木を一夜の中に凋落せしめて了ひました。只常磐木のみ巍然として聳え、又、別に數種の紅黄紫青等の僅かに艶を競ふて世の終末の美を暫時誇つてゐる位であります。あゝ恐るべき世界の大战争はもはや之で根絶したで御座いませうか。大战後の世界は何處の果てを見ましても平和の象徴を見る事は出来ぬぢやありませんか。到る處小戦争は行はれ、餓鬼畜生修羅の惨状を遺憾なく曝露してゐるぢやありませんか。ハルマゲドンの戦争とは、先達ての戦争を云つてゐるのぢやありませんか。ハルマゲドンの戦争が済めば世の終りが近づくとの聖書の教、どうも物騒になつて來ました。暑い時に寒い風が吹き作物は思ふやうに發達せず、到る處火山は爆發し、地震洪水の悩み、強盜殺人に諸種の面白からぬ運動、到底人間として此世を如何する事も出来ずまい。もうこの上は救世主の降臨を仰ぐより外に道は御座いますまいなア」

「救世主は屹度御降臨になつて世界を無事太平に治めて下さる事を私は確信して

ゐます。然しそれ迄に一つ大峠が出て来るでせう。ハルマゲドンの戦争は私は今後に勃發するものと思ひます。今日は世界に二大勢力があつて虎視眈々として互に狙ひつつある現状ですから、到底此儘では治まりますまい。世の立替立直しは今日の人間の力つき鼻柱が折れ、手の施す餘地がなくなつてからでなくては開始致しますまい。九分九厘、千騎一騎になつて救世主が降臨なされるのが神様の經綸と存じます」

「成程御同感です。そして貴方の二大勢力とは何を指して仰せらるるのですか」
「今日此地球上に於て二つの大勢力が互に暗々裡に争つてゐますのは貴方も大抵御承知の事だと思ひます。一方には強大なる一新勢力を發揮し、全世界に活動飛躍を試み傍若無人的の振舞をなし、不自然極まる人爲的暴壓力によつて膨脹擴大し、弱肉強食を以て唯一の國是となせる強大なる國家があり、一方には鎖國攘夷の夢を破り一躍して全世界の舞臺に現はれ、列強と相伍し、再躍して世界の一大強國となつた國家が御座います。世界萬民は此二大勢力に對して驚異の眼を以てのぞみ、茫然自失の體で御座います。その發展振りたるや前古未聞の大事實で御

座ざいますけれども、而しかもその發展はつてんは頗すこぶる公明正大こうめいせいだいと唱となへられて居ゐるので御座ございます。一方いっぽうはピラミッドの如ごとく極めて壯觀さうくわんなれども眞しんの生命せいめいなき建築物けんちくぶつであり、一方いっぽうは喬木けうぼくの如ごとく生々いきいきとしその壯觀さうくわんの度どに於おいては到底たうてい彼のピラミッドの建築けんちくには及およびませぬけれども、眞しんに生命せいめいある成長せいちやうを遂とげつつあるのであります。そして此この二に大勢力いせいりよくは一つは極東きやくとうの一小孤島いちせうこたう、一つは極西きやくせいの一大大陸いちだいたいりくです。一つは現今げんこんに於おける最古さいこの國くに、一つは列強中れつきやうちゆうの最も新あたしき國くに、一つは建國けんこく以來いらいの王國わうこく、一つは建國けんこく以來いらいの民國みんこく、一つは萬世ばんせい一系いつけいの皇統くわうとうを誇ほこり、一つは四年交代よねんかうたいの主權しゆけんを誇ほこり、一つは天孫てんそんの稜みい威づを本位ほんゐとし、一つは億兆おくてうちゆう烏合おくわうの民權みんけんを本位ほんゐとしてゐます。そして其その國民性こくみんせいたるや、一つは義ぎにつき一つは利りにつき一つは強國きやうこくと云いひ乍ながら神國しんこくと自稱じしやうし、一つは基督敎國キリストけうこくと云いひ乍ながら民國みんこくと自稱じしやうし、一つは親子おやこの經的けいてき關係くわんけいを以もつて家庭かていの本位ほんゐとなし、一つは夫婦ふうふの緯的ゐてき關係くわんけいを以もつて家庭かていの本位ほんゐとし、一つは男尊女卑だんそんじよひの關係くわんけいを以もつて人倫じんりんの本位ほんゐとし、一つは女尊男卑ぢよそんだんびの關係くわんけいを以もつて人倫じんりんの本位ほんゐとし、一つは太陽たいやうを以もつて國章こくしやうとなし、一つは星ほしを以もつて國章こくしやうとなしてゐる。故ゆゑに自らその國情こくじやうと使命しめいに於おいて相容あひいれないのは當然たうぜんではありませぬか』

「成程今貴方の仰有つたのは實に時代を達觀した宣言だと思ひます。一方は日出國一方は常世の國と世界に相對立してゐる現状をお示しになつたのでせうな。諺にも兩雄相戦はば勢ひ共に全からずとか申しまして、どちらか一方に統一されねばなりません。實に困つた世の中になつたもので御座いますな。政治と云ひ經濟と云ひ思想と云ひ、宗教と云ひ何も彼も一切今日程行つまりの世の中は御座りますまい。どうしても此悩みは何處かで破裂せなくてはおかない道理で御座いますな」

「さうです。斯くの如く今や東西の大關が世界の大地俵上に、禪をめて腕を鳴らせ肉を躍らせて相對するの奇觀を呈してゐる以上は、一方が屈服するか、但しは引込まない以上は、早晚虎搏擊壤の幕が切つて落されるは火を睹るより明かです。ハルマゲドン、即ち世界最後の戦争は到底免れなくなつてゐます。それで大神様は地上をして天國の讚美郷に安住せしめむが爲めに、ヨハネ、キリストの身魂を世に降して、天國の福音を普く萬民に傳へしめられつつあるのです。さり乍ら常暗の世になれきつた地上の人類は一人として此大神様の御眞意を悟り得る者

なく、只僅かに忠實なる神の僕が誠を盡し、神を念じて待つてゐるばかり、實に世界は惨めな有様で御座います。かやうな邪惡に満ちた三千世界を立替立直し遊ばず神様の御神業も實に大謨では御座いますまいか」

「此世界の人類は、皆神様の同じ御水火より生れたる尊い御子で御座いますから、吾々人類は皆兄弟で御座ります。然し乍ら今日の狀態では到底吾々宗教家が何程あせつた所で駄目で御座いませう。偉大なる救世主が現はれて整理して下さらねば亂麻の如き世界は到底收拾する事は出来ずまい。然し此二大勢力は一旦、どちらが天下を統一するとお考へになりますか。常世の國でせうか、日出島で御座いませうか。貴方のお考へを承はり度いもので御座いますが」

「到底人間の分際として神様の御經綸は分りませぬが、私がルートバハの教示により、おかげを頂いて居りますのは、將來の國家を永遠に統御すべき人種は決して常世の國人ではなからうと思ひます。二千六百年、亡國の民となつて居つた讚美郷の人々は先達の大戦争によつて神から賜はつたパレスチナを回復し、今や旭日昇天の勢で御座います。そしてその人種の信仰力、忍耐力竝に靈覺力と云ふ

ものは、到底世界に比ぶべきものが御座いませぬ。私は先申しました二大勢力よりも、も一つ奥に大勢力が潛み最後の世界を統一するものと神示によつて確信して居ります。ユダヤ人は七つの不思議があります、それは、

第一、萬世一系の皇統を戴きつつ自ら其國を亡ぼした事、

第二は亡國以來二千六百年なるにも拘らず、今日も尚依然として吾等は神の選民也と自認してゐる事、

第三は二千六百年來の亡國を復興して、假令小なりと雖もパレスチナに國家を建設した事、

第四は自國の言語を忘却し、國語を語るものを大學者と呼びなす迄になつて居つてもその國を忘れず、信仰をまげない事、

第五は如何なる場合にも決して他の國民と同化せない事、

第六には亡國人の身を持ち乍ら不斷的に世界の統一を計畫してゐる事、

第七は今日の世界全體は政治上、經濟上、學術上、ユダヤ人の意のままに自由自在に展開しつつある事です」

「成程それは實に驚くべきもので御座いますわ。如何にも神の選民と稱へられる
丈ありて偉いもので御座いますわい。それから、一方の奥の勢力とは何で御座い
ますか」

「それは日出島の七不思議で御座います。」

先づ第一に萬世一系の皇統を戴き終始一貫義を以て立ち、一度も他の侵略を受け
ず、國家益々隆昌に赴きつつある事、

第二は自ら神州と唱へ乍ら自ら神の選民又は神民と稱ふるものの渺い事、

第三は王政復古の經歷を有するも未だ一度も國を再興したる事なき事、

第四は國語を進化せしめたるも之を死語とせし事もなく、従つて國語を復活せし
めた事のなき事、

第五は同化し難い國民のやうに見ゆれどもその實、何れの國の風俗にも同化し易
く、且何れの思想も宗教も抱擁歸一し、ややもすれば我生國を忘れむとする國民

の出づる事、

第六は一方常世の國は世界統一の爲には手段を選ばざるも、日出島は常に正義公

道即ち惟神によつて雄飛せむとする事、

第七は世界は寄つてかかつて日出島を孤立せしめむと計畫しつつあれども日出島は未だ世界的の計畫を持たず、ユダヤとは趣を異にしてゐる事であります。

之を考へて見ればどうしても、此日出島とパレスチナとは何か一つの脈絡が神界から結ばれてあるやうに思はれます。一方は言向和すを以て國の精神となし、征伐侵略等は夢想だもせざる神國であり、二千六百年前に建國の基礎が確立し、ユダヤは又前に述べた通り二千六百年前に國を亡ぼし、そして今やその亡國は漸く建國の曙光を認めたぢやありませんか。私は屹度此エルサレムが救世主の現はれ給ふ聖地と固く信じ萬里の海を渡り雲に乗つて神業のために參つたので御座います。」

「今貴方は雲に乗つて來たと仰せられましたが飛行機の事ぢやありませんか」

「いえ雲と申しますのは自轉倒島の古言で舟の事で御座いますよ。雲も凹に通ひますから舟に乗つて來るのを雲に乗つて來ると聖書に現はれてるのですよ」

「成程、それで救世主の雲に乗つてお降りになると云ふ事も諒解致しました。い

や有難う御座いました。お邪魔を致しまして……又お目にかかりませう。ちつと御寸暇にお訪ね下さいませ。ヨルダン川の邊に形ばかりの館を作つて吾々の信者が集まつて居りますから……」

「ハイ、有難う御座います。何れ近い中にお邪魔を致します。左様ならば之にてお別れ致しますせう」

(大正一二・七・一二 舊五・二九 北村隆光録)

第一六章 天消地滅(一六四五)

「晴れもせず曇りも果てぬ橄欖山の
月の御空に無我の聲する
行先は無我の聲する所まで

無^む我^がの聲^{こゑ}あてに旅^{たび}立^だつ法^{のり}の道^{みち}
父^{ちち}母^{はは}の愛^{あい}にも勝^{まさ}る無^む我^がの聲^{こゑ}

ほんに可^い愛^としいあの人^{ひと}の

戀^{こひ}しなつかし此^{この}手^て紙^{がみ}

涙^{なみだ}で別^{わか}れた其^{その}夜^よから

どこにどうして御^ご座^ざるか

寝^ねた間^まも忘^{わす}れず居^をつたのに

なんぼなんでも餘^{あんま}りな

今^{いま}更^{さら}切^きれとは何^{なに}かいな

情^{なさけ}ないやら悔^{くや}しいやら

無^{つれ}情^ないお方^{かた}になりました

ほんにいとしい彼方と

思へば泣いても泣き切れず

諦められぬこの手紙

いとしいとしと思ふ程

憎い言葉のあの人が

妾はほんとに懐かしい

と云ひ乍ら橄欖山の頂上をウロついて居る一人の女がある。これはアメリカン
ロニーの牛耳を取つて居るマリヤであつた。ブラバーサはマリヤの女難を避けむ
爲、逸早くも僧院ホテルを立ち出てシオン山の溪谷に草庵を結び隠れて居たので
ある。マリヤは斯の如く歌つて戀に焦れ乍ら、ブラバーサの後を探して居るので
ある。かかる所へ橄欖山上の木の茂みから優しき女の歌ひ聲が聞えて來た。

緑の風に花は散り

逝く春の宵歎きつつ

己が心に夏は來ぬ

夕胡蝶の床に臥し

晨輝く花思ふ

惱ましの夢今さめぬ

現實の月空高く

青葉は光る橄欖の山に

せめて憩はむ吾が心

と歌ひつつ静々朧の月夜に浮いたやうに出て來たのはサロメであつた。折々兩人

は此山上で月下に出會すのである。されど互に餘り心易くもせず、又沁々と話し

た事もない。雙方とも期せずして同情の念にかられ、何物にか惹かるる如く二人

は朧月夜にもハツキリ顔の分る所迄近づいた。

マリヤ「行水の歸らむよしもなし

散る花を止めむよしもなし」

サロメ「櫻の花の盛りこそ

君と睦みし月日なり

月は幾度かはれども

日は幾日か重なれど

君に遇ふべきよしもない

マリヤ 涙の中に夏は来ぬ

夜毎に飛び交ふ螢こそ

こがるる吾身に似たるかな

サロメ 今は悲しき思ひ出の

夜毎に飛び交ふ螢こそ

焦るる吾身に似たるかな

かく兩人は意氣投合して何れも戀の敗者となりし述懐を打明け歌つた。是より

マリヤ、サロメの兩人は姉妹の如く親しくなり、互に心胸を打ち明けて語り合ふ

事となつた。

マリヤ様、貴女の今のお歌によりまして妾の境遇とソツクリだと云ふ事を悟り

ました。ほんたうに世の中は思ふやうにならないもので御座いますなア

ハイ、有難う御座います。もはや此世の中が嫌になつて参りました。思ひ込ん

だ男に捨てられ、もはや此世に何の楽しみも御座いませぬ。オリオン星座よりキリストが現はれたまふとも人間として戀に破れた以上は、もはや何の楽しみも御座いませぬ。キリストの再臨なんか物の數では御座いませぬわ」

と半狂亂の如くになつて居る。
「あなたは永らく獨身生活を續けなさつたのも、キリスト再臨を待つ爲では無かつたのですか」

「妾の待望して居るキリストは左様な高遠な神様では御座いませぬ。妾の愛の欲望を満して下さる愛情の深い清らかな男子で御座います。妾の一身に取つてキリストと仰ぐのは日出の島からお出になつた、ブラバサ様で御座います」

「妾だつてキリストの再臨を待つて居るですよ。併し乍ら自分の心を満して呉れる愛情の深い方があれば、其方こそ妾に對して本當のキリストで御座いますわ。乾き切つたる魂に清泉の水を與へ、朽果てむとする心に生命を與へて下さる方が所謂キリストですわ。さうしてブラバサ様は何處へお出になつたか分らないのですか」

「ハイ百日の行をすると云つて聖地を巡覽遊ばして居られましたが、百日も立たない中にお姿が見えなくなつたのですよ。あの方は雲に乗つて來たと云つて居られましたから、竹取物語の香具耶姫様のやうにオリオン星座へでもお歸りになつたのではあるまいかと、毎晩々々空を仰いで其御降臨を待つて居るので御座いますよ。本當にあの方は普通の人ではありませんせぬ、きつと神様の化身ですわ」

「何程これと目星をつけた男でも、神様の化身では仕方無いではありませんせぬか。どれ程あなたがモウ一度下つて「ほし」ほしと毎日天を仰いで居たつて駄目で御座いませう。そんな遠い天の星を望むよりも間近にオリオン星座があるではありませぬか。この地も天に輝く星の一つでせう。ドンと四股を踏んでも直ぐと答へて呉れるのは地球と云ふこの星ぢやありませんか。きつと此星の中に貴女の戀人は隠れて居ませう。どこ迄も探し出してユダヤ婦人の體面を保つて貰はねば、妾だつて世界へ合はす顔がありませんわ。妾も一旦相思の戀人が御座いましたか、花はいつ迄も梢に留まらぬが如く、夜の嵐に吹かれ、たうとう生木を裂くやうな悲惨な目に會ひ、それからと云ふものは戀に狂ふて、この靈地にお參りするのを

せめてもの心慰めとして居るので御座います。貴女の戀人と仰有るブラバーサ様は、三四回も此お山でお目にかかりましたが、ほんとに神様の様なお方でした。妾だつて貴女の戀人でなければキット捕虜にして居るのですけれども、人の戀人を取つたと云はれてはユダヤ婦人の體面にかかると思ふて、どれだけ戀の惡魔と戦つたか知れはしませぬわ。自分の好く人、又人が好くと云ひまして、男らしい男は誰にも好かれるものですなア。さうかと云つて今後ブラバーサ様を發見しても、決して妾は指一本さえない事を誓つておきますから安心して下さいませ」

「あなたの戀人と仰せらるるのはヤコブ様ぢや御座いませぬか。薄々噂に承はつて居りました」

「ヤコブ様と妾の中には何の障壁もなく、極めて圓満に清い仲で御座いましたが無理解な兩親が中に入つて引き分けてしまつたので御座います。かうなつて別れると妙なもので戀の意地が募り、どこ迄も添ひ遂げねばおかないと云ふ敵愾心が起つて來たのですよ。貴女もユダヤ婦人としてどこまでも奮闘なさいませ。妾も此儘泣き寝入るのでは御座いませぬからなア。かうして二人も失戀の女が、橄欖

山上に出遇はずと云ふのも何かの因縁で御座いませうよ』

「サロメ様、妾は夜も更けましたから、今晚はこれで歸らうと思ひます。コロニーのスバツフオード様が餘り遅くなると大變矢釜しく仰有いますから、又明日ここで貴女と楽しくお目にかかりませう』

「左様ならば一步先へ歸つて下さいませ。妾はもう暫く祈願してお山を下る事と致しませう』

と別れをつげ、サロメはシオン大學の基礎工事の施してある傍の作事場に行つて腰を下ろし、暫く身體をやすめ、再び祈願にかかつて居た。

シオンの谷に戀の鋭鋒をさけて隠れて居たブラバーサは、もはや夜も深更になつたればマリヤがよもや來て居る筈は無からうと高を括り橄欖山上に於てキリストの無事再臨を祈るべく登つて來た。作事場の中に優しい女の祈り聲が聞えて居る。ブラバーサはもしやあの聲はマリヤであるまいか、もしマリヤであつたら又とつつかまへられて五月蠅い事であらう、併しあれだけ慕ふて來る女をむげに捨てるのも殘酷のやうであり、さればとて彼の意志に従へば罪惡を犯したやうな心

持もちがするなり、大神おほかみさま様の御ご化身けしんからは叱しかられ、吁あゝどうしたらよからう、辛いつら事ことだ
な。マテマテ世界せかいばんみん萬民を救すくふのも一人ひとりの女をんなを救すくふのも救すくひに二ふたつはない、一人ひとりの
女をんなを見殺みころしにして世界せかいの人民じんみんを助たすけたつて最善さいぜんの行方やりかたで無ないかも知しれない。吁あゝ、
私わたしは自己じこあい愛あいに陥おちて居あたのかも知しれない、假令たとへあの女をんなを助たすけるために地獄ぢごくに陥おち
てもあの女をんなを助たすけるが赤心まごころだ。エーもうかうなれば善ぜんも悪あくもない、シオンの谷たに
身みを隠かくし女をんなに罪つみを作つくらせるよりも自分じぶんが罪人ざいにんとなつて、マリヤを助たすけてやらう、
それが男子だんしたるものの本分ほんぶんだ。自分じぶんが居あなくても、又また失敗しくじつてもウヅンバラチャ
ンダーの再臨さいりんの邪魔じやまにはなるまい。キリストは萬民ばんみんのために十字架じぶじかに、おかかり
なされたのだ。國くにに残のこした妻つまには濟すまないが、妻つまだつて宣傳せんでん使しの妻つまだ。その位くらゐの
犠牲ぎせいは忍しのぶだらう、エーもう構かまはぬ、これだけ熱烈ねつれつの女をんなを見殺みころしにするのも餘あまり
善ぜんではあるまいと心こころの中うちに問とひつ答こたへつ思案しあんを定さだめ、作事さくじこ小屋こやの中なかに進すすみ入いつた。
ブラバ―サは斯かく決心けつしんをきめた上うへは、もはや宇宙うちうかん間に何者なにものも無なくなつて了しまつた。
此この廣ひろい世界せかいにマリヤの姿すがたが唯ただ一つあるのみである。今迄いままで聞きえて居ある山鳩やまばとの聲こゑも蟲むし
の音ねも無なく、一切いっさい萬事ばんじ何處どこかへ消きえて了しまひ、天てんもなく地ちもなく心こころにうつるものは

マリヤの姿のみとなつて了つた。それ故サロメの姿がすっかりマリヤと見えて了つて、どうしても他の人と考へ直す暇は微塵も無かつた。

一方サロメはヤコブの事を思ひ乍ら祈願をこらして居たが、心の中に思ふやう、
「たとへ兩親が何と云はうとも、世間の人が墮落女と譏らうとも、そんな事に構ふものか。自分の戀を自分が味はふに何の構ふ事があるものか。あの人の爲には天も無く地も無い。森羅万象をすべて葬り去つても吾心を生すものはヤコブさまより無いのだ、地位や、名譽が何になる、貴族の生が何だ。鳥や獸でも自由に戀を味はつて居る。萬物の靈長たる人間が戀を味はふに何の不道理があらう筈がない。草を分けても捜し出し、ヤコブ様を見つけ出して、地位や名譽を投げ出して今迄のお詫をせう。妾の意志が弱かつた爲ヤコブ様に思はぬ歎をかけた……。ヤコブ様許して下さいませ。假令地獄に墮ちた所で貴方との約束を實行致しませう。それが女の本領で御座いますから……。」

と傍に人無きを幸ひ、知らず知らず大きな聲を出して了つた。
ブラバーサは、サロメがヤコブのことを云つて居るのを聞いてゐながら、やつ

ぱりマリヤとしか思へなかつた。二人の男女は一所に集まつて互にかたく抱き締めた。そして天も地も、橄欖山も自分の體もどこかへ消滅したやうな無我の域に入つて了つた。暫くあつてサロメは、ホツト氣がついたやうに、

「あゝヤコブ様、ヨウ來て下さいました。妾の一念が貴方の魂に通じたので御座りませう。もう此上は身も魂もあなたに捧げまして決して外へは心を散らしませぬから可愛がつて下さいませ」

ブラバーサはヤコブと云ふ聲を聞いて大に怒り、

「こりや不貞腐れのマリヤ奴、よう私を翻弄して呉れたなア。お前の熱愛して居るヤコブの代理に己を使ふとは、馬鹿にするのも程があるではないか。己はマリヤより外に愛する女は無いのだと思つて居たのにエ、汚らはしい、勝手にどうなとしたがよからう。俺もこれで胸の迷ひが取れた。あゝ惟神靈幸倍坐世」

サロメはやつぱり現になつてブラバーサをヤコブと思ひつめて居た。マリヤより愛する女が無いと云ふのを聞いて、

「エ、悪性男のヤコブ奴、ようもようも此サロメを馬鹿にしよつたなア。命を捨

てた此體、もう此上は破れかぶれ思ひ知つたがよからう」

と護身の短刀を抜いて切つてかかる。ブラバースはマリヤ待つた待つたと作事小屋のぐるりを逃げ廻つて居る。かかる所へ疑ひ深いマリヤは、サロメがアンナ事をいつて、ブラバースを隠して居るのでなからうかと、中途より引返し來り、此體を見て打驚き、

「もしサロメ様、マア待つて下さいませ」

と腕に食ひつく。サロメは夜叉の如くに怒り狂ひ、

「エ、戀の敵マリヤ奴、ヤコブを取りよつた恨だ、覺悟を致せ」

と猛り狂ふ。其處へ又現はれて來たのはサロメの後を追ふてやつて來た失戀男のヤコブであつた。ヤコブは大聲をあげて、

「これこれサロメさまお氣が狂ふたのか一寸待つて下さい。私はヤコブで御座います」

サロメは此聲に勢拔け茫然として短刀を握つたまま衝立つて居る。月は皎々として山の端を照らし初めた。四人の顔は一度にハツキリして來た。マリヤは慄ふ

て居るブラバーサの手を固く握り、

「聖師様何處へ行つてゐらしたの。妾どの位たづねて居たのか分りませぬのよ」

「ウンお前がマリヤであつたか。夜中の事とて甚い人違ひをしたものだ。あの活劇を見て居つたであらうなア」

マリヤは、

「ホ、、、、、」

サロメも、

「ホ、、、、、」

「何だ人違ひか、サア、サロメさま、ヤコブはどこ迄も貴女と離れませぬから覺悟して下さい、命がけですよ」

「妾だつて命がけですわ。ブラバーサ様があなたに見えたので甚い間違ひを致しました。マア無事で怪我が無くて何より結構で御座いました。皆様茲で神様に感謝を致しませう」

と男女四人は地上に端座し、戀の成功を感謝した。ヨルダン川の流れも峰吹く風

の音も天も地も漸く四人の前に開展して来た。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・七・一二 舊五・二九 加藤明子録)

第四篇 遠近不二

第一七章 強請(一六四六)

シオン山の谷間に草庵を結んで、戀の鋭鋒を避けて居たブラバーサの隠家へ慌だしくやつて来たのは三人のアラブである。ブラバーサは橄欖山上に於て、ゆくりなくもマリヤの愛情に絆され、自分も何時の間にも戀の虜となり、夫婦の約束をしたものの、今となつて考へてみれば、何とはなしに重罪を犯したやうな心

持がして來出した。……あゝなぜ私は之丈愚昧だらう。一度ならず二度迄も戀の誘惑におち、はるばる聖地から萬里の海を渡りてここ迄來乍ら、かやうなことで何うして神様に申譯が立たう。又ルートバハの教主に對しても言譯がない。困つたことになつたものだ。……と朝早うから草庵の中に端座して悔悟の涙にくれてゐた。そこへ三人のアラブが柴の戸押あけドヤドヤと入來り、

テク「ヤ、お早う。わつちは何時も橄欖山のシオン大學の工事に使はれてゐるアラブだが、夜前一寸面白いことを吾々三人が見たので御相談に參りやした」

「して又あなた方が私の草庵を訪ねて下さつたのは、何か變つたことが御座いますかな」

「ヘン、トボケまいぞ。夕べの活劇は何うだい。誰も知らぬかと思つてゐても、天知る地知ると言つて、チヤンと吾々三人さまの耳につつぬけるほど響いたのだ。イヤ耳ばかりでない、此二つの黒い眼で、作事場の隅から覗いておいたのだ。二組の男女が随分立派な活劇をやつたでせう。之でも違ひますかな」

「之は聊か迷惑、拙者は此草庵よりここ二三日、一歩も出たこともありません。」

ソリヤ大方何かの間違ひでせう』

と聞くよりトクは、

「ヘン、馬鹿にするない。おれは聾でも盲でもないぞ。お前も日の出島からやつて来たルートバハの宣傳使だといふことだが、宣傳使はウソを云つて可いのか。此聖地へ各國の人々が出て来てるが、ウソをつく奴アお前ばかりだ。お前は日の出島の代表者とも認めらるべき者だ。其代表者が嘘つきとあれば日の出島の間は一體に嘘つきと定つて了ふが夫れでも可いのか。キリストの再臨に間もなき今日、嘘を云ふ國民は世界の連盟から排斥され、今迄のユダヤ人の様に放浪の民とならねばならないぞ。しつかり性念を据ゑ、本當の事を云つたら何うだ。お前一人の嘘が日出島全體の嘘になるのだ。ここには都新聞も聖地新報も亦回々教新聞も發刊されてゐるから、俺達が記者に會つて夕べの實状を喋らうものなら、汝は此處に居るこた出来ないのだ。ユダヤの女をチヨロまかしやがつて……ユダヤ人全體の敵としてハリツケに會はなならぬが、それでも可いか。汝の出様によつて此方にも考へがある、サアどうだ。判然と返答を聞かして貰はうかい』

「此奴ア近頃迷惑の至りだ。拙者はソナ覺は決して御座らぬ」

「馬鹿云ふない。汝が隠したつて駄目だ。サロメにもヤコブにもチヤンとテクが調べ上げて來てあるのだ。グツグツしてると、四人の奴ア、ユダヤ人の怨府となつて、忽ち寂滅爲樂の運命に陥るが、それが可哀相だと思つて、おれ達三人が談判に來たのだ」

「何うすれば可いと云ふのだ」

「ザマア見やがれ、ヤツパリ覺があるだらう。汝の命とつり替への一萬兩、ここへオツぽり出せ。さうすりやおれ達や沈黙を守つてやる。俺達三人の外にやお月さまより見たものはないのだから、お月さまが仰有らぬ限り分る氣遣はない。こんな事を都新聞の記者にでも話さうものなら、二萬兩や三萬兩の報酬を呉れるに違ひない。何しろ一方はルートバハの宣傳使、一方は貴族の娘サロメさまといふのだからな……何しろ可い金儲の種を見つけたものだ。イヒ、ヒ、ヒ、ヒ」

「ナア二、一萬兩到底ソナとは出來ない、ア、そこは世界同胞のよしみで、一封包むことにして辛抱して呉れ。又何か……埋合せをすることもあらうから……」

…」

「一封だと云つても、一錢でも一封だ。十千萬兩でも一封だ。一封なら一封で可いからいくらと云ふ事を表へ現はして貰はうかい」

ツークは、

「オイ、テク、さう尻から火のついたやうに喧しく云はなくても可いわ。何と云つてもサロメ、マリヤといふ別嬪を自由自在に翻弄するといふ抜目のない宣傳使だから、そこは俺達の面の潰れるよなことはなさる筈はない。マア聖師の意志に任す方が可からうぞ」

「ソナナラ、お任せせう。テクの面のつぶれないやうに頼みますぜ」

「ブラバーサは是非なく百圓を包んで、前につき出し、

「サア之で辛抱してくれ。おれも災難だ。別に自分の方から戀したのでもなし、自然の成行であのやうな災難に會うたのだから……」

「テクは其包を受取り、

「成る程エライ災難に會うたものだなア。俺達もアンナ災難に幾度も會うてみた

いものだワイ……モシモシ聖師さま……エー一寸ここで中をあらためて見ましても宜しいだらうな」

「どうぞ御勝手に開いて下さい」

テクは包をほどいて見て、ふくれ面、

「エーツ、馬鹿にするない。たつたの百兩位な目くされ金に誰がコンナイヤな事を云うて来るものかい」

と言ひ乍ら其場にブツついたり。

「大切なお金、必要がなければ元へ納めておきませう」と手早く拾うて懐に入れる。トンクは、

「オイ、テク、ツーロ、コンナ奴に相手になつて居つても駄目だ。命より金が惜いとみえるワイ。モウ構ふことはない、都新聞へ行つてドツサリと褒美を貰うて来う。此奴とあとの三人には氣の毒だが自業自得だから仕方があるまいサア歸らう」

ツーロは二人に向ひ、

「オイ、一寸待て。おれ達は金のよなものが目的だない。夫れよりもマリヤを此方へ渡してさへ貰へば可いのだ、……オイ先生、一萬兩の金の代りにチツと高いけれどマリヤを此方へ渡すといふ證文を書いて貰はうかい。無い懷をしぼつて出すよりも、お前もその方が可いだらう」

「マリヤは拙者の女ではない。又假令自分の女房にした所で、彼女の意志を無視してお前達にやるといふ譯には行くまい、マア二三日考へさしてくれ」

「ヘン何をぬかしやがるのだい。マリヤをとらうと取るまいとテクの勝手だよ。こないだも橄欖山の上でマリヤを物にせうとしてる所へ、汝がせうもない事吐しやがるものだから、役人が来たと思つて逃たが後で汝と分り、齒がみをしたのだ。オイ兄弟、此奴を縛りシオンの谷へ葬つて了へば、マリヤは此方の者だ。サアやつて了へーイ二ウ三ツだ」

「ヨーシ来た」

と兩人は手てに棍棒を打振りブラバーサに打つてかかる。ブラバーサは一生懸命に神言を奏上した。三人は其言靈に打たれ、
「エー此奴ア大變だ」とこけつ轉

びつ先を争ひ逃げ散りて行く。

(大正一二・七・一三 舊五・三〇 松村眞澄録)

第一八章 新聞種(一六四七)

ヨルダン河の河縁に新しく建つたバハイ教のチャーチがある。そこには、バハイウラーが足を止めて、各人に對し、バハイ教を宣傳してゐた。次から次へ聞き傳へて救世主の再臨の如く、聖地に集まる各人はその教を聴かむと、晝となく夜となく可なりに集まつて來た。サロメもヤコブとの戀愛關係より兩親と意見合はず、此チャーチに隠れてバハイの教を研究してゐた。

ヨルダン河は朝霧立ち昇り、餘り廣からぬ向ふ岸の樹木さへも見えない迄に濃霧に包まれてゐる。川べりの窓をあけて水の流れを打見やりながら、バハイウラーと共に世間話に耽つてゐる。サロメは、

「聖師様、此世の中に最も幸福な人と云へば如何なる人で御座いませうか」
「一般の人は一國の主權者となり、或は貴族生活をして道を行くにも馬車自動車に乗り、何一つ不自由なく安樂に暮す者を最も幸福者として居りますが、私なんかは、世界人類を救済する聖き神の使となる位、世の中に幸福な者はないと思ひます。そして夫婦睦まじく、二三人の子を生んで其子も親も同じ神さまの道に、一身を捧げて信仰する人の家庭位幸福なものなからうと考へます」
「成程、妾も御存じの通り、貴族の家に生れ、ウルサイ虚禮虚式に束縛され、少しも自由の行動は出来ず、殆ど慈悲の牢獄に投ぜられたやうなもので御座いました。其苦痛に堪へかねて、筆墨に親み、下らぬ小説を書いたり歌などをよんで、悶々の情を消さむと努めてみました。小説を一つ書いても身の生れが貴族の爲に、あちらにつかへ、此方につかへ、思ふやうに筆を走らすことも出来ないのです、本當に人生貴族となる勿れといふ事を深く味はひました。それから無理解な親兄弟の壓迫によつて、素性卑しき毘舍の妻として追やられ、十年が間あるにあらぬ苦痛と不愉快を忍んで参りましたが、とうと居たたまらなくなつて、毘舍の家

を飛び出し、自分に同情をしてくれる男の方へ走つたので御座いますが、之も又ウルサイこつて御座います。どうしたら天下晴れての夫婦になれるであらうかと、いろいろと心を痛めました。モウ此上は神様のお力を借りるより仕方がないと存じまして、バハイ教の教を信仰することになつたので御座います。本當に不運な生付で御座います」

「成程、貴女のお考へも強ち無理ではありません。併し乍ら今日の世の中は分らずやが多くて、誤解する者ばかりですから、餘程心得なくちやなりません。あなたもシオンの女王として随分新聞紙に喧しく書き立てられましたなア」

「世界中へ醜名を擴めてくれました。ルートバハイ教のウヅンバラチャンダーさまと東西相竝んで新聞種の巨壁となりましたよ。オホ、々、々」

「あなたが普通の平民の生れであつたならあれ位な事は、六號活字で人の氣のつかないやうな所へ、ホンの二行か三行のせるのですけれど、何と云つても伯爵家のお嬢さまだから新聞屋の阿呆奴が、針小棒大に書き立てたのでせう。ウヅンバラチャンダーさまだつて、やつぱり、ルートバハイ教といふ背景がなければ、あ

れ程喧しくならなかつたでせう。本當に新聞記者位悪い奴はありませぬなア」
「新聞記者に狙はれたが最後、助かりつこはありませぬよ。丸で胡麻の繩の様なもので、何處へ隠れて居つても探し出して、おマンマの種を拵へやうとするのですからねえ」

「時にサロメさま、此頃日出島から、立派な宣傳使が聖地へ見えて居りますが、お聞及びで御座いますか」

「ハイ、存じて居ります。本當に立派な方で御座いますねエ」

「あなたは此處へお出になつてから殆ど二ヶ月になりますさうですが、どこでお會ひになつたのですか。根っから貴女が其方にお會ひになる機會がなかつたやうに思ひますが……」

「ハイ、妾は橄欖山へ夜分にお参りする時、チヨコチヨコ山上や坂の途中に於て、お目にかかり、お話しもさして頂いて居ります。それ故あの方の人格も思想もよく存じて居ります」

「バハーウラーは微笑を泛べ乍ら、

「ヤコブさまに比べては、あなたどちらが良いと思ひますか」

「お尋ねまでもありませんわ、ホ、ホ、ホ、」

かかる所へ「御免なさいませ」と言ひ乍ら受付に案内されて這入つて来たのは、ブラバーサであつた。ブラバーサは、

「これはこれは聖師様、此間は御親切にお尋ね下さいまして、有難う御座います。今日は折入つて、サロメ様に御相談致したいことがあつて、お伺ひ致しました」

「ヤ、よう来て下さいました。呼ぶより誹れとか云つて、今も今とて貴方のことを話して居つた所です。サロメさまに御用とあれば私は席を外します。どうぞゆつくりお話し下さいませ、……モシ、サロメさま、ヤコブさまのことを忘れちゃ可くませぬよ」

とニツコリと笑ひ、氣を利かして此場を立去りぬ。

「ブラバーサさま、能くマア訪ねて下さいました。一昨夜はエライ失禮を致しましたね。妾思ひ出しても恥しうなつて参りましたワ」

「イヤもう失禮は御互で御座います。併しサロメさま、今日参りましたのは外の

ことだ御座りませぬ、吾々の身の上に関して大變なことが起つて居るので御座います」

「大變とはソリヤドンナことで御座いますか。どうぞ早く聞かして下さいませ。何だか妾も胸が騒いでなりませぬワ」

ブラバ―サは眉をひそめ乍ら言ひ憎相にして、

「實の所は一昨夜の山上の活劇を三人のアラブがスツカリ見て居つたと見えます、私の草庵を訪ね、一萬兩の金を出さねば、新聞へ出すとか言つて、強請に参りました。私だつて遠國から参つた者で御座いますから、夫れ程の大金は持つてゐる筈もなし、已むを得ず百兩包んでやつた所、忽ち大地にぶつつけて、之から新聞社へ行つて二三萬兩の金を貰つて来る、さうすりやお前達四人はユダヤ人の怨府となり磔刑に會ふだらうと捨臺詞を残して歸りました。グツグツしてゐて新聞にでも出されちや大變ですから、何か貴女によいお考はなからうかと御相談に参りました」

聞くよりサロメは目を丸うし、面色迄變へて稍慄ひ聲になり、

「ヤ、其奴ア大變です。何うしませうかなア」

「何うも仕方があります。恥し乍ら、何れ分ることですから、バハーウラーさまに一伍一什打あけて、何かよい智慧を借らうぢやありませんか」

「だつてマサカ、ソナ恥しいことが言へぬぢやありませんか。あゝ困つたことですなえ」

斯る所へ聖師バハーウラーは少しく苦々しい顔をし乍ら現はれ來り、

「モシお二人さま、都新聞の記者があなた方にお目にかかりたいと云つて参りました。が、何う致しませうかね」

「ハテ、困りましたなえ」

「モウ斯うなつては隠れたつて駄目でせう。此方の方から面會して、何もかも事情を云つてやりませう。その方が却て良いかも知れませぬよ。新聞記者に隠れると、憶測で針小棒大に何を書き立てるか知れませぬからな」

サロメは胸を据ゑて、

「ソナナラさう致しませう。聖師様、記者様をどうか此方へお出で下さる様に云

つて下くださいませぬか」

バハーウラーは「宜よろしい」と諾うなづき乍ながら表おもてへ出いで行く。

(大正一二・七・一三 舊五・三〇 松村眞澄録)

第十九章 祭誤さいご「一六四八」

高城山たかしろやまの峰みねつづき、小北山こぎたやまの松林まつばやしを切り開ひらいて澤山たくさんな小宮こみややチャーチを建たてた
ルートバハーの脱走だつそう教けうがあつた。この主人しゆじんを虎島とらしま久之助ひさのすけと云いひ、女房にようぼうは虎島寅とらしまとら
子こと云いふ。生うまれつき自我じがしん心の強つよい女をんなであつたが變性へんじやうなんし男子けいとうの系統けいとうと云いふのを奇貨きくわと
してユラリ教けうと云いふ變則へんそくてき的てきなる教團けうだんをたてユラリ彦命ひこのみことを祀まつつて、盛さかんにルートバ
ハーの教主けうしゆウツンバラチャンダーに反抗はんかうてき的たいど態度たいどをとつてゐる。そして自分じぶんは底津そこつ
岩根いはねの大彌勒おほみろく、日ひの出神でのかみと自稱じしやうし、朝あさから晩ばんまで皺枯しわがれこゑ聲こゑを出だして濁にごつた言靈ことたまで四あた
邊りの空氣くうきを灰色はいいろに染そめて居ゐる。ここへ集あつまる信徒しんとの中なかには隨分ずぶん色々いろいろな變かはり者ものがあつて、

中にも最も寅子の信任を得たのは、善も悪きも難波江の菖蒲のお花と云ふ、あま
り色の白くない背の低い横太い年増婆アさまである。そして寅子の最も信任して
あるのは守宮別と云ふ海軍の士官上りの外国語をよく轉る男であつた。寅子は日
の出神の生宮と自稱し乍ら此守宮別と共に宅を外にして曲靈軍の櫛を掛け、日
出島の東西南北を隈なく巡教し、軍艦布教までやつてヤンチャ婆アさまの名を賣
つた、したたか者である。守宮別は日の出神と腹を合せ如何にしても變性女子の
ウヅンバラチャヤンダーを社會の廢物となし、自分等がとつて代らむと苦心の結果、
守宮別は四方八方に反對運動を開始し、終には六六六の獸を使つてウヅンバラチ
ヤンダーの肉體の自由まで奪つた剛の者である。

目の上の瘤として居た人物を、うまく壓倒した上は、もはや天下に恐るべきも
のなしと、菖蒲のお花を筆頭に守宮別、曲彦、木戸口、お松等の連中と謀り小北
山に拜殿を建て、一時も早く願望成就しますやうと祈願をこらして居た。さう
して地の高天原へ乗込んで一切の教權を握らむと聖地の古い役員をたらし込み、
九分九厘と云ふ所へウヅンバラチャヤンダーが歸つて來たので、肝をつぶしホウボ

ウの態にて再び小北山へ逃げ歸り守宮別は海外に逃げ出し、後に寅子姫、お花、曲彦の三人は首を鳩めて第二の策戦計畫にとりかかった。先づ第一に日の出神の筆先を書いてルートバハの信者を籠絡し、變性女子の勢力を失墜せむものと難波の里の高山某に軍用金を寄附させ、日出島全體の神社佛閣を巡回し、身魂調べと稱し、口碑傳説を探つていろいろの因縁をつけ、筆先を作つて誠しやかに少數の信徒を誤魔かして居る。

今日は春季大祭の爲五六十人の信徒が集つて來た。祭典は無事に済んで信者は各家に歸つた。あとには曲彦、寅子、菖蒲のお花、久之助、高山彦等が首を鳩めて協議を凝して居る。曲彦は先づ第一に口を開いて、

「皆さま、お神徳によりまして春季大祭も無事終了致し、さしもに廣き靈場も立錐の餘地なき迄に信者が集まらず、却て、込みあはずお神徳を頂きました。之も日頃熱心に御布教して下さいさる日の出神様を初め龍宮の乙姫様の御活動の結果と有難く感謝致します。就いては御存じの通り、吾々がかねて計畫してみた玉照彦、玉照姫の御結婚もたうとう此世を亂す惡神の憑つた瑞の靈の爲に舉行されて了ひ、

本當に苦辛した甲斐もなく誠にお目出度う御座いませぬわい。貴方はいつも此結婚は變性女子には指一本さえさせぬ、此日の出神が許して天晴れ結婚をさし、ルートバハ一の教を立直すと仰有いましたが、一體どうなつたので御座います」

寅子は、

「ソレハ神界の都合によつてお仕組を變へたのだよ。玉照彦、玉照姫もたうとう變性女子の惡靈に感染して了ひ、水晶魂が泥魂になりかけました。さあ之から吾々の正念場だ。グツグツしてゐては駄目ですよ。もはや期待してゐた玉照彦様、玉照姫様も駄目だから此日の出神の生宮が、もう一働きやらねば到底神政成就は出来ませぬぞや。神様は控えは何程でもあるぞよ、肝腎の事は系統にさしてあるぞよとお筆に出してゐられませうがな。その系統は誰の事だと思ひますか。金勝要神の身魂もサツパリ駄目だし、日の出神が居らなくては、もう此三千世界の立替立直しは出来ずまい。良金神、坤金神、金勝要神、日の出神、四魂揃ふて御用を致さすぞよ、とお筆に出てゐるでせう。良金神の御魂はもはや御昇天遊ばし、

坤金神の生宮は悪靈にワヤにされて了ひ、金勝要神は我が強い神で役員達に祭り込まれて慢心致し、到底神政成就どころか、ルートバハの維持も出来ませぬ。四魂の中、三魂迄役に立たねば、九分九厘の處で一厘の仕組でクレンと覆すとお筆に出てゐるでせう。それだから此の日の出神が一厘のところて掌をかへすのですよ。宜しいかな。取違ひを致しなさるなや」

「それほど變性女子の靈が曇つとるのなら、何故大祭毎に頼みさがして、變性女子に来て貰ふのですか。チツと矛盾ぢやありませんか」

「エー、分らぬ人ぢやな。變性女子さへ詣らしておけばルートバハの信者が」

「ヤツパリ小北山の神殿は因縁があるに違ひない。あれだけ悪く云はれても變性女子が頭を下げに行くから、矢張偉い神様だ」と思はせる……一厘の仕組をしてるのだよ。神の仕組は人間に分りませぬよ。神謀鬼策の仕組を遊ばすのが日の出神の御神策だよ」

「ヤア、それで貴女の權謀術數、悪にかけたら抜目のない、やり方が分りましたよ。へん糞面白くもない」

とあとは小聲で呟く。

「へん、措いて下され、私が悪に見えますかな。神様のお仕組は悪に見えて善を遊ばすのだよ。何もかも昔からの根本の因縁を十萬億土のドン底まで行つて調べて来た日の出神の生宮、何程お前さまは賢うても軍人上りぢやないか。軍人が神界の事が分りますかい。お前さまは早く女子の留守の中に拜殿を建て、事務所を建て、そして費用は何ぼでも出すと云ひ乍ら愈となれば、スツタモンダと云つて一圓の金も出さぬぢやないか、そんな事でゴテゴテ云ふ資格がありますかい。スツ込んで居りなさい」

「ヤア、どうも日の出神様の御威勢には楯つく事は出来ませぬわい。何と云つても一寸先の見えぬ人民ですから、何と口答へする譯にも行かず、マア時節を待ちませう」

「あ、それが宜いそれが宜い、何事も日の出神の生宮の申す通りに致さねば神界の仕組がおくれて仕方がない。これ久之助さま、お前さまも私のハズバンドなら、少しシツカリしなさらぬかい。菖蒲さまも何して御座る。曲彦にアンナ事を云は

して黙つてる事がありますかいな

「私も閒がな隙がな、曲彦さまに御意見を申して居りますが、何と云つても若い人だから到底婆の云ふ事は聞いて下さいませぬ。然し乍ら寅子姫さま、私は一つ妙な事を聞きましたが、それが本當とすれば、かうしてグツグツしてゐる譯にも行きますまい」

「お前さまの妙な事と云ふのは一體ドンナ事かいな。差支なくば云つて下さい。此方にも考へがありますから」

「それなら申しませうが、變性男子のお筆に西と東にお宮を建てて神がうつりて守護を致すぞよと出て居りませう。東と西のお宮とは、あなた一體どこの事だと思つて居りますか」

「オツホ、お花さま、お前は何を慌けてゐるのだい。東のお宮といふのは小北山の神殿ぢやないか。人間の初り、五穀の初りは所謂此小北山ですよ。そして西のお宮と云ふのは聖地の桶伏山ぢやありませんか。桶伏山の神殿はあの通り叩きつぶされましたが、東のお宮は旭日昇天の勢ひで誰一人指一本支へるもの

がないぢやありませんか。これを見ても神徳があるかないか分るぢやありませんか。ルートバハ一の信者は馬鹿だから變性女子の爲に騙され、壊された宮の跡へ集まつて、

壊たれる宮の爲に

過ぎ去りし偉大のために

吾等は地に伏して泣く

あゝ惟神靈幸倍坐世

なぞと、憐れつばい聲を出して毎日日吠面かわいてゐるぢやありませんか。それ

れを見ても神様が居られるか、居られないか分るでせう。善の道の分るのはおそ

いと神は云はれますが、今は此小北山はルートバハ一の信者からは馬鹿にされて

居りますが、今に金色燦爛たるお宮が建つて桶伏山尻でも喰へと云ふ様になるの

ですよ。それだからお前さま等しつかりなされと云ふのですよ。イツヒ、

寅子さま、西と東にお宮を建てると云ふのはチツと見當違ひぢやありませんか。

私は桶伏山の御神殿こそ東のお宮と思ひます。神様の御仕組はそんな小さいもの

ぢやありますまい」

「ホ、、、、、日輪様のおでましになるのが東、お隠れになる方を西と云ふ事が分つてるぢやありませんか。小北山が西ぢやと思ひますか。貴女も分らぬ方だな。お前も桶伏山の山麓に蟄居してゐたので、女子の悪靈に憑られてソロソロ恍けかけましたね。ウツフ、、、、」

斯かる所へ洋服姿の守宮別は忙がしげに歸り來たるを見て一同は嬉しさうに、
「ヤア、守宮別さま、御苦勞で御座いました。外國のお仕組はどうで御座りましたな。定めし日の出神様のお仕組も行渡つて居るでせうな」
「兔も角お酒を一杯出して下さい。お神酒を頂きもつて、守宮別がゆつくり物語りを致しませう」

（大正一二・七・一三 舊五・三〇 北村隆光録）

とらしまとらこ
虎島寅子は待ち焦れてゐた守宮別が飄然と歸つて來たので、雀躍りをし乍ら、
いそいそと座敷中を舞ひ歩き、

「サアお花さま、お酒の用意だ。曲彦さま、お肴の用意だよ。コレ久之助さま、
何をグツグツしてる、大廣木正宗さまのお歸りだよ。男と云ふものは氣の利か
ぬ者だな」

と口汚く指圖してゐる。バタバタゴトゴトガタガタチヤランチヤランと音をさせ
乍ら、漸く酒肴の用意が出来た。守宮別は洋服を脱ぎ棄て、洗濯物の袷と着替へ
て、ドンと胡座をかき、つり上つた目を一入小さうしてキュウキュウと喉を鳴ら
せ乍ら盛に左を利かしてゐる。守宮別は酒に酔へば何もかも忘れて了ふ困つた男
である。酔が廻つて、そろそろ唄ひ出した。菖蒲のお花もお寅も曲彦も車座とな
つて「ヤートコセイ、ヨーイヤナー」で唄ひ始めたり。

「日の出神のお頼みで
乞食のやうな姿して

世界の端々きはめむと
一人の女をちよるまかし

香港上海北京まで うろつき廻つて尋ねて見たが
寅子姫さまの云ふやうな 肉體持った日の出さま
根っから見當り申さ何だ 懐ダンドン淋しうなり
飲み度い酒まで飲めぬやうに なつて来たので是非もなく
自分の惚れたクリスチヤンの 黒い顔した別嬪と
再び支那の上海に せうことなしに引返し
いろいろ雑多の各國の 人の話を聞いて見たが
如何しても斯うしても分らない 此奴ア駄目だと決心し
轉覆丸に乗り込んで 日出の島へ歸つて見れば
過激團から一萬兩 金を貰ふたに違ひない
ちよいと此方に出て来いと 可憐い女と一所に
暗い處に放り込まれ いろいろ雑多と調べられ
今は晴天白日の 身となつて歸つて参りました
ホんに外國行きと云ふ事は 氣骨の折れた事だわい

俺はもう之から外國は
假令日の出神さまが
行けと云つても行きはせぬ
ホンに馬鹿をば見て来たものだ
今日はドツサリ酒飲んで
旅の疲れを直さねば
腹の蟲奴が承知せぬ
ヤットコサのウントコシヨ
ウントコ、ドツコイお寅さま
ヤットコ、ドツコイお花さま
世界が轉覆したとても
酒さへあれば守宮別は
誠に天下は太平だ
飲めよ騒げよ一寸先や暗だ
暗の後には月が出る
月はつきぢやが運のつき
愛想のつきた瑞の月
お前等の知らぬその中に
西の都のエルサレム
橄欖山の山麓に
日の出神の再臨が
間近くなつたと云ひ乍ら
桶伏山の聖地から
チヤンダーさまの内命で
ブラバースが行つたと云ふ
新聞記事を上海で
私は一寸見て来たよ
グツグツしてるとチヤンダーに

折角仕組んだ計畫を 打壊されるに違ひない

皆さま氣をつけ成されませ ウントコ、ドッコイ、ドッコイシヨ

ドッコイにっつて灰小屋へ 轉げて倒れて灰まぶれ

アフォンとしたとて仕様がな 夜食に外れた梟

六かし顔をせぬやうに 忠告しやうと思た故

荒波渡つて遙々と ここ迄歸つて來ましたよ

あゝ惟神々々 目玉飛出しまませよ

旭は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 此結構なお仕組を

日の出神が知らぬとは 世間へ顔出しなるまいぞ

早く用意をするがよい アハ、ハツハ阿呆らしい

イヒ、ヒツヒ異國まで ウフ、フツフ、ウロウロと

エヘ、ヘツへえらまれて オホ、ホツホ恐ろしい

カカ、カツカ過激派の キキ、キツキ危険をば

クク、クツク 潜り抜け ケケ、ケツケ 怪體の悪い
ココ、コッコ 困窮して ササ、サツサ 探り行き
シシ、シツシ しみじみと スス、スツス すかぬたらしい
セセ、セツセ 攻められて ソソ、ソツソ 底抜けの
タタ、タツタ たわけをば チチ、チツチ 力の限り
ツツ、ツツツ 盡しました テテ、テツテ 天手古舞ひ
トト、トツト 遠い國で ナナ、ナツナ 難儀して
ニニ、ニツニ 二年の間 又又、又ツ又 盜人が
ネネ、ネツネ 寢息をば 覗ひすまして ノノ、ノツノ 喉締める様な悪性な
ハハ、ハツハ 放業 ヒヒ、ヒツヒ 晝夜も
フフ、フツフ 不斷の活動やつて來た ヘヘ、ヘツヘ 屁古垂れて
ホホ、ホツホ ほろほろと ママ、マツママ まごつき乍ら
ミミ、ミツミ 身の苦しきも ムム、ムツム 無理に忍んで
メメ、メツメ 名譽の爲に モモ、モツモ 唐土の空まで

ヤヤ、ヤツヤやつとの事ことで　　イイ、イツイ行いて來きた私わたし

ユユ、ユツユ夢ゆめにだも　　エエ、エツエ會あ得とくの出で來きないお仕組しぐみを

ヨヨ、ヨツヨよく探さぐり　　ラリルレ口の濁にごり水みづ

ワワ、ワツワ渡わたつて越こえて　　ヰヰ、ヰツヰ今いまここへ

ウウ、ウツウ嬉うれしくも　　エエ、エツエエンヤラヤツト

ヲヲ、ヲツヲお歸かへりなさつた守宮別やもりわけ　　大だい切じにせないと冥加めうがが惡わるい

ア、爛酒かんざけぢや爛酒かんざけぢや　　冷酒ひやざけよりも爛かんがよい

鹽辛肴しほがびさかなを出だすよりも　　甘鯛ぐじの一鹽ひとしほ買かふて來きて

アツサリ飲のましたら、どうだいのう　　ウントコドツコイドツコイシヨ

とソロソロ醉よひがまはつて立たち上あり唄うたひ出だし、徳利とくりや皿鉢膳さらはちぜん等などを踏ふみ潰つぶし、バタリ

とその場ばに倒たふれグウグウと鼾いびきをかいて寢ねて了しまつた。

寅子とらこ、お花はなの兩りやう人にんは一いっ生しやう懸命けんめいに守宮別やもりわけを別室べつしつに擔かつぎ込こみ、足あしを撫なでたり、團扇うちは

で煽あふいだり、あらむ限かぎりの誠まことを盡つくし、介抱かいほうを爲なしゐたりけり。

小北山の松の木の鬱蒼とした枝から梟が、「愚迂々々々々々々々々々、阿呆々々々々」と啼いてゐる。

(大正一二・七・一三 舊五・三〇 北村隆光録)

第二章 遍路(一六五〇)

お寅、お花の兩人は溝傍に立つた長屋の窓をあけて額を集め、六ヶしい顔をしい聲で宣傳歌を歌ひ初めける。

- 【い】まも昔も變りなく
【は】はと妻とを兼ねる身の
【ほ】かには非ず淑徳ぞ
- 【ろ】んより實は責がたし
【に】よ子の教の第一は
【へ】い常父母を天として

【と】 つがば夫を天とせよ
 【ち】 ちと母とに引かへて
 【り】 よう人舅姑に盡すべし
 【ぬ】 い針洗濯怠らず
 【る】 守は一層つつしみて
 【を】 んなの務めを全うし
 【わ】 が儘氣儘のことをせず
 【か】 よわき女の腕ながら
 【よ】 の爲め人のためとのみ
 【た】 だ一筋に盡すべし
 【れ】 いを見倣ふ幼子の
 【そ】 の行末の善惡は
 【つ】 ひに育ての母になる
 【ね】 んに念を加へつつ
 【な】 につけても物事を
 【ら】 うを厭はず努むべし
 【む】 益の驕を誠しめて
 【う】 ちの小者に目をかけよ
 【み】 なか者として侮るな
 【の】 うある高ひめ爪かくす
 【お】 もひの儘に言ふなかれ
 【く】 ちは禍の門ぞかし
 【や】 さしく素直に慎みて
 【ま】 げの操ぞいや高き
 【け】 がれぬ身こそ尊けれ
 【ふ】 徳の名をば世にたてず
 【こ】 こを吾縁とせし上は
 【え】 んを二度とは求むなよ

【て】い操かはらぬ姫小松
 【あ】らしに雪に逢ふとても
 【さ】かゆる色こそ目出たけれ
 【き】ん銀瑪瑙瑠璃【しやこ】も
 【ゆ】めと見るまの不義の富
 【め】をばかくまじ望むまじ
 【み】なその爲に昔より
 【し】にし貞女も數多し
 【ゑ】得せよかし女達
 【ひ】との鑑と仰がれて
 【も】も年千年の後迄も
 【せ】閒に名をば知られよと
 【す】ゑの末迄祈るべし

此歌を聞いて、お寅は大變に御機嫌な顔をしながら、
 「これ、遍路さま、お前さまは乞食にも似ずホントに身魂の研けた人と見えます
 わい、ちやつと上つて一服して下さい。コレコレお花さま、今の歌を聞きました
 か、「能ある高姫爪かくす」といつたでせう。私の守護神は高姫と云つて昔の神
 政成就には随分盡したものですからなア。今私がかう爪を隠して柔和しくして居
 るのは曰く因縁があることですよ。見違ひをしては困りますよ。今もお遍路さま

の云ふやうに百年千年の後迄も世間に名をば知られると云つたでせう。お前はこ
の高姫の生れ變りの日の出の神の生宮お寅にむかつて、爪揚子の先で重箱の隅を
ほじくるやうに詰問をしなさるが、ちと了見が違ひはしませぬかい。お前さまも
前世には、黒姫さまと云つて随分妾の爲に活動した因縁によつて、又一緒に集つ
てかうして神政成就の活動をして居るのぢやありませんか

お花「ソナ事は今更改めて聞かずとも耳が蛸になる程聞かして貰つて居ますワ。
能ある高姫と云ふたのではなく能ある鷹は爪かくすと云つたのですよ。ねえ、遍
路さま高姫ぢやありますまい」

「ちつと位違つたつて構はぬぢやありませんか。的きり妾の身魂の性來を歌つて
下さつたのだから、高姫だと思つて居ればよいのですよ」

「今のお歌に嫁がば夫を天とせよと仰有いましたが、貴女は、夫に對してテンと
貞操を盡して居ないぢやありませんか。久之助さまがあれ丈矢釜しくお止めなさ
るのも聞かず、守宮別さまと年が年中そこら中を飛び廻つて居られたではありません
せぬか。貴女は自分に都合のよい所ばかりとつてゐらつしやるのですなア」

「ヘン神界の御用と人間界と一所にして貰ふてたまりますかい。一家の婦人としてなれば兔に角、このお寅は三千世界の立替立直しの日の出神様の御用をする生宮ですよ。神の柱と人間と一所にしてたまりますか。お前さまも永らく日の出さまの教を聞きながら、何と云ふ分らぬ事を仰有るのです」

「ハイハイ、とても貴女のお口にはお花も叶ひませぬから、沈黙致しませう」

「もう此後はお寅の事に就ては何も云つて下さるな。何程龍宮の乙姫様の生宮だと云つても、日の出神の生宮に比ぶれば主人と奴程違ふのですからなア。モシモシ遍路さま、這入つて一服して下さいませ」

門に立つた男は「ハイ有難う」と深編笠をぬぎ捨て、つかつかと入り來たり、よくよく見れば、どこともなしに見覚えのある顔なり。

「ご免なさいませ、暫くお目にかかりませぬが、私は竹彦で御座いますよ」

「成程竹さまかいな。それならそれで何故名乗つて這入らぬのだい。一年ばかりも顔を見せなさらぬと思へば、一體どこへ行つて居ましたか」

「ハイ、別に何處へも行つて居りませぬ。餘り貴女方等の仰有る事がクレクレ變

るので信仰を破り今は浪華の土地で大道會と云ふものを開き、パンフレットを發行し、ルートバハ一の別働隊として活動して居るのですよ。此頃守宮さまが外國から歸られたと云ふ事を一寸新聞で見ましたから、お出でになつて居りはすまいかと思つて一寸偵察に來たのです。まだ見えて居りませぬかな」

「竹さま、随分久し振ぢやありませんか。お前もちつと日の出神の教を聞いたらどうです。守宮別さまも來て居られますよ」

お寅は慌てお花の口に手をあて、

「これお花さま、何呆けた事を云ふのだい。守宮別さまはまだお出にならぬぢやないか。大方夢でも見たのでせう。夢の守宮別と云ふからなア」

「ソナナラ矢張夢にして置きませうかいなあ」

「ハ、ハ、ハ、さうすると矢張り御大は歸つて來てゐるのだな。そいつは面白い、一つ大道會の會員となつて、パンフレットも書いて貰はうかなあ」

「これこれ竹さま、それはなりませぬぞや。水晶身魂の守宮別さまにその様な物質的のパンフレットの話しをして貰つて堪りますか。守宮別さまはパンよりもお

酒さけが好すきなのですよ。お前まへは日ひの出で神かみの教をしへを捨すててお蔭かげをおとしたパンフレットだよ。ちつと改かい心しんなされ」

「お寅とらさま、お前まへさまの云いふ事ことは何なにが何なにやらちつとも分わからないぢやないか。パンフレットと云いふ事ことは小冊子せうさつしと云いふ事ことだよ。薄うすい雑誌ざつしを發行はつかうして變性女子へんじやうによしの教をしへを世せか界かいに擴ひろめるのですよ」

「エ、【ざつし】もない何なんと云いふ馬鹿ばかな眞似まねをするのだい。お前まへさまはこれだけ曇くもつた三千世界さんぜんせかいをまだ此上このうへに曇くもらさうとするのかい。ちと改かい心しんして貰もらはぬと世界せかいの人民じんみんの苦くるしみが長ながくなるぢやありませんか。これだから變性女子へんじやうによしの教をしへを聞きくと碌ろくな事ことがででけぬと云いふのだ。あゝどいつもこいつも誠まことの人ひとは一人ひとりも無ないわい。日ひの出でさまも嘸骨さそほねの折をれる事ことだらう。底津岩根そこついはねの大ミロク様おほさまのお心こころがおいとしい哩わいのう」

と、豆絞まめしほりの手拭てぬぐひで涙なみだをふく。

かかる所ところへ守宮別やもりわけは醉よひがさめ「ア、、、、」と大おほきな缺伸あくびをしながらノコノコと出いで來きたる。竹彦たけひこは飛とびつくやうな聲こゑで、

「よう、守宮別さまか、ヤア都合のよい所でお目にかかった。これお寅さま、嘘

は云へますまい。直この通り後から化が現はれますからなあ」

「お花は小気味良ささうに、

フ、フ、フ、フ、

お寅はツンとし、

「エ、さうかいなア、アタ矢釜しい」と頭をしやくり居たりけり。

（大正一二・七・一三 舊五・三〇 加藤明子録）

第二章 妖行（一六五）

守宮別は、竹彦の顔を見て嬉しさうに、

「ヤア竹彦さま、よう来て下さいました。

相變らず日の出神崇拜をやつて居られ

ますかな」

「ハイ、日の出神の崇拜は層一層熱烈にやつて居ます。併し日の出神にもいろいろありましてねえ、私は此頃眞の日の出神を発見しましたので大道會と云ふのを開きパンフレット宣傳をやつて居ます」

「成程そいつは今日の時代に適した適當のやり方でせう。些と賣れますかな」

「ハイ、地黙社で毎號一千部ばかり印刷して居ますが、羽根が生えて飛んで行きますよ。お寅さまのお筆先とは餘程效力があるやうですわ。アハ、ハ、ハ、ハ」

「どうか私も一つ使つて頂き度いものですか。實の所はこんな古めかしい宣傳法はお寅さまの前だが嫌になつたのですよ。目先の見えぬ盲滅法のやり方では勞して效なく時勢におくれるばかりで約りませぬもの」

お寅は面膨らし、「かつか」になつて聲せわしく、

「これ竹さま、横田はりもの奴、守宮別さまを喰へて往のうと思つても、いつかないつかかな此お寅が離しませぬぞや。お前さまは精出して勝手にパンなど賣りなさい。これ守宮別さま、取違してはいけませぬよ。惡神が、お蔭を落させやうと

おも 思つて、いろいろと化けて變性女子の系統が來て居るのですよ。グツグツして居ると、尻の毛迄ぬかれて了ひますよ。お前さまはそんなに移り氣だから困るのだ」

「これお寅さま、何と云ふ開けない事を云ふのだい。お前さまも日の出神の生宮ぢやないか。世の中は日流れ月行き星移ると云ふぢやないか、天地惟神に移つて往くのが天地の教ぢやないか。守宮別の自由意志迄束縛して貰つちや困りますよ」

「お寅さまも守宮別さまがをられなくなつたので、些とは我が折れただらうと思つて居つたのに、矢張り、ちつとも動いて居りませぬなア。水でも餘り一所に停滯して居ると「ぼうふら」がわきますよ」

「こりや横田はり者の竹公、何を「つべこべ」と日の出神に向つて小言を吐くのだ。人民の知つた事かい。パン屋がこんな所へ來る所ぢやない。雑誌も無い事を云ふと御神業の邪魔になるからトツトと去んで下さい」

「私は守宮別さまに用があつて來たのだ。上海から手紙を貰つたので今か今かと待つて居たのだ。構うて下さるな。私は守宮別さまに會ひさへすればよいのだ」

「これ守宮別さま、お前さまは横田はり者の竹公の所へ行く氣か。これお花さま、

お前も何とかして加勢をせぬかいな。竹公の奴、喰へて行かうとしよるだないか」
横田、おつとどつこい竹彦さま、ちつと日の出神さまの仰有る事も聞いて置きなざるがよからうぞえ、後で後悔してもお花は知りませぬからなア」
「ヘン、構うて下さいますな。どうせ横役の先走りを勤めて居る横田はり者だから、お寅さまの氣に入りさうな事はありませぬわい。又お寅さまの乾兒になつた所で末の見込が無いから約りませぬでなア。それよりも守宮別さま、貴方は永らく世界漫遊をして居られたのだから、何か珍しい話を聞かして下さい。パンフレツトの材料にしたいのですからなア」
「ハイ、是非聞いて貰はなければならぬ事が御座いますよ」
と云はうとするのを、お寅は守宮別の口に手を當て、

「これはしたり、さうズケズケとこんな奴に喋るぢやありませんぞ。秘密はどこ迄も秘密です。これ竹公さま、守宮別さまをパンの材料にせうとは餘り蟲がよ過ぎるぢやありませんか。お前さまが此處に居ると空氣迄が汚れる。此處を何と思ふて御座る。誠生粹の水晶身魂の居る小北山の靈地で御座るぞ。四足身魂の來る

所ところでは御座ごまいませぬぞや」

「アハ、々々、此奴こいつは面白おもしろい、ま一杯酒いっぱいさけを飲のんで、此活劇このくわつげきを見たら甘うまからうなア。時ときに竹彦たけひこさま、上海シヤンハイで新聞しんぶんを見みた所ところ、小アジアせうのエルサレムにはキリストの再臨さいりんが近ちかづいた。日出島ひのでじまから救世主きうせいしゆが現あらはれるとか云いつて、大變騒たいへんさわいで居ゐるさうですよ。斯かういふ事ことをパンフレットにお出だしになれば、ずいぶん賣うれるでせう」

「ヤ、そいつはよい事ことを聞きかして貰もらひました。どうか詳くはしく原稿げんかうを書かいて下くださいな、酒手位さかてぐらゐは出だしますから」

「承知しょうち致いたしました。二三日中にさんにちぢうに書かいて郵送ゆうそう致いたませう」

お寅とらは聞耳ききみみたてて、

「何なに、救世主きうせいしゆが聖地せいちへ下くだるとな。そして日ひの出神でのかみが現あらはれるとな。そしてそれはどこの國くにから現あらはれると云いつて居ゐましたか」

「何なんでも上海シヤンハイで見みた、ロンドンタイムスの記事きじによると、日出島ひのでじまの桶伏山をけがせやまが東ひがしのお宮みや、パレスチナのエルサレムが西にしの宮みやだと云いふ事ことです。そして其西そのにしの宮みやに救世主きうせいしゆが御降臨ごかうりんになると云いつて大變騒たいへんさわいで居ゐます。ミロクの世よも餘程よほど接近せつじんしたと見みえ

ますわい」

「そして其救世主の名は分つて居るのかい」

「分つて居ります。その先走りとして聖地からブラバーサが疾うの昔に往つて居

るさうです。やがてウヅンバラチャンダーさまが救世主として現はれるのでせう」

「ヤアそれは大變だ。アンナ者が救世主にならうものなら世界は闇だ。肝腎要の

救世主は底津岩根の大ミロク様日の出神より無いのだ。エ、氣が利かぬ人だなア。

上海迄行つて居るのなら、モウ一步だ。一步先に行つて救世主は、小北山に現は

れて居るとなぜ演説をして來なかつたのかい。酒ばかり喰つて女に呆けて居るか

らこんな事になるのだ。ア、大事の事は矢張り人任せではいけない。サア是から、

日の出神の生宮が救世主として現はれませう。お花さま、曲彦さま、守宮別さま、

サア私に従いて來なさい。馬關から船に乗り朝鮮、支那を通りシベリヤを横斷し

て早く参りませう。グツグツして居ると又横役にアフンとする様な目に遭はされ

ますよ。エ、氣の揉める事だわい」

「どうか私も連れて往つて下さい」

「御同道を願へば結構ですな」

「これ守宮別さま、コンナ奴を連れていつてどうなりますか。絶対にお伴はなりませぬ」

「ハ、ハ、ハ、濟まんけれど吾々の兄弟分がチャンと先に行つて居るのだから、別につれて往つて貰はなくてもよろしい。瑞の御靈のお供して堂々と乗り込みませうかい。お寅さま、エルサレム迄行つて赤恥を搔いて來なさい。我もそこ迄張ると徹底して面白い。滑稽味があつて面白い。ウフ、ハ、ハ、」

お寅は夜叉の如くになり、

「エ、横田はり者の曲竹奴、汚らはしいわい」

と云ひ乍ら棕櫚箒で掃き出しプツプツと唾を吐きかける眞似をする。竹彦は餘りの事に開いた口もすばまらず、クツクツ笑ひ乍ら深編笠を被つて聖地に參るべく小北山の停車場へと歩を急いだ。後にお寅は不用の衣類や道具や、世界の大門と誌した鑄物の大火鉢迄賣飛ばし、兵站部を勤めて居る高山某から若干の旅費を受取り、漸く旅費を調べてお寅、お花、守宮別、曲彦の四人は小北山の停車場へと

急いそぎける。

(大正一二・七・一三 舊五・三〇 加藤明子録)

第五篇 山河異涯さんがいがい

第二三章 暗着あんちやく〔一六五二〕

名利めいりの欲よくに捉とらはれし
うろたへ騒さわぎ小北山こぎたやま
勢いきほひ込んで乗込のりこめば

男女なんによたり四人よたりの醜魂しこたまは
後あとに見みすてて汽車きしやの窓まど
轍わだちの音おとも轟々ごうごうと

大地をビリビリふるはせて 何の當途も嵐山

花園二條京都驛 西へ西へと向日町

上る山崎高槻や 大坂驛も乗越えて

出でゆく先は廣島や 馬關の關に立向ひ

轉覆丸に身を乗せて 漸く釜山に上陸し

京城平壤鴨緑の 橋を渡つて滿洲の

廣軌鐵道スクスクと 夜を日についで進み行く

二十餘日の汽車の上 漸く聖地に安着し

音に名高きエルサレム 市中をウロウロ迂路付きつ

一目散に橄欖の 山を目がけて驅上り

四邊の景色を見まはして 胸を躍らせ呆れゐる。

お寅はほつと息をつぎ、

ア、ヤレヤレ、ヤットの事で、八千哩の水陸を渡り、目的地點へ達しました。

何とマア桶伏山によく似た所ですな。併し乍ら山の具合と云ひ木の具合と云ひ、
どうも日の出島の桶伏山とはどこ共なしに物淋しいやうな氣がするではありませ
ぬか。又外國身魂を盛んに教育せうと思つて、大きな學校を建ててゐるだありま
せぬか。練瓦や石をたたんで、此結構な靈場をワヤにする奴は、何處の四つ足人
種だらうかなア」

守宮別は迷惑顔にて、

「コレコレお寅さま、さう大きな聲で云ふものぢやありませんか。あれはシオン
大學と云つて、世界の學者を集めて、世界の思想界を改良しやうといふ所ですよ。
つまり日の出守護にせうと云つて、ユダヤの學者や世界の博士等が寄つて經營し
てるのですよ。日の出島なら何を云つて居つても笑ひませぬが、言葉の通じない
斯様な所へ來て仕様もない事を云つては困りますからな。あなたは外國語が分ら
ぬのだから、何事も私の言ふやうにして下さい」

「ヘン、外國語が、何夫程有難いのだい。變性男子さまは此世の中をイロ八四十
八文字で何もかも治めると仰有つたのぢやありませんか。之から外國人に改心さ

してイロ八四十八文字の日の出島の言葉を覚えさしたら可いだありませぬか。それ丈の權威がなくて何うして三千世界の日の出神となれますか。お前さまも餘程分らぬことを云ふぢやありませんか。オホ、

「又「はしや」がれるのかなア。併し何ぼ「はしや」いでも、外國人に日本語の分る人が少いからマア結構だ。サア是からシオン大學の建築工事でも見せて貰ひませうかい」

「コレ守宮別さま、そんな氣樂なことをいつてる時でありますまい。早く、桶伏山からソツと隠れて來てゐるといふブラバーサの所在を捜し、談判せねば思惑が立ちませぬぞや」

かく話す所へシオン大學の創立者たるスバール博士が、ステツキをつき乍らやつて來た。守宮別は得意の英語で何だかペラペラと話しかけた。博士も極めて愉快に守宮別と握手し乍ら半時ばかり話してゐた。其要點は……守宮別が日の出島から救世主日の出神を送つて來たといふ大體の話であつた。スバール博士は眞面目に聞いてゐたが、しまひには吹出してニタツと笑ひ袂を別つたのである。守

宮別は此博士に認められなければ日の出神もダメだと思つたが、そ知らぬ面して平氣を装ふてゐた。お寅はスバル博士の姿が見えなくなつたのを幸ひ、又もや喋り出したたり。

「コレ、守宮別さま、チーチク、パーパーと雀のよなことをいつてゐたが、一體何をいつてゐたのだい。日の出神の救世主が御降臨だといふことをお前さまは言はなかつたのかい」

「ソナナことに如才がありますか。その爲にはるばる來たのではありませぬか。確に云ひましたよ。あの方はスバル博士といふて世界で有名な學者ですよ。あの人さへ分れば世界中の人間があなたを救世主と認めてくれますよ」

「何とマア神様のお仕組と云ふものは偉いものだなア。ここへ着くが早いか、スバル博士に會ふて日の出神を認めて貰ふとは本當に神さまも偉いワイ。ヘン、ブラバーサなんて、抜がけの功名をせうと思つて先へ來乍ら、何處の隅に居るかとも云はれてゐないとみえて、橄欖山に姿も見えぬぢやないか。どつかへ消滅したと見える。オホ、あた氣味の可い、だから日の出神に従へ……といふのだ。

コレ曲彦さま、お花さま、御神力が分りましたかな

「今來たばかりで根つから何も分りませぬ」

「エ、何といふ盲だいな。お花さま、お前は分つただらうな」

「何を云ふても英語を知らないものだから不便で御座いますワイ」

「そこが御神力でいくのだよ。イロ八四十八文字さへ使へば三千世界に通用する

のだからな」

「曲彦が考へると、現に此處では日の出島の言葉が通用せぬぢやありませんか。

イロ八四十八文字も可い加減なものですな」

「コレ、守宮別さま、二人の分らずやに、今の博士のことをトツクリと合點の行

くやうに言ふて上げて下さい。さうするとチツとは、目がさめるでせうから、今

あの博士が去んだから、やがて旗を立てて大勢で迎へに来るだらう。エへ、へ、へ、

「コレお寅さま、ダメですよ。さう今から喜んで貰ふと困りますがな」

「エ、何がダメだい。三千世界の救世主が現はれて來てるだないか。世界の學

者ともあるものが、ソナナことが分らぬと云ふことがあるものか。お前はそんな

こと云つて【いちやつ】かすのだらう、本當のこと云つて下さいな」

「本當の事云つたら、あなたビツクリしますよ。サア當山を下つて、どつかのホテルへ這入りませう」

「そして博士は何と云つたのだい」

「モウ云ひますまい。僞豫言者、僞救世主が澤山に来る世の中だから、お前さまも可い加減に目を醒ませと云ひました。何うもあの博士の云ふことには眞理があるやうです。こんな所迄來て恥を掻きました。何しろ日の出神は僞救世主ですからなア」

「エ、馬鹿にしなさるな。お前さまの云ひ様が悪いからだ。チーパーチーパーと小鳥の鳴く様なこと云つて、何分るものか。なぜモツと分る様に仰有らぬのだい。本當に仕方のない人だなア」

「何つかでウヰスキーでも一杯やらぬと元氣が生まれぬワ。一遍エルサレムの町迄行きませう、そこでゆつくり話しませう」

「一寸待つて下さい、何處ぞ此處らにブラバーサが潜伏して居るか知れぬから、

一遍彼奴に會うて面の皮をヒンむいてやらむことにや仕方がない。何でも彼奴がシオン大學の博士等に會うて邪魔をして居るに違ない。サアサア曲彦さま、お花さま、此山を小口から搜すのだよ」

「お寅さま、ブラバーサだつて、コンナ山ばかりに居り相なことはない。朝とか晩とかに一遍づつ參る位でせう。キツと何つかの宿に居るに違ありませぬワ」

「折角此處迄來たのだから、ソナナラ此處で一日の出神さまを御祈願して、歌でも詠んで、それからエルサレム迄一先づ行くことにしませう」

「モシお寅さま、日の出神を拜めと云ひなさるが、日の出神は貴女とは違ひましたかいな」

「エー合點の悪い、日の出神と云へば底津岩根の大彌勒さまを拜めと云ふことだかな。一を聞いたたら十を悟るのが大和魂ですよ。何から何迄教へてやらねばならぬといふのは、困つた男を連れて來たものだなア」

「それでもお寅さまの選によつた水晶魂が來たのだもの、さう小言を云つて貰ひますまいか。アタ阿呆らしい、こんな遠い所迄ついて來て、いきなり小言を聞か

うとは夢にも思ひませぬワイ、なアお花さま、本當にバカらしいぢやありませぬか。歌も口クによむ氣になりませぬがな」

「コレ曲彦さま、ここへ来た上はモウ仕方がない、守宮別さまとお寅さまの仰有る通りにするのだよ。言葉も分らず、神徳の足らぬ者は何と云つたつてダメだらう……神力の高いお寅さまと外國語の分つた守宮別さまに絶対服従するより途がありませぬワイ」

「何と云つても此處へ來れば此守宮別さまの天下だ。お寅さまもチツと我を折つて私の云ふことを聞きなされ。イロ八四十八文字も此處へ來ては餘り權威がありますまいがな。アハ、ハ、ハ」

「これ丈立派な日の出神が日の出島から御降臨になつてゐるのに、分らぬ奴ばかりとみえて、一人も歡迎に來ぬぢやないか。コレ守宮さま、お前さまの談判が悪いかからだ。モ一遍宣直して來なさい。それが厭ならブラバサを搜して、彼奴を博士の前であやまらすが宜しい。さうすりや一遍に信用が回復しますぞや」

お寅とら 〇海山うみやまをはるばる越こえて來きて見みれば

聞ききしに違たがふ橄欖かんらんの山やま 〇

お花はな 〇思おもひきや長ながい鐵路てつろを渡わたり來きて

山やまの上うへにて小言こごと聞きくとは 〇

〇コレお花はなさま、何なんといふ不足ふそくらしい歌うたをいふのだい。宣のり直なほしなさい 〇
〇ハイハイ、宣のり直なほさうと云いつたつて、乗車切符じやうしやくきつぷもなし、何どうするのですかい 〇
〇エー合點がってんの悪わるい、歌うたを言いひ直なほしなさいと云いふのだがなア 〇

お花はな 〇果はてしなき海山うみやま越こえてこがれたる

聖地せいちにやうやうつきそらの空そらかな 〇

「又ソナナことを言ひなさる、つきの空なぞと私は月は嫌ひだと何時も云ふぢやないか。丸くなつたり虧けたり、細くなつたり、出たり出なかつたりするやうな、變性女子的の月のことをいつて下さるな。何で日の出神を歌ひなさらぬか。コレ曲彦さま、お前一つ歌つて御覽……」

曲彦「日の出島あとに見すてて火の車

乗りて來たのは橄欖の山」

「ソリヤ何ぢやいなア。ソナナ腰拔歌がありますか」

「それでも私は力一パイ、知恵を絞り出してよんだのだから、餘り笑ふて貰ひますまいかい」

「エー、下手でも上手でもよい。日の出神のことを歌ふのだよ」

曲彦は、

☐ 日出づる國の御空を立出たる

お寅婆さまは目から日の出の神となる☐

☐ 何といふバカだらうかな。エーエー仕方がない、何事も人を力にするな、杖につくなと神様が仰有った筈だ。ドレ私が自ら詠んでみませう……

烏羽玉の暗をてらしてさし上げる

日の出神の光尊し

と、かういふのだよ☐

☐ あなたのいふ日の出神さまは日天さまのこつちや御座いませぬか、チツと可笑しいぢや御座いませぬかい☐

お寅☐ コラ曲彦、よく聞きなさい。此世界は元は一天さまがお造り遊ばしたのだ。そして一天様のお子様にご天月天とあるのだ。それを御三體の大神といふのだ。

併し月天さまといふのは盈虧のあるお月様だないよ。月天が行きましたかな。次が鍾馗さまの靈、其次が東方朔の身魂、此五つを合せて此世を五苦樂といふのだ。大の字の端々にをつけて御覽なさい、ヤツパリ五つになりませうがな」

末代日の王天の大神さまやユラリ彦さま、ミロク成就の大神さまは何うなつたのですか。東方朔なことを仰有いますな。それでも正氣で仰有るのですか。日天月天が行きませぬワイ。オツホ、、、」

「日の出島の言葉とは此處の言葉は違ふから名を變へたのだよ。英語を使ふ國へ來たら英語で言はなならぬからなア」

「へーエ、それでも英語ですかいな、曲彦には合點が承知しませぬワ」

「エーエ、ゴテゴテいひなさるな、サア一つ守宮別さまも歌ひなさい」

「私は英語で一つ歌つてみませう。極簡單によく分るやうにいひますから、氣をつけて聞いて下さいや……」

「チャパニース、セウホクザンノ、ヤンチャアバーサン、オー、トラワー、キンモークウビニー、ダー、マサレテー、ウミヤマヲコエ、ココマデヤツテキタノワー、

カワイ、ソー、ダゾヨー、オレモ、スバールハカセニアウテ、ニセモノトイフコトガワカリタノダゾヨ、ソレデアイソガツキターダカラ、ハライセニサケデモノンデヤロート、オモツテイルノダー、アータ、アホラシ、バカニ、シラレ、タゾヨ、イヒ、イヒ、ゝゝゝ、あゝ英語の歌も一寸六つかしいワイ」

「コレ、守宮さま、人が知らぬかと思ふて何といふ悪口をいふのだい。へん、そんな英語位分つて居りますぞや。私だつてその位の英語は立派に使つてみせますぞや。お前さまはヤケになつて酒を呑むと云つただらう。呑むと云つたつて、お金がなければ呑めますまい。チヤンと私が懐にしめこみてゐるのだから、一合づつ呑まして上げやう。お前さまに酒を呑ますと、泥に酔ふた鮎の様になつてチツとも間に合はぬからなア………エー氣分が悪うなつて來た。兔も角エルサレムの何つかで宿をとることにせうかい………皆さま、ついて來なされや」

と肩や尻をプリンプリンとふり乍ら不機嫌な面して山を降り行く。

(大正一二・七・一三 舊五・三〇 松村眞澄録)

第二四章 妖蝕（一六五三）

お寅外三人は漸くにしてカトリックの僧院ホテルの二階に宿泊する事となつた。折柄チンチンと鈴の音、けたたましく配達して来た新聞を一枚買つて守宮別は讀んで見た。

「ヤアお寅さま、えらい事が出て居ますよ。救世主の再臨に先立つて日の出島からブラバーサがやつて来たと言ふ記事が見えて居ますわい。随分もてたものですわい。こりやグツグツしてゐると吾々は駄目ですよ」

「何？ブラバーサの事が出て居るのかい。大方女にでも相手になつて、しくじつた記事でもなからうかな」

「何だか知りませぬが、伯爵の娘サロメと言ふ絶世の美人とアメリカンコロニーの牛耳を握つてるマリヤと云ふ女が橄欖山の上でブラバーサを引張凧にしてる記事ですわ」

「一ぺん讀んで下さいな」

「読んで英語で書いてあるのだからお前さまには分りますまい。バカに褒めて書いてあるからな。エーもう措きませうかい」

「分らなくてもお前さまは、そこをうまく譯して、わし等の耳に分るやうに讀むのだよ」

「エー、仕方がない。それでは譯して讀みませう。面倒臭いな」と云ひ乍ら新聞をお寅の前におき、

「エー、二號活字で見出しが「橄欖山上の聖劇」と書いてありますわい」

「聖劇と云ふのは何の事ぢやい？それを細こう説いて下さい」

「聖劇といったら聖劇ぢやありませんか。一旦日本語に譯して又日本語に譯さねばならぬと大變手間がとれますからな」

「ソナナ聖劇なんて……それは、英語でせう。日本語にソナナ言葉はない筈だ」
「エー、仕方がないな。お寅さま、聖劇と云ふのは結構な神さまのお芝居と云ふ

事だよ」

「成程、さうすると此日の出神の生宮が橄欖山上に降つて來たと云ふ事ぢやな」

「マア黙つて聞いて下さい。エー、月夜の夜、十二時頃橄欖山上に於て前代未聞の聖劇が演ぜられた、その登場役者と云ふのは基督の再臨に先だつて日の出島より派遣されたる神力無雙の神人、ブラバーサと云ふ紳士、ルートバハーの宣傳使として聖地エルサレムに數十日以前に到着され、今はシオン山の麓に草庵を結び聖業を朝夕修行せるもの、又一人の男は基督教の有名なる宣傳使、ヤコブと云ふ眉目清秀の青年である。女は某伯爵の令嬢サロメ姫の君にて、基督再臨を前知し、ヨルダン川の邊に建てるバハイ教のチャーチに參詣し、バハーウラー聖師の教を受け居れる淑女である。又一人の女はアメリカンコロニーの牛耳を執れるマリヤと云ふサロメ姫に劣らぬ容色端麗なる美人である。此四人は日出島より救世主の降臨する事を前知し、深夜に期せずして、橄欖山（靈山會場の蓮華臺）に現はれ、神政成就の大神業を修されたり。是等の二男二女は天下に先立つて基督の再臨を前知したる聖哲なれば、決してその言に詐りあるべしとも思はれず、品行極めて方正にして萬人の模範となるべき人格者である。ブラバーサの云ふ所を綜合すれば基督の再臨も最早遠からずとの事なり、神縁深きエルサレムの市民は

此四人の努力に感謝せざるべからず。實に稀代の神人と云ふべし。因に云ふ。ブラバーサは今やシオンの山麓に草庵を結び、神業に修行されつつあるは前記の如し。またサロメ姫はバハイ教のバハーウラーの別室に著述に耽りつつあり。ヤコブは今や僧院ホテルに滞在中なり。マリヤはアメリカンコロニーにあつて數多の信徒を教養しつつあり。基督再臨に就いて教を乞はむとするものは此四人の居所を訪ねらるべし』

と読み終り、

『お寅さま、何とブラバーサは偉い信用を受けたものぢやありませんか。もう日の出神も斯うなつちや駄目ですよ』

『何、それが御仕組だよ。これからそのサロメ、マリヤとやらを、うまく説き伏せ、ブラバーサの所在をつきとめて、ウーンと云ふ程往生さしておけば、ブラバーサが救世主は此お方ですと云へば、何もかも埒が明くのだよ。御神業と云ふものは凶を變じて吉となし、過を轉じて福となし、敵を味方にするのが一厘の仕組だよ』

「さう、貴方の考へ通り、うまく行くでせうかな」

「行かいでかな。成せば成る、成さねばならぬ世の中にならぬと思ふ人の愚さ」と云ふ古歌があるだらう。さあこれから千騎一騎の活動だ。時おくれは一大事だ。何は免もあれ、アメリカンコロニーとやらに行つて、そのマリヤに會ふて來やう。さうすればブラバーサの様子が大概分るだらう」

「日の出神さまなら、その位の事は尋ねなくても様子が分りさうなものですな」
「エー、やかましいわいな。又しても小理窟を云ふのかいな。サーサ、行きませう。ブラバーサに先にしてやられちや駄目ですよ」

曲彦はそばより、

「これお寅さま、天からきまつた救世主なら、さう騒がなくても向かふから歓迎してくれませよ。此方から自家廣告しても人が用ゐなければ駄目ですがな」

「コリヤ曲彦、そりや何を云ふのだい。今の世の中は自家廣告が肝腎だよ。自分の事は自分で現はさねば、自分の事は誰も認めて呉れませぬよ。死んでから千年も萬年も経つて認めて呉れても駄目だからな。これ、お花さま、お前もシツカリ

して下さらぬと、ここは戦場ですよ』

かかる處へボーイが西洋料理を持って来た。守宮別はボーイに「ビールを一打ばかり持つて来い」と命じた。暫くすると、澤山の皿やコップや、ビールを先繰り持つて来る。守宮別は目を細うし乍ら、涎をくつてビールの喇叭飲みをやつて居る。お寅は今迄喰つた事のない西洋料理を見て顔をしかめ乍ら、先繰り先繰り喰つてしまひ、

「あゝ、バタ臭い、コンナ聖地に牛の乳を飲ましたり、牛肉を喰はしたりするから駄目だわい。もう今日限り、皆さま西洋料理を喰はぬ様にして下されや。宜しかな。何だか気分が悪くなつて来ましたよ。人間は人間の喰ふもの、馬は馬の喰ふもの、猫は猫の喰ふ物ときまつてゐるのだ。馬や猫の喰ふものを人間が喰ふのはチツと無理だわい。まして日の出神の生宮にはこんなものは喰はれませぬわい。コレ、守宮別さま、もつと清潔な食物を次から持つて来る様に云つて下さい。今度はこれで宜いが、もう、こんな汚いものは喰ひませぬからな』

「ソナ事云つたつて、ここではこれより喰ふ物がありませんよ。辛抱しなさい』

「あゝ仕方がない、ソナナラこれからサア皆さま、コロニーとかへ行きますせう。さうして、ヤコブやマリヤに會ふて一つブラバーサの様子を聞きますせう」

「ブラバーサはシオン山の麓にゐると書いてあるぢやありませんか。ソナナ處に行かずに、直にブラバーサの處に行つては如何ですか」

「ハーテ分らぬ曲だな。なぜ日の出神の云ふ通りになさらぬのかい。サーサ、小荷物もここに預けて出掛ませう。これ守宮別さま、いい加減に飲んでおきなさい。また酔ひつぶれては肝腎の通辨が出来ませぬぢやありませんか」

「ママ待つて下さい。このうまいビールを飲まずには行けません。折角遠い所から來たのですから、ユツクリして明日又訪ねる事にしませう」

「エー仕方ない、ド倒しものだな。禪の川流れぢやないが【くひ】にかかつたら、チツとも離れはせぬわ」

守宮別はお寅の言葉を耳にもかけず、グイグイと喇叭飲みを初め、十二本のビールをスツカリ飲んで了ひ、又手を拍つてボーイを呼んだ。ボーイは慌だしく、段梯子を上つて來た。

「お客さま、何ぞ御用ですか」

守宮別は英語で、

「ビール、もう一打もつて来い、初めはおいしかったが、後ほどまづい奴を持つて来て、太い奴だ。もつとうまい奴を持つて来い」

「うまいのなら何程でもありますがチツと高價いですよ」

「高いと云つても知れたものだ。うまい奴を持つて来い。兵站部はお寅さまがつ

いてゐるからな。滅多に逃げも隠れもせぬわい。あゝ酔うた酔うた早く持つて来

い。おい曲彦、貴様もチツとやつたらどうだ。そんな貧相な顔してると誰も買手

がなくて貧乏神と間違へられるぞ」

と酔ふてソロソロ【ワヤ】口をたたき初めける。

（大正一二・七・一三 舊五・三〇 北村隆光録）

守宮別は酔がまはるにつれて一人ようがつて何もかも打忘れ、喋り出したり。
「おい、高姫の再来のお寅さま、眞黒々姫の再来のお花さま、曲彦の再来の、ヤツパリ曲彦さま、どうだい。ちつとビールでも飲んで浮く気はないか。エー、何だ、青い青い顔して心配さうに。酒飲めば何時も心が春めきて、借金取も鶯の聲。酒位笑顔のよいものはないわ。土堤ぎり、ここで散財やつたらどうだい。自分だけ飲んでも糞面白くもないわい。チャンダーをソレ……へ押込んだ時、住の江神社へ詣つて茶屋で祝ひ酒を飲んだ時のやうに、一つ「はしや」がぬかい。お寅さまとお花さま、お前さまも日の出島で、玉照彦様、玉照姫様の御結婚の後でチャンダーが、調べられてゐる留守の間にでもやつたぢやないか。あの時位愉快の事はなかつたさうぢや。運悪く俺はその時アよう行かなかつたけれど、お寅さまの話に一寸聞いた。どうだ、一つ此處でその時の気分になつて、やらうぢやないか」

「コレ、お寅さま、どうしませうか。肝腎の通辨が、こんな態では、私等はどうする事も出来ぬぢやありませんか。一層の事シオン山とかへ行つて、ブラバーサ

に會つて來た方が近道かも知れませぬぜ」

「そりやいけませぬ。神が一言申したら何時になつても變らぬと仰有るのだから、人民が勝手に豫定を變更する事は大變なお氣障りですよ」

「だと云つて、守宮別の酔が覺めるのをまつて居れば何時になるか知れませぬわ」

「アハ、ハ、ハ、駄目だよ駄目だよ、此新聞を見ても分つてるぢやないか。ブラバーサの信用と云ふものは大したものだ。到底之を轉覆させる譯には行きますまい。

又スバル博士もお前さまを偽救世主と云つてゐたから、何程シヤチになつても、アキませぬわい。それだから、ヤケ糞になつてビールを飲んでゐるのだ。オイ曲彦、貴様も飲めぬ口ではなし、一つ飲んだらどうだい。エー、訓狐と云ふ獸は、夜になると微塵の蟲でも見えるが、白晝になると目がくらむで大山さへ見ることが出来ぬと云ふ奴だが、お寅さまは何といつても金毛九尾の訓狐さまだから駄目だよ。もういい加減に思ひきつたらどうだい」

と悪胴を据ゑて、ぐぜり出した。お寅はいろいろとすかしなだめつ、守宮別の手を引張つて町外れのアメリカンコロニーさして訪ね行く事となつた。

行歩蹣跚と

して大道狭しと二人に兩手を引かれ、漸くコロニーの門口まで着いた。數多の老若男女は怪訝な顔して見つめてゐる。守宮別は、

「エー御免なさい。拙者は日出島から救世主日の出神のお供をして、ここ迄やつて来た者で御座います。ここには天下無雙のナイス、マリヤさまと云ふ方がゐられますかな。そして色男のヤコブさまといふ方が見えてゐるやうに今日都新聞で承はりましたが、御在宅ならば一寸會はして貰ひ度いものです」

マリヤは門口の騒々しいのに、何事ならむと立出で見れば見慣れぬ四人の男女が門口に立つて何事が囁いてゐる。マリヤはブラバーサに會つて餘程日出島の言葉を感じてゐた。それ故大體の意味は分るやうになつてゐた。

「貴方は何處からおいでになりました？支那からですか？朝鮮からですか？お見受け申しますと、よほど遠方の方と見えますが」

お寅は肩を聳やかし乍ら、稍反身になり、

「妾は日下開山、日出島の小北山の聖場に天降つた日の出神の生宮、底津岩根の大彌勒様の化身で御座いますよ。貴方達は日出島から救世主が此聖地へ降るとい

つて何十年も待つてゐられるさうですが、その救世主と云ふのは此肉の宮です
ら、その積で居つて下さいや。そしてお前さまは、あの身魂の曇つたブラバーサ
と云ふ男を大變信用してゐられるさうだが、あの男は「バチ」者ですよ。うつか
り相手にならうものならドエライ事になりますよ。女殺しの後家倒しと名をとつ
た悪性男ですからな。今日も新聞で見ますれば勿體ない……橄欖山上で何か芝居
をなさつたさうですが、ようもあのド倒し者と、阿呆らしい事をなさいますな。
オツホ、、、、」

マリヤはムツとして稍顔色を變へ乍ら、
「放つといて下さいませ。ブラバーサ様は貴女のやうな偽救主ぢやありませんよ。
今日の新聞を御覽になつたでせう。あんな聖人君子はメツタにありませんわいな」
「えらう又、御鼻屑ですな。大方性の悪い男だから、世間見ずのお前さまを
したのぢやありませんまいかな。あゝあ不品行の奴が来るから日出島の名譽に關す
る事をしてるかも知れない。コレ守宮別さま、お前さま、どう思ひますか」
「どうも思ひませぬわい。ラブ・イズ・ベストの流行る世の中だからな」

「それ又、何故ソナ怪體な事を云ひますか。もう、チーチーパーパーは止めて下さい。外國魂のマリヤさままでさへも、妾等に分る言葉を使つてるぢやないか。それだからいるは四十八文字で通用すると、變性男子のお筆に出てゐるのですよ。スバール博士なんて、つまらぬ事を云つてゐるは四十八文字が分らぬのかいな。本當に學者といふものは譯の分らぬものだわい。コレ、ブラバーサをここに隠してあるのでせう。うまい事、シオン山の麓に居る等と新聞に書かしたのでせう。新聞に何程よく書いたとて、アテになりますかい。握らせさへすれば、よく書きますよ。今の人間は皆新聞に騙されてゐるのだからな」

マリヤ「それでも新聞は社會の耳目といひますからね。間違はありますまい」

「さあ、社會の耳目だから、いかぬのだよ。今日の社會の奴等の耳や目は皆、死んだも同然だ。目があつても誠が見えず、耳があつても誠が聞えず、善が悪に見えたり聞えたり、惡が善に見えたり聞えたりするのだから新聞の記事なんか、アテになりますかい。そんな事ははずにトツトと出して下さい。グズグズしてゐると日の出神の生宮が踏み込んで家探しを致しますぞや」

守宮別はヒヨロヒヨロし乍ら、

「もうお寅さま、去にませうかい。駄目ですよ。どうも、ここにや居りさうにありませぬわい。それよりもホテルへ歸つてユツクリと一杯やりませう。こんな處へ立つて談判してるのも、氣がきかぬぢやありませんか。エー、ゲー、ウーウーあゝ苦しい苦しい、何と因果な婆アさまだらうかな。宿屋に居れば皆が慕つて來るのにな。あゝ一も取らず二も取らずだ。あゝ苦しい苦しい、こんな事して一人の男の後を追はねばならぬとは困つた事だな」

マリヤは眉毛を逆立て、

「エ、お寅さまとやら、お前さまはブラバーサさまの【レコ】ですか、それで遙々と後追つて來たのでせう。何とブラバーサさまも年とつた【レコ】を持たれたものだな。エーエ、妾も今迄騙されてゐたのか、クゝゝ、口惜しい！ トツトと去んで下され」

「ホゝゝゝ、阿呆らしい、誰があんな四足魂の後追ふて、惚て來る奴がありませんか。私には濟みませぬが守宮別……オツトドッコイ虎島久之助と云ふ大將軍様

と云ふ立派な肉の宮が御座いますぞや。へん、馬鹿にして下さるなや。ネーお花さま、貴女も一寸證明して下さいな」

「もしマリヤさま、初めてお目にかかります。私が今度日の出神のお伴して来たのは決してブラバーサさまを慕ふて来たのぢやないから安心して下さい。然し一度會ふて話しせねばならぬ事があるので来たのですよ。ブラバーサは何と云つてるか知りませぬが、あの男はウヅンバラチヤンダーと云ふ濁つた魂の教を受けた枉魂ですから、何云ふか分かりませぬ。あんな男の云ふ事を本當にしてゐれば、世間に顔出しが出来ぬ様になりますよ。一寸老婆心乍ら忠告して置きます。本當の救世主は今ここに居る底津岩根の大彌勒さまですよ。ようお顔を拜んで御覽なさい。どこともなしに違つて居りませうがな」

「ホ、ホ、ホ、ホに違つた所がありますわ。アトラスの様な……お顔に縦横の皺がよつて宛然地球儀の様で御座いますわ」

「マリヤさま、お前さまは餘程身魂が研けて居りますな。私の顔が地球儀に見えますかな。あ、さうでせうとも、全地球を救済する底津岩根の大彌勒ですものね。」

それだけ身魂が研けて居れば神政成就の太柱になれますぞや」

と、自分の顔を地球儀と悪口云はれて居り乍らも善意に解したのは面白い。

「これお寅さま、此の女はお前さまの悪口を云つたのですよ。チツト怒りなさらぬのかいな」

「それでもオトラスの顔と云ふたぢやないか。オトラスの顔は地球儀の様だと仰有つたのは地球一般に顔がうれると云ふ謎ですよ。何事も善意に解さなくては駄目ですぞや」

曲彦は吹き出し、

「アツハ、、、」

お寅は、

「これこれ曲ちゃん、何を笑ふのだい。チツト、たしなまぬかいな」

曲彦は又もこらへ切れず吹き出し、

「アハ、、、イヒ、、、」

守宮別も又、

「ウツフ、、、エへ、、、、」

マリヤは呆れて、

「ホ、、、、何とまあ、よう譯の分らぬ救世主だ事、定めて聖地の人々は尊敬されるでせう。左様なら、又来て下さいませと申上げたいが……二度と来て下さいますなや」

とピシヤツと戸を締め中から突張をかけて奥へ姿をかくしたりけり。

四人は是非なくブツブツ小言を云ひ乍ら、ヨルダン川の邊のチャーチを指して尋ね行く。

(大正一二・七・一三 舊五・三〇 北村隆光録)

第二六章 置去(一六五五)

守宮別一行は、路地や町はづれの野路を辿りながら、漸くにしてヨルダン河の

邊ほとりにつきぬ。

「これお寅とらさま、あのやかましいヨルダン河がはと云いふのは此河このがはですよ。よく見みておきなさい」

「何なんとまあ汚きたない河がはだこと。ヨルダン河がはヨルダン河がはと云いふからもつと廣ひろい河がはだと思おもつて居あたのに、是これでは小北山こぎたやまの麓ふもとを流ながる大井川おほゐがはの傍そばへもよれませぬよ。そして大井川おほゐがはの水みづは綺きれ麗いだが、この水みづとした事ことが話はなしにも何なんにもなりませぬわ」

曲彦まがひこは小才こさいらしく、

「大井川おほゐがはは大きいから大井川おほゐがはと云いふのですよ」

「これ曲まがやん、何なにを「つべこべ」とやかましく云いふのだえ。ソナラヨルダン河がはの譯わけを知しつて居あますか」

「ヨルダン河がはといつたら、ヨハネがバプテスマをキリストに施ほどこした所ところですよ。それだからヨハネのヨの字じを取とつてヨルダン河がはといふのですよ」

「アハ、ハ、ハ、ヨルダン河がはと云いふのは訛なまりだ。本當ほんたうはヨロダン河がはと云いふのだよ。かうして守宮別やもりわけがよろよると歩あるいて、ダンダンとバハイ教けうのチャーチへ進すすんで往ゆ

くと云ふ河だ。それだからヨロダン河だ。ア、何だか酒がさめて来よつたやうだ。どこぞ、ここにコツプ酒でも賣つて居る所はないかなア」
「エ、またしてもまたしても酒々と何ぢやいな。又用が濟みたらとつくりと飲まして上げるから辛抱しなさい」
「エ、仕方がない、女王さまの命令を遵奉せうかなア。何だ鳥の巢か何ぞのやうに、木の上に家を建てて居るわい。あれは天狗の家かも知れないよ。あまり小北山の天狗が澤山来たものだから、天狗の奴氣を利かしてあんな家迄建てて吾々を歓迎して居るわい。」

小北の山の天狗 萬里の波濤を乗り越えて

聖地をさしてやつて来る あつちやこつちやで頭うち

天狗の鼻の高姫も 今はさつぱり駄目ぢやぞえ

同じ仲間の天狗奴が いささか同情の涙して

ヨルダン河の竝木の枝に 巢をかけよつたに相違ない

ホンに世界に鬼はない 天狗ばかりの世の中だ

ドッコイシヨドッコイシヨ。

些と確りせなくてはなるまい。あすこに家がある。あれが大方バハイ教のお館だらう。これお花さま、今度はお前の番だよ。肝要の救世主に喋らしておく品格が下るからな。もしもし女王様、いやお寅婆アさま、今度は沈黙を守りなさい。

お花さまと曲彦さまが十分奮闘するのだな

「これ守宮別さま、お寅婆アさまなどと云ふて貰ふまい。徹頭徹尾日の出神と云ふのだよ」

「ハイ承知致しました。あゝ六ヶ敷事だなア」

と云ひながら早くもチャーチの前に着いた。團扇を片手にもつて絶世の美人が門口に石竹の花を弄りながら遊んで居る。これは有名のサロメ姫であつた。守宮別、曲彦兩人は艶麗な女の姿を見て目を細うし、口をポカンと開けて涎をたらたらと流し、顔の括約筋をすつかりほどいて居る。曲彦はド拍子のぬけた妙な聲で、

「モシモシそれなる御女中、貴女は有名なサロメさまぢや御座いませぬか」

「ハイ、左様で御座います。貴方方は遠國のお方と見えますが、このサロメに何

か御用でも御座いますかな」

お花は横柄な面をして、

「御用があればこそ日の出神の生宮、三千世界の救世主がお前さまを遙々お訪ね

下さつたのです。サア御案内なさい」

「ハイ、さうしてその救世主はいつ来られますかな」

「それ、ここにお出で御座います、此方です」

「へエ、此方が救世主で御座いますか。何とマア意外のお方で御座いますなア」

お寅は爰ぞと斗りシヤシヤり出で、

「意外でせうがな、意外の時に意外の人が現はれて意外の御用を致すぞよ」と昔

から豫言が御座いませうがな。その豫言に應はせむが爲に、意外の救世主が意外

に貴女を訪問したのですよ。時にサロメさま、今日新聞を拜見しましたが淑女の

身分をして、ド倒し者の、大きな目玉の、梟のやうな顔をしたブラバーサとやら

と、聖劇を遊ばしたさうですね。その事について御意中を承はりたいたいと思つて訪問つたのですよ。そして貴女は、本當に誰が救世主だと云ふ事が分つてお出でせうね。それが分らぬやうでは、何時迄此處で修業して居たつて駄目ですよ」

「此處は門口ですから奥へお這入り下さい。此處にはバハーウラー様と云ふ聖師がお出で御座います。其方にお目にかかつてとつくりお聞き下さいませ」

「お前様は日の出神の此救世主を認めますか。お認めなされば入つてもよろしい。その分らぬやうな色盲なら日の出神の生宮はさう軽々と這入りませぬぞや。お前さまの出やうによつては這入らぬ事もない。又お前さまの這入りやうによつては出ぬ事もない」

「ホ、ホ、ホ、貴女はどうかして居ますね。餘り此頃は陽氣が悪う御座いますから御用心なさいませ。癲狂院迄は随分遠う御座いますからねえ」

「癲狂院は日出島では一番高い山で御座います。日出島では天敎山と申します。その結構な高天原から天降つて來た日の出神の生宮ですからよく調べて下さい。何と云つても地球儀そつくりの私の顔だから………三千世界を自由自在にすると云

ふ私の顔だから一目御覽になつたら分るでせう」

サロメは吹き出し、

「オホ、へ、へ、へ、へ、へ、へ、」

曲彦は耐へ切れないやうになつて、

「何とまあ綺麗な別嬪だなア。まるで天教山の木の花姫様のやうだ……高姫さまよりこの方が救世主のやうだ。ナンボ高姫さまが救世主でも個人としては何の關係もない。もしも此方が曲彦の手でも握つて下さつたら本當に救世主様だ。私は蘇るのだが」

お花はムツとして言あらあらしく、

「何と云ふ不躰の事を云ふのだ。日の出さまの教にソナ事がありますか。些つと窺みなさい。アタ態の悪い……コレコレサロメさまとやら、あのド倒者のブラバ―サは此家に居りませうなア。貴女と一所に聖劇とやらをやつたと云ふ事だから、きつと隠して居るのでせう」

「ホ、何を仰有います。あのお方はシオン山の麓に居られます。橄欖山上で

四五回お目にかかっただけで御座いますわ。どうかシオン山をお尋ね下さいませ。左様なら」

とサロメは煩さく思つたか、門内に入り中から手早く門をかけて了つた。

「お寅さま、もう歸りませうかい。どうしてもこいつはシオン山に定つて居ますよ。それよりも早く歸つて、守宮別はビールでもやらねば體がもてませぬわい」

「そりやさうかも知れませぬ。サア歸りませう。グツグツして居ると日が暮れま
す。……今日はかういふておとなしく歸りそつと様子を考へに来るのだよ。あの
ブラバーサの極道奴、きつと此家に隠れて居るに相違ない。彼奴をとつつかまへ
てあの女の前でギウギウ云はせ、日の出神が救世主で御座いますと證言させねば
ならぬ。併し今日はもはや遅いから一たん歸り確りと作戦計畫を定めて、又参り
ませう。曲やん、お前はあの叢の中に隠れて様子を考へて居るのだよ。そして様
子を報告するのだよ」

「お寅さま、そいつは殺生です。私だつて一たん宿に歸り晚餐に有付かねばやり
切れないぢやありませんか」

「エ、弱蟲だなア、仕方がない、ソナナラ歸りませう」

茲に四人は日没頃僧院に歸つて來た。

「ヤレヤレ辛どい事だつた。嫌な洋食の晚餐でも食べてゆつくり相談ませう。

コレ守宮別さま、ビールを飲むなどは云はないが、せめて半ダース位で辛抱しなさい。今朝のやうに二ダースもやられると貧弱の私の懐が乾いて了ひますよ」

守宮別は手を打つてボーイを呼んだ。ボーイはハイと答へて忽ち此場に現はれた。

「早く晚餐の用意をして呉れ。そしてビールを半ダース、又半ダース持つて來るのだよ」

「ハイ承知致しました。然しビールは高う御座いますから今朝の勘定を願ひます。あの勘定が濟まなくては後を持つて來る譯には行きませぬ」

「サア勘定は幾何だな」

「ハイ些と高う御座いますが、あれは二百年以前から貯へてある最も貴重な高價なもので御座いまして、一本が百ポンドより安價く出來ませぬ。どうか二千四百

ポンド頂戴致したう御座います」

「何と高いものだなア。道理で甘いと思つた。サアお寅さま、お金を出して下さい」

「二千四百ポンドとは二錢を四百かな。さうすると八圓になるぢやないか。高いものだなア」

「モシモシボーイさま、冗談いつちやいけませぬよ。二千四百ポンドと云へば二萬四千兩ぢやないか」

「ハイ左様で御座います」

「エーイ、シ、知らぬわいな。ソナ金がどこに御座いますか。お前さまもなぜ先に値を聞いて飲まぬのかいな。もう愛想がつきて了つた。二萬四千兩なんて一ぺんに飲んで了ふものが何處にありますか」

「それでもそれだけの價値はありますよ。お蔭で十年位壽命が延びますわ」

「ヘン置きなさい。お前さまの壽命位延びたつて縮んだつて構ひますか。なぜ懐と相談して飲みなさらぬのだえ」

「懐と相談せうたつて無一物だ。お前さまが皆金は握つて居るのだから仕方がないぢやないか」

「ア、仕方がない、そんなら拂つて上げませう。これこれボーイさま、今直ぐに上げますから、もう半ダース程持つて来て下さい。一寸出すのが大層だから、その間に出しますからなア」

「ソナラ支配人と相談致して見ませう。さうして支配人が持つて往つてもよいと申しましたら持つて参りませう」

とボーイは階下に降り行く。後にお寅は面膨らし、

「これ守宮別さま、餘りぢやないか。私に恥を搔かすのか」

「三千世界を自由にする日の出神ぢやありませんか。いつも金位何だと仰有りますから、張りこみて飲んだのですよ」

「それだつて勿體ないぢやないか。なアお花さま」

「えらい剥ぐ所だなア。私吃驚致しました」

かく話す所へ、ボーイはビールを一ダースさげて来た。

「今支配人に申しましたら「滅多にお金に差支へある方ではなからうから」と申しましたから持つて参りました」

「よしよしそこへ置いて呉れ」

「又御用がありましたら呼んで下さい。晚餐の用意がありますから」

と階段を下つて行く。守宮別は一ダースのビールを喉をグウグウ鳴らしながら鯨が潮を飲むやうに飲み干し、其場にぐたりと倒れて寝て了つた。

「これ曲やん、お花さま、二萬四千兩の金はどうしても無い。やうやく懐に三百圓しかない。サア愚圖々々して居ては大變だから裏門からそつと逃げるのですよ」

「守宮別さまはどうするのですか」

「どうせうたつて仕方がないではないか。金が無ければ腹の中にビールが入つて居るのだから皆出すだらう。お花さまや私は一滴も飲まぬのだから、拂ふ義務はない、サアサア今の中にここを逃げ出し、シオン山のブラバーサの所へでも逃げて行かうではないか」

「日の出神さまが食ひ逃げを遊ばすのかなア」

「エ、どうでもよい。嫌ならここに居りなさい」
と云ひながら慌てて三百圓の財布を置忘れ、裏口から逃げ出して了つた。守宮別
は夜中時分に目をさまし四邊を見れば、お寅其他の姿が見えぬので小便にでも行
つたのかと思ふて又もやグウグウ寝て了つた。朝になつても三人の姿が見えない
ので、手を打つてボーイを呼んだ。

ボーイはペコペコしながら入り來たり、

「お客さま何か御用で御座いますか」

「私の連の三人はどこへ行つたかな」

「昨夜裏口から出て行かれました。こいつは食逃げではないかと思ひましたが三

百兩の大金が残されて居ましたから、先づ其儘にして置きました」

「ハテ、昨夜のビールのお金をどうして拂はうかなア」

「お客さま御心配なさいますな。夜前一本が百ポンドと云つたのは洒落ですよ。

實は一本が半ドルですから、どうぞ十二ドル下さいませ。そして昨夜のと一所に

して一八ドル下さればそれですみますからな」

「ハ、ハ、ハ、何の事だ、皆拂つてやらう。お前にもポチをやるから何ほでも掴んで往け。サア此金が無くなる迄此處に宿るのだから大切に世話をするのだよ」
守宮別は又一夜を此處に明かし宿の勘定を濟ませ、三人の所在をたづねてブラリブラリとシオン山の谷底めがけて進み行く。

（大正一二・七・一三 舊五・三〇 加藤明子録）

第二十七章 再轉（一六五六）

シオン山の谷間のブラバーサが草庵に靴音高く訪ねて来た一人の紳士は、シカゴ大學の教授スバル博士であつた。博士は「御免なさいませ」と柴の戸を排して這入つて来た。ブラバーサは嬉しげに出で迎へ、狭い座敷の奥へ通しけり。
「ヤアあなたは橄欖山上でお目にかかりました博士で御座いますか。かやうな草庵を能くマア訪ねて下さいました」

「ハイ一寸お伺ひし度いことが御座いますので参りました。實の所は私もシカゴ大學の教授を致して居りますが、今度シオン大學の建設に就て委員に選まれ監督の爲に茲二ヶ月ばかり以前から参つて居るので御座います。付いては私は日の出島は隅から隅迄二三回も旅行を致し、神社佛閣を巡拜しお札博士と名を取つた男でゝいますよ。あなたは桶伏山の聖地から來たと仰せられましたが、私も一度ルトバハ一の本山に参拜致し教主に直接お目にかかり、言靈閣に於てお世話になつた事がゝいます。何だかルトバハ一の宣傳使と承はりますればなつかしいやうな氣が致しまして、一度お尋ね申したいお尋ね申したいと思つてゐましたが、忙しい爲つゝ其機を得ませぬでした。然るに二三日以前の夕方、日の出島より守宮別と云ふ男が三人の男女を従へ参りまして、日の出神の救世主だとか、大ミロク様だとか何とか申し、そして貴方のことを偽宣傳使などと悪く云つてゐましたよ。そこで私がいろいとあなたの爲に辨解を致しておきましたが、何と云つても聞かないものですから、相手にならず別れた次第ですが、ありや一體ドンナ人でゝいますか。一遍お尋ね致したいと思つてゐましたが、今日は幸ひ日曜日の

ことでもありお邪魔を致しました次第でムいます」

「ハテナ、守宮別と云ふ男が来て居ましたか、ソリヤ大方お寅といふ五十格好の婆アさまと一所ぢやムいませぬか」

「何でもお寅さまにお花さま、曲彦とか言はれたやうに覺えて居ります。そして再臨のキリスト、ミロクの再生は此の婆アさまだと言つて、守宮別さまが固く固く主張して居りました。餘程あの連中さまは變つて居りますなア」

「大方私が此方へ来たことをかぎつけて邪魔しに來たのでせう。どこ迄も執念深い連中です。本當に困りますワ」

「さぞお困りでムいませう。併しあなたはキリストの再臨に就てお出になつたといふ先達のお話でしたが、私は世界各国を廻りましたが、印度にも支那にも日本にも露國にも又南米、メキシコにも救世主が現はれてをりますよ。何れどつかの或地點に救世主がお集まりになつて國會開きをお始めにならなくては眞の救世主が人間としては分らないと思ひます。あなたは何う思ひますか」

「兔も角世界の救世主が一所へお集まりになり、其中で最も公平無私にして仁慈

に富める御方が眞の救世主と選ばれるでせう。イスラエルの十二の流れから一人づつ救世主が出るといふことです。其中から大救世主が出現されることと思ひます」

「成程それは公平なる見解です。そして御降臨の場所はどこだとお考へですか」
「無論私はエルサレムだと思つて遙々茲へ参つたのでムいます」

「成程聖書の豫言によりますればエルサレムでせうが、併し救世主は何處へお降りになるか分りますまい。私は決してエルサレムと限つたものとは思ひませぬ。或は日出島へ現はれ玉ふかも知れませぬ」

「さうかも分りませぬなア」

かく話して居る所へスタスタやつて來たのはお寅、お花、曲彦の三人なりける。あゝ、どうやらかうやら隠れ家を見つけた。これも矢張り日の出神のお導き、ヤレ御免なされ、お前さまはブラバーサさまだ。日の出神の救世主が二三日以前から橄欖山に御降臨になつたのを御存じですか。ヤ、そこに居る毛唐さまは此の間橄欖山上で守宮別とチーチーパーパー云ふて居た博士だムいませぬか。マア

マア因縁いんねんといふものはエライものだな。又またこんな所ところで會あはうとは思おもひもよりませなんだ。コレ毛唐けたうさま、お前まへさま又また此このブラバーサにだまされて來きなさつたのかな。チト用心ようじんなさいませや」

スバールはうるさ相さうな顔かほをし乍ながら、日出島ひのでしまの言葉ことばを使つかつて、

「ヤアお前まへさまはルートバハ一の教をしへをませ返かへしに廻まはつてる、あの有名いうめいな小北山こぎたやまのお寅婆とらばアさまだな。そして一人ひとりは曲彦まがひこ、それからお花はなといふ剛がうの者ものだらう、イ、かげんに落着おちつきなさらぬと此この聖地せいちには相手あひてになる者ものがなくなりますよ」

「何なんとマア流石さすがに博士はかせだワイ。イロ八四十八文字しじふはちもじの言葉ことばが使つかへるやうになりましたな。此間迄このあひだまでよつあしとりか鳥とりのやうにチーチーパーパー云いふて居をつたのに、日ひの出神でのかみに一目會ひとめあふたお蔭かげに眞人間まにんげんの言葉ことばが使つかへるやうになつたのかな。コレお花はなさま、曲まがやん、これでも日ひの出神でのかみの神力しんりきが分わかりましたらうがなア」

「何なにしろ夜拔食よぬけくひに逃げの張本人ちやうほんにんだから偉えらいものですワイ」

「コレ曲まが、ソリヤ何なんといふ事ことをいふのだえ」

「それだつて事實じじつは事實じじつですもの、仕方しかたがありませぬワ。もし、ブラバーサさま、

どうぞ私をあなたの弟子にして下さいな。實の所はお寅さまがお金をおとし、吾々三人は無一物ですから、二進も三進も仕方がないのです」

ブラバーサはニタリと笑ひ乍ら、

「日の出神様も、お金がないとヤツパリ、お困りですか。私も淋しい懐だからお金を貸して上げる譯にも行きませぬが、マア暫く茲にをって、味ないものでも喰べてお金の来る迄お待ちなさいませ。電報さへうてば二十日も立たん内に届きますからな」

「ヤア大變御邪魔を致しました。何れ今度の日曜にはトツクリとお目にかかり御話をさして頂きます。今日は用事も少し急ぎますから御免を蒙りませう」

「折角お越し下さいまして、何の御愛想も致さず失禮を致しました。今度お足を運ばしてはすみませぬから、私の方からお訪ね致します」

博士は、

「左様ならば後日お目にかかりませう。皆さま、御ゆっくりなさいませ」と早くも此場をスタスタと立去つた。

お寅、お花、曲彦の三人は異郷の空に懐空しく何となく淋しくなり、知己と云ふて別になければ、反對で憎うてならぬブラバーサの寓居に世話にならうと覺悟をきわめワザとおとなしく、ブラバーサの言に従ひ、何事もへへハイハイと猫をかぶつて、表面歸順した如く見せかけてゐた。其翌日の日の暮頃守宮別は二百五十圓の金を懐にねぢ込んで茲へ訪ねて來た。

「御免なさいませ。ブラバーサ様のお宅はここでムいますかな」

「ハイどなたか知りませぬがお這入りなさいませ」

「あの聲は守宮別さまぢやないか、サアサア早うお這入りなさい」

「あゝ御免なさいませ、お寅さま、あなたはヒドイですな。本當に油斷のならぬ悪性な人だ。オイ曲彦、お花さま、人を置去にして餘り友情がなさすぎるだないか」

「兩人は一言もなくウツムク。」

「それだと云つて、二萬四千兩の金が何うして拂へるものか。お前は又夜脱けを

して来たのかな。よう出られたものだなア」

「お前さまが財布をおいといてくれたおかげで、スツカリ勘定をすまして歸つて来ましたよ。サア茲に二百五十兩計り残つてるからお前さまに返します」

「あのお金は何うして勘定したのだい」

「何分一ダースが六弗よりせないものだから、何もかもお前さまの分まで拂うて二十五弗ですみましたよ」

「あゝさうだつたかいな。何とした、あの奴さまは間違つた事を云つたのだらう。マア二百五十兩あれば少時大丈夫だ。國許へ電報かけさへすれば送つてくれるかな。ヘン、今迄耳の痛い話を、御無理御尤もでブラバーサさまに聞いてみたが、モウ誰が聞くものか。コレ、ブラバーサさま、救世主は瑞の御靈だといひましたが、あんな奴が救世主になつてたまりますかい。キユキユ世の中を苦める救世主のキウの字は貧窮の窮の字でせう。オホ、、、」

とソロソロメートルを上げ出した。

「何うなつと勝手になさいませ。事實が證明致しますからな」

「サア三人さんにんの御連中ごれんちゆう、コンナ所ところに居をらぬと早くはや聖地せいちへ行きませう。そして最早工もはやルサレムの町まちに誰憚たればかる所ところないのだから、私わたしは之これから橄欖山かんらんざんに登のぼつて救世主きうせいしゆになるから、お前まへたち三人さんにんは町中まちぢゆうをふれて歩くあるのだよ。左様さやうなら、何れ事實じじつが證明しやうめいしなすからな。なア、ブラバ―サさま」

とプリンプリンと大おほきな團尻だんじりをふり羽はばたきし乍ながら歸かへり行く。

（大正一・二・七・一三 舊五・三〇 松村眞澄録）

（昭和一〇・三・九 於臺灣航路吉野丸船室 王仁校正）

））））））））））

靈界物語 第六四卷上 山河草木 卯の卷上

終り